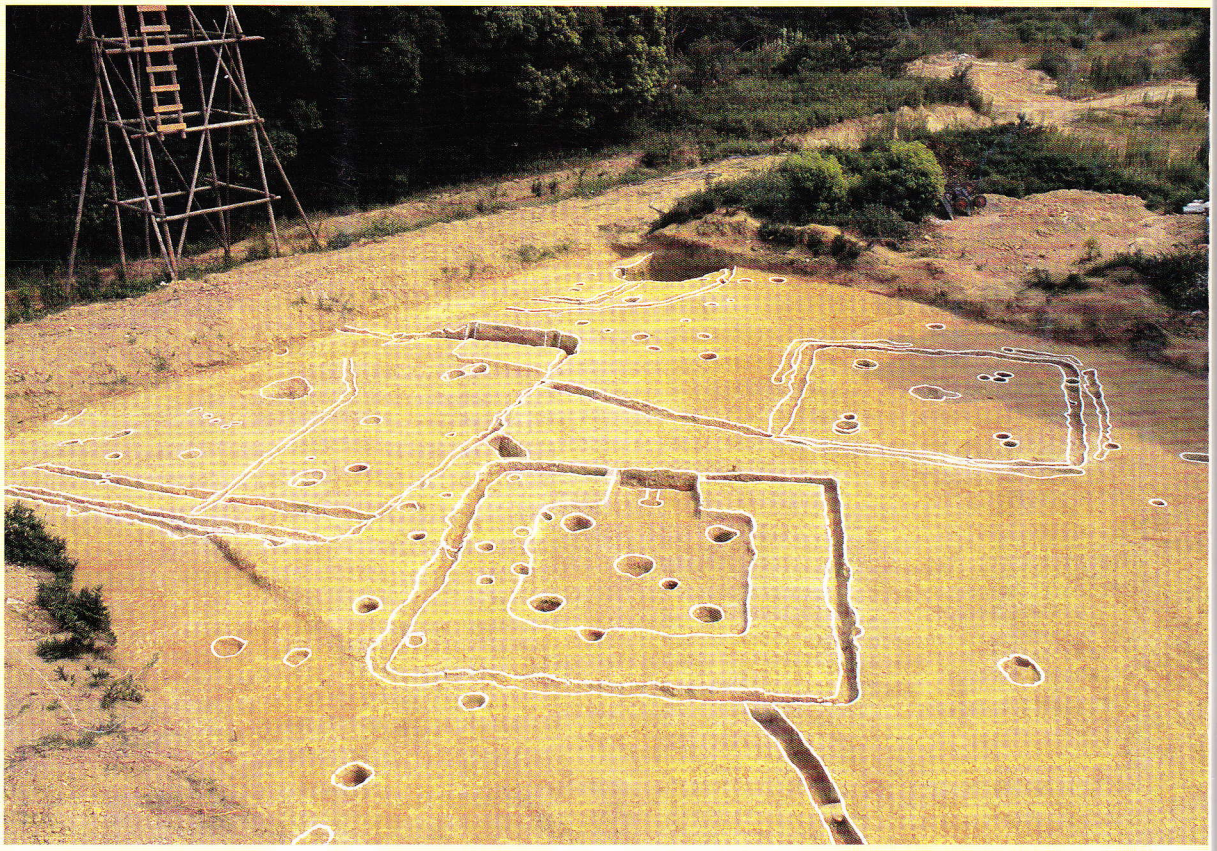
和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 6

－ 平成 8 （1996）・ 9 （1997）年度 －

史跡和歌山城　第17次調査



府中Ⅳ遺跡　第２次調査

2000

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

本年報は、主として本財団が平成８・９年度に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

弥生時代の調査は太田･黒田遺跡で竪穴住居３棟などを検出し、赤色顔料の付着した石杵など重要な資料が出土しました。古墳時代では、府中Ⅳ遺跡で県下最大級の平面規模を測る竪穴住居を検出した他、友田町遺跡で竪穴住居・大溝群などを検出しました。鎌倉時代では、木ノ本Ⅲ遺跡で和鏡を埋納した土葬墓、江戸時代では和歌山城創建期の石垣構造などを明らかにすることができました。

以上、本財団の調査による新たな学術調査成果は郷土の古代史を語る上でなくてはならない視点を与えることになりました。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜わりました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成12年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　伊　藤　　明

例　言

1．本書は、平成８（1996）・９（1997）年度に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載するものである。

2．本書に掲載の調査について、既に報告書を刊行したものもある。未完のものについては報告書が刊行された際には、その報告書をもって正式報告とする。

3．本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に氏名で記載し、編集は北野隆亮が行った。

4．埋蔵文化財発掘調査は以下の事務局組織で行った。

【事務局組織（埋蔵文化財関係）】

【平成８年度】

和歌山市教育委員会

教育長	坂口全彦
文化振興課長	志岐忠一
文化財班長	森田安信（～平成８年７月）
文化財班長	小松堉甫（平成８年８月～）
学芸員	前田敬彦
〃	益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	木下正昭
事務局長	竹尻圭吾
総務課長	別院　稔
事務主任（埋蔵文化財事務担当）	酒井　剛
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	北野隆亮
〃（〃）	井馬好英
〃（〃）	木建正宏
〃（〃）	奥村　薫
〃（〃）	栗本美香
〃（〃）	高橋方紀（平成８年４月～）

【平成９年度】

和歌山市教育委員会

教育長	坂口全彦
文化振興課長	志岐忠一
文化財班長	小松堉甫
学芸員	前田敬彦
〃	益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	木下正昭
事務局長	竹尻圭吾
総務課長	別院　稔
事務員（埋蔵文化財事務担当）	奥野勝啓
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	北野隆亮
〃（〃）	井馬好英
〃（〃）	木建正宏
〃（〃）	奥村　薫
〃（〃）	栗本美香（～平成９年３月）
〃（〃）	高橋方紀
〃（〃）	吉田綾子（平成９年７月～）

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに

1．平成８（1996）年度の調査……1

2．平成９（1997）年度の調査……2

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

【平成８（1996）年度】

1．太田・黒田遺跡第34次調査……4

2．史跡和歌山城第15次調査……8

3．太田・黒田遺跡第35次調査……12

4．府中Ⅳ遺跡第２次調査……14

5．井辺遺跡第２次調査……16

6．太田・黒田遺跡第36次調査……20

7．史跡和歌山城第16次調査……22

8．井辺遺跡第３次調査……24

9．井辺Ⅱ遺跡発掘調査……26

10．和歌山城跡第６次調査……28

11．史跡和歌山城第17次調査……34

12．太田・黒田遺跡第37次調査……38

13．和歌山城跡第７次調査……40

14．和田遺跡発掘調査……44

15．太田・黒田遺跡第38次調査……46

16．神前遺跡発掘調査……48

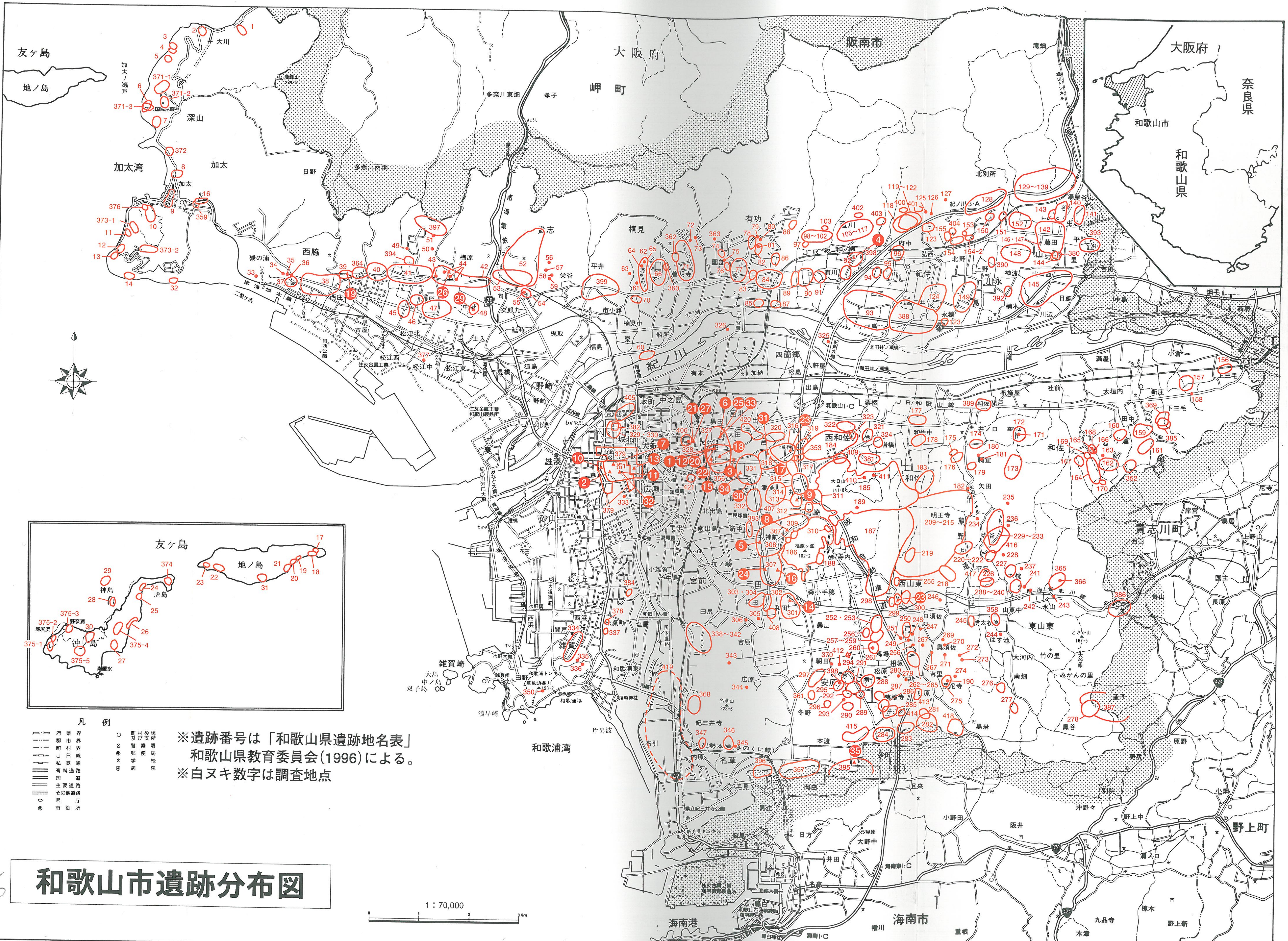
17．鳴神Ⅴ遺跡第４次調査……56

18．太田・黒田遺跡第39次調査……58

19．平ノ下遺跡発掘調査……60

【平成９（1997）年度】

20. 太田・黒田遺跡第40次調査……62
21. 友田町遺跡第２次調査……64
22. 太田・黒田遺跡第41次調査……66
23. 鳴神Ⅳ遺跡第９次調査……68
24. 神前遺跡第２次調査……72
25. 太田・黒田遺跡第42次調査……74
26. 木ノ本Ⅲ遺跡第９次調査……76
27. 友田町遺跡第３次調査……78
28. 西吉礼遺跡発掘調査……80
29. 中野遺跡第２次調査……82
30. 秋月遺跡第７次調査……84
31. 鳴神Ⅴ遺跡第５次調査……86
32. 史跡和歌山城第18次調査……88
33. 太田・黒田遺跡第43次調査……90
34. 秋月遺跡第６次調査……92
35. 岡村遺跡第２次調査……94
Ⅲ．普及啓発活動……96



和歌山市遺跡分布図

※遺跡番号は「和歌山県遺跡地名表」
和歌山県教育委員会(1996)による。
※白ヌキ数字は調査地点

6

この地図の作成に当っては建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図及び５万分の１地形図を使用しました。(測量法第30条に基づく成果使用承認平５近使第19号)
この地図の無断複製を禁じます。1993-9

和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会〈1996年〉より作成。）

遺跡番号	名称
1	報恩講寺遺跡
2	大川西方遺跡
3	藻江遺跡
4	しょうぶ谷遺跡
5	水谷遺跡
6	男良の谷遺跡
7	深山遺跡
8	大谷川遺跡
9	加太遺跡
10	加太南遺跡
11	平の谷遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡
14	船出遺跡
16	加太駅北方遺跡
17	藻崎北浜遺跡
18	藻崎南浜遺跡
19	藻崎西方遺跡
20	神前東浜遺跡
21	神前西浜遺跡
22	屋敷浜遺跡
23	おそ越の鼻遺跡
24	一色谷遺跡
25	柏の浜遺跡
26	深蛇池遺跡
27	垂水遺跡
28	神島遺跡
29	沖の島北方海底遺跡
30	野奈浦遺跡
31	ハイブの浦遺跡
32	浜遺跡
33	磯ノ浦1号墳
34	磯ノ浦2号墳
35	磯ノ浦3号墳
36	磯ノ浦4号墳
37	磯脇遺跡
38	西庄遺跡
39	平ノ下遺跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡
42	木ノ本Ⅲ遺跡
43	木ノ本経塚
44	釜山古墳群
45	木本小学校Ⅰ遺跡
46	木本小学校Ⅱ遺跡
47	榎原遺跡
48	中野遺跡
49	城山古墳
50	権現山1号墳
51	権現山2号墳
52	高芝遺跡
53	高芝古墳群
54	栄谷貝塚
55	貴志古墳
56	川原崎遺跡
57	川原崎1号墳
58	川原崎2号墳
59	川原崎3号墳
60	国有本遺跡
61	大谷古墳
62	晒山古墳郡
63	慶円寺裏山古墳
64	晒山11号古墳
65	晒山12号古墳
66	雨が谷古墳群
70	楠見遺跡
71	鳴滝古墳群
72	奥出古墳
73	有功経塚
74	薗部Ⅰ遺跡
75	薗部古墳
76	薗部Ⅱ遺跡
77	有功遺跡
78	池田遺跡
79	有功古墳
80	大同寺墳墓
81	大同寺古墳
82	大同寺遺跡
83	法然寺遺跡
84	六十谷遺跡
85	和田遺跡
86	西辻遺跡
87	川口遺跡
88	六十谷古墳群
89	直川遺跡
90	直川廃寺跡(明光寺跡)
91	高井遺跡
92	鳥井遺跡
93	田屋遺跡
94	府中Ⅱ遺跡
95	府中Ⅲ遺跡
96	府中遺跡
97	北山Ⅰ遺跡
98	北山1号墳
99	北山2号墳
100	北山3号墳
101	北山4号墳
102	北山5号墳
103	北山Ⅱ遺跡
104	北山6号墳
105	直川八幡山1号墳
106	直川八幡山2号墳
107	直川八幡山3号墳
108	直川八幡山4号墳
108－2	直川八幡山14号墳
109	直川八幡山5号墳
110	直川八幡山6号墳
111	直川八幡山7号墳
112	直川八幡山8号墳
113	直川八幡山9号墳
114	直川八幡山10号墳
115	直川八幡山11号墳
116	直川八幡山12号墳
117	直川八幡山13号墳
118	八王寺山古墳群
119	橘谷Ⅰ遺跡
120	橘谷Ⅱ遺跡
121	橘谷Ⅲ遺跡
122	橘谷銅鐸出土地
123	弘西遺跡
124	北田井遺跡
125	別所1号墳
126	別所2号墳
127	別所3号墳
128	上野古墳群
129	山口1号墳
130	山口2号墳
131	山口3号墳
132	山口4号墳
133	山口5号墳
134	山口6号墳
135	山口7号墳
136	山口8号墳
137	山口9号墳
138	山口10号墳
139	山口11号墳
140	山口廃寺跡
141	中筋日延遺跡
142	山口遺跡
143	谷遺跡
144	里遺跡
145	川辺遺跡
146	藤田古墳
147	硲古墳
148	藤田遺跡
149	宇田森遺跡
150	上野廃寺跡（紀伊薬師寺跡）
151	上野遺跡
152	上黒谷遺跡
153	北野窯跡
154	北野遺跡
154－2	北野Ⅱ遺跡
155	若宮池遺跡
156	上三毛遺跡
157	下三毛遺跡
158	小山古墳
159	寺山古墳群
160	東国山古墳群
161	宮山古墳群
162	小倉古墳群
163	小倉9号墳
164	明楽古墳群
165	小倉神社1号墳
166	小倉神社2号墳
167	モント古墳群
168	小倉神社境内遺跡
169	金谷遺跡
170	奥池遺跡
171	高積山遺跡
172	薬徳寺跡
173	城ケ峯城跡
174	禰宜Ⅰ遺跡
175	禰宜Ⅱ遺跡
176	禰宜貝塚
177	河南中学校北方遺跡
178	和佐中遺跡
179	和佐寺跡
180	禰宜1号墳
181	禰宜2号墳
182	和坂古墳
183	和佐古墳群
184	花山古墳群
185	岩橋千塚古墳群
186	井辺前山古墳群
187	寺内古墳群
188	森小手穂遺跡
189	寺内ナイフ形石器出土地
190	頭陀寺ナイフ形石器出土地
209～215	山東古墳群
218	若林古墳群
219	吉礼砂羅谷窯跡
220	平尾1号墳
221	平尾2号墳
222	平尾3号墳
226	楠古墳群
227	足守神社古墳群
228	赤山古墳
229	塩谷1号墳
230	塩谷2号墳
231	塩谷3号墳
232	塩谷4号墳
233	塩谷5号墳
234	新出古墳
235	明王寺経塚
236	矢田古墳
237	北池古墳
238	殿山1号墳
239	殿山2号墳
240	殿山3号墳
241	土井山古墳
242	丸山古墳
243	高岡古墳
244	桜山古墳
245	伊太祈曽神社古墳群
246	チショ古墳
247	城ケ森1号墳
248	城ケ森2号墳
249	城ケ森3号墳
250	城ケ森遺跡
251	相坂古墳
252	千石山5号墳
253	千石山古墳群
254	菖蒲谷遺跡
255	吉礼Ⅲ遺跡
256	千石山遺跡
257	井戸1号墳
258	井戸2号墳
259	井戸3号墳
260	馬場古墳
261	馬場遺跡
262	東池1号墳
263	東池2号墳
264	東池3号墳
265	東池4号墳
266	吉里銅鐸出土地
267	小山古墳
268	奥須佐窯跡
269	円満寺古墳
270	峯古墳
271	西光寺窯地
272	吉里1号窯跡
273	吉里2号窯跡
274	頭陀寺古墳
275	頭陀寺遺跡
276	大将軍窯跡
277	有ノ木窯跡
278	宝光寺跡
279	松原1号墳
280	松原2号墳
281	滝ケ峯古墳群
282	滝ケ峯遺跡
283	薬勝寺南山古墳群
284	仁井辺遺跡
285	薬勝寺跡
286	薬勝寺遺跡
287	松原Ⅰ遺跡
288	松原Ⅱ遺跡
289	薬師谷遺跡
290	江南遺跡
291	曽垣田遺跡
292	曽垣田Ⅱ遺跡
293	曽垣田古墳
294	城ノ前Ⅱ遺跡
295	城ノ前Ⅰ遺跡
296	大池遺跡
297	赤津古墳群
298	吉礼貝塚
299	西吉礼遺跡
300	東吉礼遺跡
301	和田遺跡
302	和田岩坪遺跡
303～304	和田古墳群
305	竈山神社古墳
306	坂田地蔵山古墳
307	神前遺跡
308	井辺遺跡
309	岡崎縄文遺跡
310	森小手穂埴輪窯跡
311	大日山Ⅰ遺跡
312	井辺Ⅰ遺跡
313	井辺Ⅱ遺跡
314	鳴神Ⅱ遺跡
315	鳴神Ⅲ遺跡
316	鳴神Ⅳ遺跡
317	鳴神貝塚
318	鳴神Ⅴ遺跡
319	音浦遺跡
320	鳴神Ⅵ遺跡
321	岩橋遺跡
322	栗栖Ⅰ遺跡
323	栗栖Ⅱ遺跡
324	高橋神社遺跡
325	紀ノ川銅鐸出土地
326	有本銅鐸出土地
327	太田・黒田遺跡
328	吉田窯跡
329	鷺ノ森遺跡
330	鷺ノ森窯跡
331	秋月遺跡
332	津秦遺跡
333	岡の里古墳
334	関戸遺跡
335	関戸古墳
336	天神山古墳
337	秋葉山貝塚
338	アンドの鼻古墳
339	三田1号墳
340	三田2号墳
341	三田3号墳
342	三田4号墳
343	吉原古墳
344	広原古墳
345	内原古墳
346	内原遺跡
347	名草貝塚
350	高津子山古墳
352	金谷廃寺跡
353	興徳寺跡
356	太田城跡
357	山崎山古墳群
358	山東中遺跡
359	加太Ⅱ遺跡
360	雨が谷遺跡
361	冬野遺跡
362	鳴滝遺跡
363	園部円山古墳
364	西庄Ⅱ遺跡
365	永山遺跡
366	永山古墳
367	井辺Ⅲ遺跡
368	紀三井寺遺跡
369	奥山田遺跡
370	朝日石槍出土地
371	深山要塞跡
371－1	深山第1砲台跡
371－2	深山第2砲台跡
371－3	男良砲台跡
372	加太砲台跡
373	田倉崎砲台跡
374	虎島砲台跡
375	友ケ島要塞跡
375－1	友ケ島第1砲台跡
375－2	友ケ島第2砲台跡
375－3	友ケ島第3砲台跡
375－4	友ケ島第4砲台跡
375－5	友ケ島第5砲台跡
376	行者堂東遺跡
377	松江経塚
378	猊口石岩陰遺跡
379	和歌山城跡
380	山口御殿跡
381	岩橋Ⅱ遺跡
382	本願寺跡
383	神前Ⅱ遺跡
384	高松焼窯跡
385	奥山田古墳群
386	大池遺跡
387	大旗山城跡
388	西田井遺跡
389	井ノ口遺跡
390	神波遺跡
391	永穂遺跡
392	楠本遺跡
393	吉田遺跡
394	城山遺跡
395	岡村遺跡
396	室山古墳群
397	木ノ本Ⅳ遺跡
398	府中Ⅳ遺跡
399	平井遺跡
400	深谷池北遺跡
401	名草池北遺跡
402	湯谷池西遺跡
403	平野池南遺跡
404	北野池北遺跡
405	山吹丁遺跡
406	友田町遺跡
407	津秦Ⅱ遺跡
408	和田Ⅱ遺跡
409	岩橋Ⅲ遺跡
410	前山B226号墳
411	前山B227号墳
412	城ノ前1号墳
413	境原遺跡
414	薬勝寺Ⅱ遺跡
415	本渡遺跡
416	明王寺遺跡
417	平尾遺跡
418	滝ケ峰Ⅱ遺跡
419	紀三井寺塩田跡
420	太田城水攻め堤跡
421	木広町遺跡
指1	史跡和歌山城

Ⅰ．はじめに

1．平成８（1996）年度の調査

和歌山市における平成８（1996）年度の本財団の発掘調査受託事業は13件である。

調査に至った原因としては、事務所建設などの民間受託が11件に対して和歌山城関係の公共的な調査が２件であり、比率的には民間開発が主体を占める。また、和歌山市教育委員会が直接調査を行った事業では個人住宅の建築に伴うものなどが５件、和歌山城関係の公共的な調査が１件であり、財団調査と同様の比率を示したものといえよう。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

弥生～古墳時代

弥生時代の調査では、太田・黒田遺跡において多くの遺構を検出した。第34次調査では中期の大溝など、第39次調査では中期の土坑・溝などを検出した他、第36・37次調査においては中期の遺物

【1996年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
1	太田・黒田遺跡第34次	事務所建設	４月・７月	160m²	弥生時代中期・奈良時代の大溝、平安時代の条里溝を検出	北野 高橋	
2	史跡和歌山城第15次	便所棟建設	５月～７月	80m²	江戸時代の庭園の一部を検出	木建	
3	太田・黒田遺跡第35次	個人住宅建設	６月	４m²	中世の遺物包含層と土坑を確認	前田敬彦	市教委調査
4	府中Ⅳ遺跡第２次	分譲住宅地造成	６月～８月	780m²	弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居を７棟、奈良時代の掘立柱建物等を検出	井馬 栗本	
5	井辺遺跡第２次	宅地造成	８月	50m²	弥生時代後期末から古墳時代の自然地形の落ち込みを検出	北野 奥村	
6	太田・黒田遺跡第36次	マンション建設	８月～９月	80m²	弥生時代中期の遺物包含層と古墳時代の溝を検出	木建	
7	史跡和歌山城第16次	防災無線ケーブル埋設工事	９月	40m²	江戸時代前期の土坑、末期のものとみられる石垣を西の丸北端において検出	前田	市教委調査
8	井辺遺跡第３次	個人住宅建築	10月	２m²	弥生時代後期末から古墳時代初頭の土坑を検出	〃	〃
9	井辺Ⅱ遺跡	個人住宅建築	10月	２m²	古墳時代初頭・平安時代の遺物包含層を確認	〃	〃
10	和歌山城跡第６次	事務所建設	11月	90m²	３時期にわたる武家屋敷跡の一部を検出	北野 奥村	
11	史跡和歌山城第17次	御天守一ノ門櫓台南面石垣改修	11月～３月	180m²	結晶片岩を用いた石垣の構築方法及びその周辺坂道の構造を確認	北野 高橋	
12	太田・黒田遺跡第37次	事務所建設	11月～12月	20m²	弥生時代中期の遺物包含層、鎌倉時代の溝状遺構を検出	栗本	
13	和歌山城跡第７次	医院建築	12月	81m²	武家屋敷跡の一部を検出	木建	
14	和田遺跡	老人デイサービスセンター建設	１月	25m²	中世の遺物包含層を確認	栗本	
15	太田・黒田遺跡第38次	医院建築	１月	18m²	近世以降の耕作に伴う鋤溝を確認	前田	市教委調査
16	神前遺跡	宅地造成	１月～２月	220m²	弥生時代、鎌倉、室町時代から江戸時代にかけての遺構を検出	北野 奥村	
17	鳴神Ⅴ遺跡第４次	店舗建設	２月	15m²	鎌倉時代の土坑を検出	井馬	
18	太田・黒田遺跡第39次	個人住宅建築	２月～３月	60m²	弥生時代中期の土坑・溝状遺構を検出。土坑から畿内Ⅱ様式の土器一群が出土	木建	
19	平ノ下遺跡	宅地造成	３月	44m²	鎌倉時代の土坑などの検出	前田	市教委調査

包含層を検出した。また、和歌山平野南部に位置する神前遺跡で前期の土坑１基、後期の溝１条を検出した。神前遺跡は従来弥生時代前期から古墳時代前期の遺物散布地として周知されており、今回の調査で初めて遺構を確認したものである。なお、神前遺跡の北に隣接した井辺遺跡で弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての落ち込み状の自然地形を検出し、微高地形との境界部分で土器が多量に出土した。また、紀ノ川右岸に位置する府中Ⅳ遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居群を検出した。特に、古墳時代前期の竪穴住居のうち、和歌山県内でも最大級の規模を測る大型のものが１棟みられた。その他、古墳時代では太田･黒田遺跡第36次調査で溝などを検出した。

奈良～平安時代

奈良時代では、太田･黒田遺跡第34次調査で後期に埋没する大溝を検出し、府中Ⅳ遺跡で掘立柱建物を２棟検出した。平安時代は太田･黒田遺跡第34次調査で条里地割りに関連するとみられる溝を検出した。

鎌倉～室町時代

鎌倉時代は太田･黒田遺跡第37次調査で溝、神前遺跡で井戸、鳴神Ⅴ遺跡第４次調査で土坑などを検出した。室町時代は神前遺跡で屋敷地を区画すると考えられる溝、土坑などを検出した。

江戸時代

江戸時代については、史跡和歌山城第15次調査で西の丸庭園の一部を検出し、第17次調査では和歌山城天守一の門櫓台周辺の石垣構築状況や坂道の構造の一部を確認した。また、和歌山城下町三の丸武家屋敷地にあたる和歌山城跡第６・７次調査では、それぞれ石列などの屋敷地割の一部を検出した。なお、神前遺跡については、屋敷地を区画すると考えられる大溝を検出し、多くの江戸時代初頭の陶磁器類が出土した。

２.平成９（1997）年度の調査

平成９（1997）年度の本財団の発掘調査受託事業は12件である。

調査に至った原因としては、事務所建設などの民間受託が８件に対して校舎及び屋内運動場改築等の公共的な調査が４件であり、比率的には民間：公共＝２：１の比率を示す。また、和歌山市教育委員会が直接調査を行った事業では個人住宅の建築に伴うものなど４件であり、前年度に引き続いて民間開発の割合が高いものといえる。

以上、調査結果を時代順にまとめることとする。

弥生時代

弥生時代の調査では、太田・黒田遺跡において多くの遺構を検出した。第41次調査では中期の溝、第43次調査では中期の竪穴住居・土器棺・大溝などを検出した他、第40次調査においては中期の植物痕跡を検出した。特筆すべき遺物として第43次調査で赤色顔料の付着した石杵が出土した。また、太田･黒田遺跡の南東部に隣接する秋月遺跡で前期の河道を検出した。和歌山市の南縁部に位置する岡村遺跡では中期の河道、後期の水田などを検出した。

古墳時代

古墳時代についても多くの遺構・遺物を検出した。秋月遺跡で前期の土坑を検出し、太田・黒田

【1997年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
20	太田・黒田遺跡第40次	事務所建設	5月～6月	160m²	弥生時代中期の植物痕跡、古墳時代後期の溝を検出	北野 高橋	
21	友田町遺跡第2次	店舗建築	6月～8月	200m²	古墳時代の竪穴住居・大溝等を検出	井馬 吉田	
22	太田・黒田遺跡第41次	事務所建築	6月～8月	140m²	弥生時代・平安時代の溝を検出	木建	
23	鳴神Ⅳ遺跡第9次	宅地造成	7月	110m²	古墳時代後期末に埋没した溝、鎌倉時代の溝を検出	北野 奥村	
24	神前遺跡第2次	宅地造成	7月	15m²	中世の遺物包含層を確認	前田	市教委調査
25	太田・黒田遺跡第42次	道路敷設	8月～11月	50m²	弥生時代中期の溝、江戸時代の土坑を検出	〃	〃
26	木ノ本Ⅲ遺跡第9次	市道拡幅	10月～12月	60m²	車駕之古址古墳の外堤に関連する溝、鎌倉時代の和鏡を埋納した土坑を検出	木建	
27	友田町遺跡第3次	店舗建築	11月～12月	200m²	古墳時代の倉庫とみられる掘立柱建物と建物に平行する溝を検出	井馬	
28	西吉礼遺跡	個人住宅建築	11月	25m²	古墳時代の河道、奈良時代の溝を検出	高橋	
29	中野遺跡第2次	プール建設	11月～12月	150m²	鎌倉時代・室町時代の遺物包含層を確認	北野 奥村 吉田	
30	秋月遺跡第7次	個人住宅建築	12月	2 m²	鎌倉時代の溝・土坑を検出	前田	市教委調査
31	鳴神Ⅴ遺跡第5次	個人住宅建築	12月	2 m²	古墳時代の溝状遺構、奈良時代の柱穴を検出	〃	〃
32	史跡和歌山城第18次	御天守一ノ門櫓台南面石垣改修	1月～3月	60m²	結晶片岩を用いた石垣の構造及び構築方法を確認	北野 高橋	
33	太田・黒田遺跡第43次	共同住宅建築	1月～2月	280m²	弥生時代の竪穴住居3棟・土器棺・大溝、古墳時代の大溝等の検出、赤色顔料の付着した石杵が出土	北野 木建 吉田	
34	秋月遺跡第6次	校舎及び屋内運動場改築	1月～3月	260m²	弥生時代前期に埋没した河道、古墳時代前期の土坑等を検出	井馬	
35	岡村遺跡第2次	盛土工事	2月～3月	132m²	弥生時代中期に埋没した旧河道・後期の水田を検出	北野 奥村	

遺跡においては第43次調査で後期に埋没する大溝、第40次調査で後期の溝を検出した。友田町遺跡では竪穴住居・掘立柱建物・大溝群を検出した他、鳴神Ⅳ遺跡で後期末の溝、西吉礼遺跡で河道を検出した。紀ノ川右岸では、木ノ本Ⅲ遺跡で車駕之古址古墳の外堤に関連する大溝を検出している。

奈良～平安時代

奈良時代は西吉礼遺跡で溝を検出した。平安時代では太田･黒田遺跡第41次調査で溝を検出し、鳴神Ⅴ遺跡においては柱穴を検出している。

鎌倉時代

鎌倉時代は鳴神Ⅳ遺跡で溝・土坑を検出した他、木ノ本Ⅲ遺跡で和鏡などを埋納した土葬墓を検出、中野遺跡では遺物包含層を検出した。

室町～江戸時代

室町時代は中野遺跡で遺物包含層を検出した。江戸時代については、史跡和歌山城第18次調査で、第17次調査に引き続いて和歌山城天守一の門櫓台周辺石垣の内部構造を確認した。

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概報
［平成８（1996）年度］

１．太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第34次調査

調 査 地　和歌山市黒田80-１番地 他

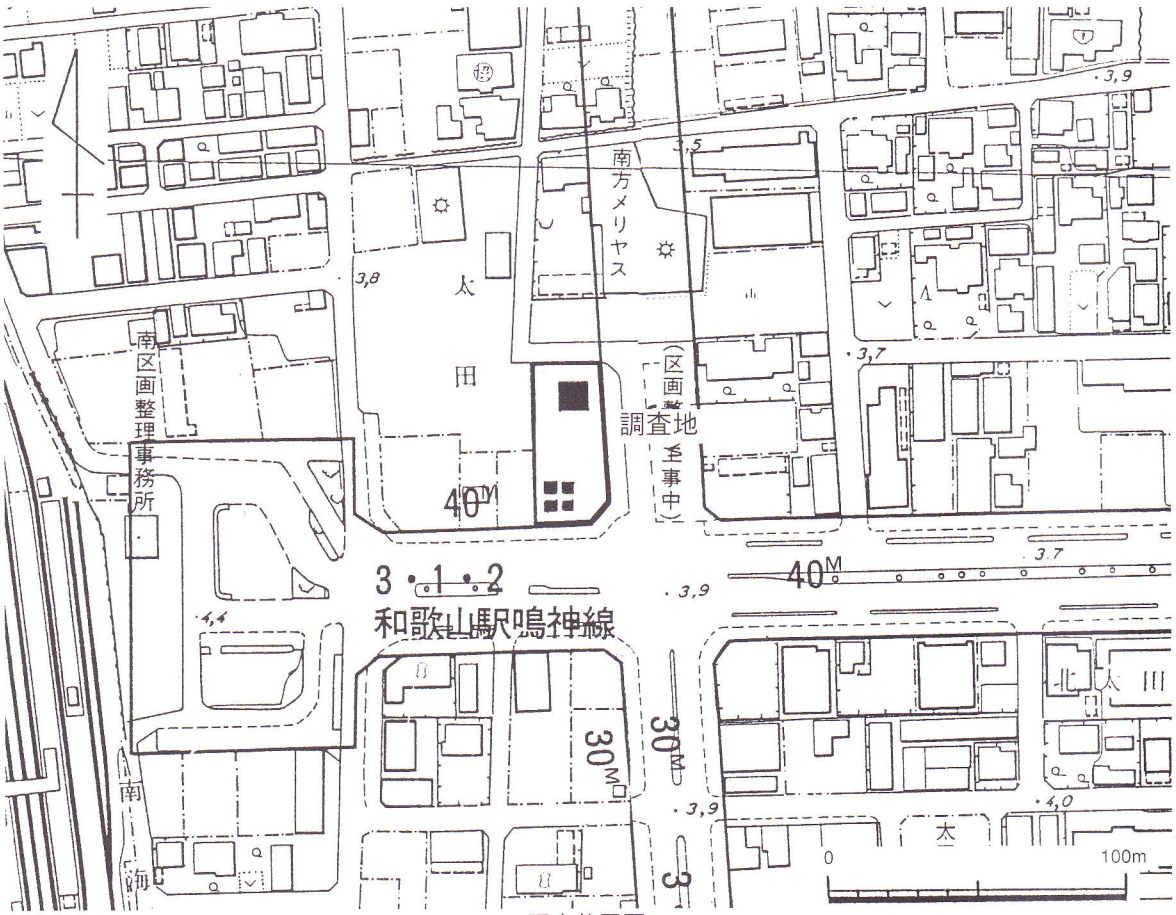
調査面積　160m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は紀ノ川下流域南岸の平野部のほぼ中央に立地する。遺跡は弥生時代前期から中期にかけての県下で最大規模の弥生時代集落として知られており、竪穴住居、井戸などの遺構や銅鐸、内行花文鏡、大量の弥生土器などの遺物が出土している。また、近年までの調査成果により弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている。

今回の調査は、太田・黒田遺跡西端部の標高約3.7mを測る沖積平野上に位置する工事範囲内において、第33次調査（試掘調査）の成果を受けて本調査として行ったものである。

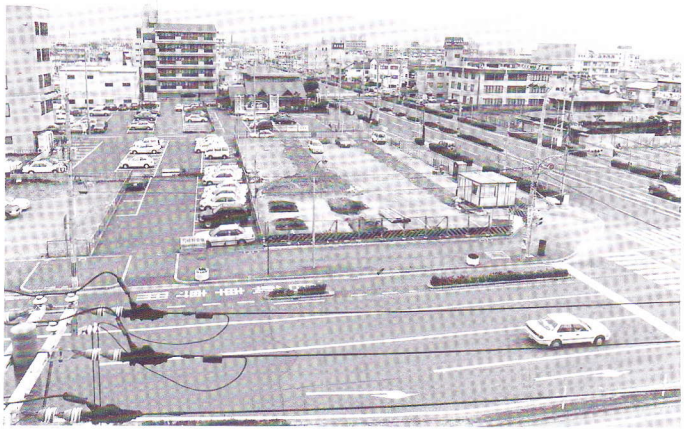
周辺の調査はこれまでに調査地西側約150m地点で第１次調査の１区画が太田・黒田遺跡調査団により調査され、調査地南東側約100m地点で和歌山市教育委員会が第19次調査を行った。また、調査地の南側約150m地点では、第12次調査が和歌山市教育委員会、第22次及び第26次調査が当財団により行われており、調査地周辺部では弥生時代から古墳時代、室町時代の遺構が展開していたことが明らかにされている。



調査位置図

調査内容

調査は、調査対象地南西端部に一辺２ｍ強の調査区を４箇所、合計面積約20m²を設定し、北東調査区からＧ１～Ｇ４区と呼称した。Ｇ１～Ｇ４区の調査は1996年４月４日から４月12日の期間で実施した。Ｇ１区とＧ２区において溝などの遺構を検出したが、Ｇ３区とＧ４区では明確な遺構は検出されなかった。その後、調査対象地北東端部において、一辺約12ｍ、面積約140m²の調査区を設定した。この調査区は、第33次調査地区を第１・２区と呼んだことから第３区と呼称することとし、７月８日から７月29日の期間で実施した。



調査区近景（南西から）

検出した遺構の概要は、第３区において弥生時代中期の溝８・21、弥生時代後期の溝18、奈良時代の溝３などである。遺構面の標高は2.6ｍ～2.7ｍを測る。

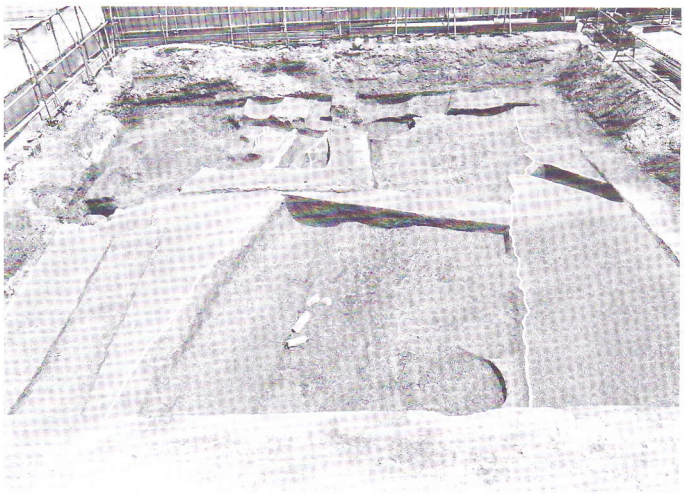
溝８は幅約1.0ｍ、深さ約50cm、延長約11.0ｍの規模を測るものである。溝の掘削方向は北東から南西であり、北側では底面の標高が2.0ｍ、南側では標高2.2ｍを測り、南から北方向に傾斜するものである。

Ｇ１～Ｇ４区（北から）

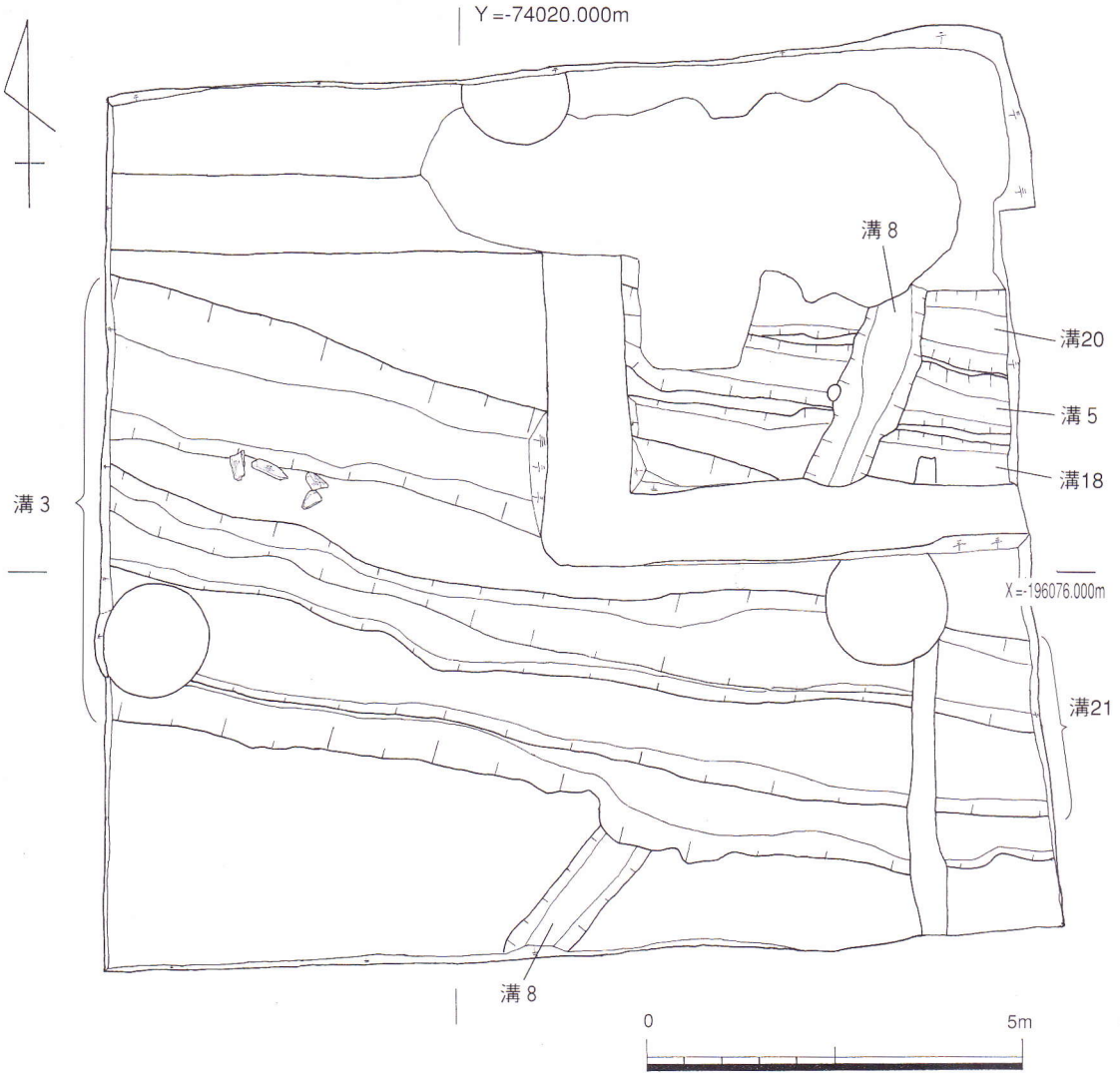
溝21は東西方向に掘削された溝である。幅2.6ｍ、深さ40cmの規模を測り、東西延長約13.0ｍを検出した。この溝は本来、南半分を掘削したものであったが、埋没後北側に再掘削されたものである。北側の再掘削部分を溝21a、南側を溝21bとした。溝21bは北側肩部分を再掘削により壊されているため正確な規模は不明であるが、幅1.3ｍ以上、深さ30cmを測るものである。溝21aは幅1.6ｍ、深さ40cmの規模を測る。双方共に底面の標高から、西から東へと流路方向を持ったものと考えられる。

溝18は東西方向の溝である。南側の肩部を溝３に壊されており、幅1.0ｍ以上、深さ20cmを測る。調査区東端から中央部まで延長約5.0ｍ検出した。

溝３は調査区の東端から西端にかけ



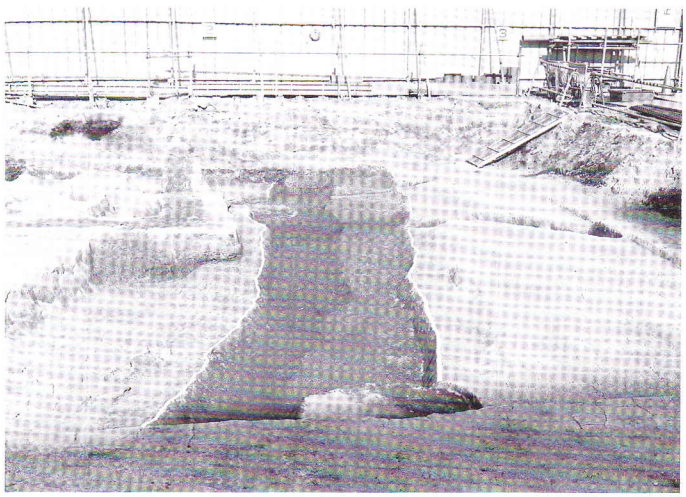
第３区全景（西から）



第3区遺構全体平面図

て、幅約5.0m、深さ約50cmの規模で東西延長約13.0mを検出した。溝は東西方向に掘削されており、西側でやや北にふっている。底面の標高から、東から西へと流路方向を持ったものと考えられる。土層堆積状況について、12層に分層することができた。遺構埋土は粗砂が主体であり、多量の遺物が各層から出土した。堆積状況から、再掘削が幾度も行われ、その度に幅及び深さが変化したものであると考えられる。この溝の最終埋没の時期は出土遺物からみて奈良時代後期であるとみられる。

遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の瓦器、江戸時代の陶磁器類などが出土した。



第3区溝21（西から）

まとめ

本調査で検出した溝21は東西方向に掘削された溝である。幅2.6m、深さ40cmの規模を測り、東西延長約13.0mを検出したものである。この大溝は出土遺物から弥生時代中期後半頃のものであると考えられ、底面の標高から西から東へと流路方向を持ったものとみられる。

ところで、太田・黒田遺跡において本調査地周辺で検出された幅２m以上の規模をもつ弥生時代の大溝の掘削された方向性を検討するならば、西から東へと流路方向を持つものが多く、太田・黒田遺跡範囲の西方向に水の引先となる自然河道が存在したものとみられる。この河道は日下雅義氏により復原案を提示されている当時の旧紀ノ川の支流に相当するものであると考えられる。

溝21出土弥生土器壺

奈良時代の溝３は幅約5.0m、深さ約50cm、検出延長約13mを測る規模の大きなものである。底面の標高から、東から西へと流路方向を持ったものと考えられる。堆積状況から、再掘削が幾度も行われ、最終的には洪水により奈良時代後期に埋没したものと考えられる。ところで、太田・黒田遺跡の現在までの調査で、主要な奈良時代の遺構として第21次調査検出の井戸01と第３次調査検出の井戸202の２例があげられる。第21次調査は和歌山市教育委員会が昭和62年に実施したものである。調査により検出された井戸01は直径約3.5m、深さ約３mの規模の円形掘方をもち、掘方内に丸太を半裁して刳った長さ約２m、幅約１mの木枠を２枚組み合わせた長径1.2m、短径0.8mの平面形が楕円形の井戸枠を設けるものである。なお、その井戸枠の上に角材と板材を組み合わせた長辺1.2m、短辺１mの平面形が長方形の井戸枠をもつ。井戸の基底部には土師器を破砕したとみられる多量の細片、及び完形の須恵器十数個体を詰めており、それらの土器は井戸枠を据えた時に置かれたものであると考えられた。また、埋土の中位から斉串が１点出土している。第３次調査は昭和44年に和歌山市教育委員会が太田・黒田遺跡調査団に委託して実施されたものである。調査により検出された井戸202からは土師器、須恵器などの土器類と共に和銅開珎が42枚、万年通寶が４枚、平櫛などが出土した。以上の２遺構は本調査検出の溝３の流路の上流方向にあたる南東方向に位置するものである。また、溝３の堆積土の上層から特に遺物が多量に出土しており、それらの遺物は、須恵器、土師器などの他、竈、フイゴ羽口、獣骨（馬の歯）などがある。これらの遺物を用いたであろう奈良時代集落の中心は、先の井戸２例のあるこの溝の上流（南東側）に展開していたものと思われる。そのことなどから、当調査地は太田・黒田遺跡における奈良時代の集落北西側縁辺部にあたるものと推定することができる。

（北野隆亮）

【参考文献】

森浩一・白石太一郎「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相　―和歌山市太田・黒田遺跡の調査から―」『考古学ジャーナル』33　ニュー・サイエンス社　1969年

『和歌山市史』第１巻　和歌山市史編纂委員会　1991年

『太田・黒田遺跡 第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年

『太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年

2．史跡和歌山城（しせきわかやまじょう） 第15次調査

調 査 地　和歌山市一番丁３番地

調査面積　86m²

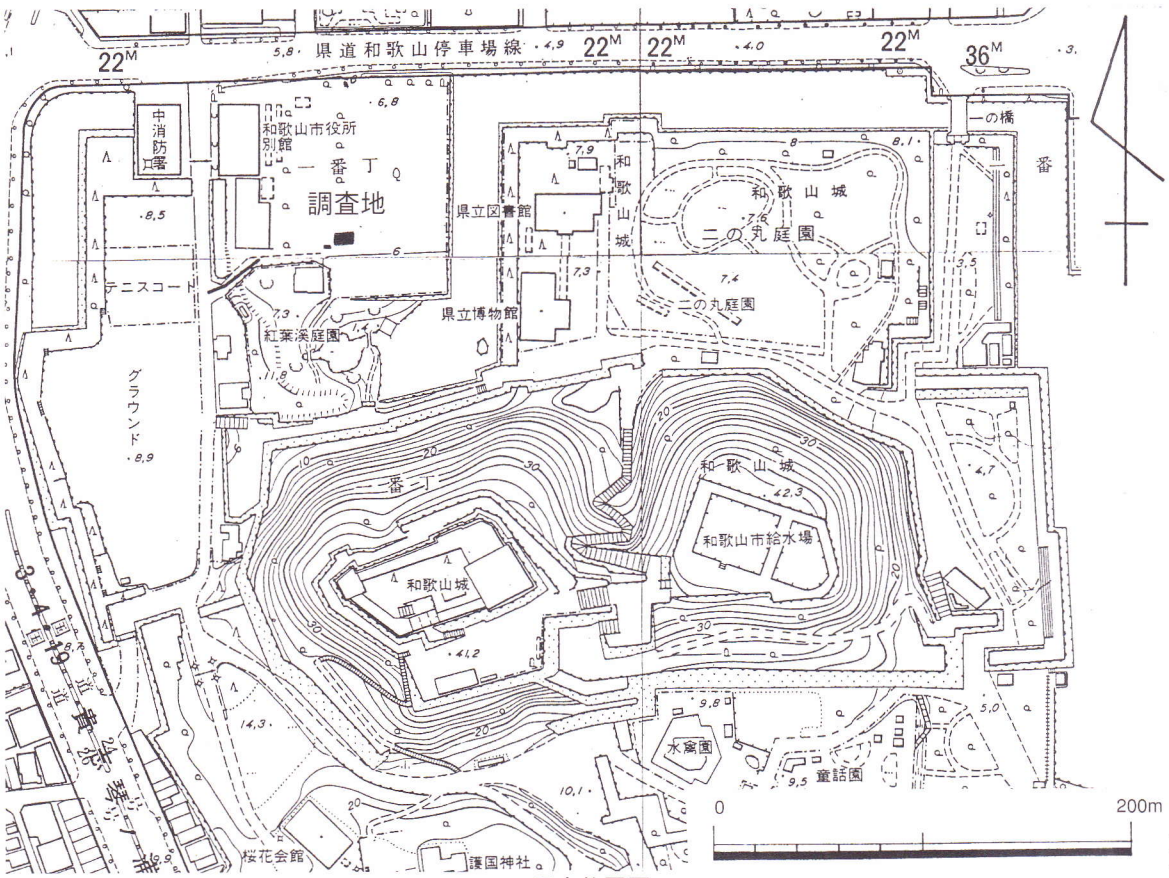
位置と環境

国の史跡である和歌山城は、紀ノ川下流域の南岸、和歌山平野のなかの標高48mの独立した丘陵（虎伏山）上に立地する。和歌山城は、天正13（1585）年に紀州を平定した豊臣秀吉によって築城された平山城である。この城は、丘陵頂上部の西側に天守閣、東側に本丸御殿が構築され、丘陵北側の山下に二の丸、北側から東側にかけて三の丸、北西側に西の丸、西側から南側にかけて砂の丸・南の丸がそれぞれ配置されている。

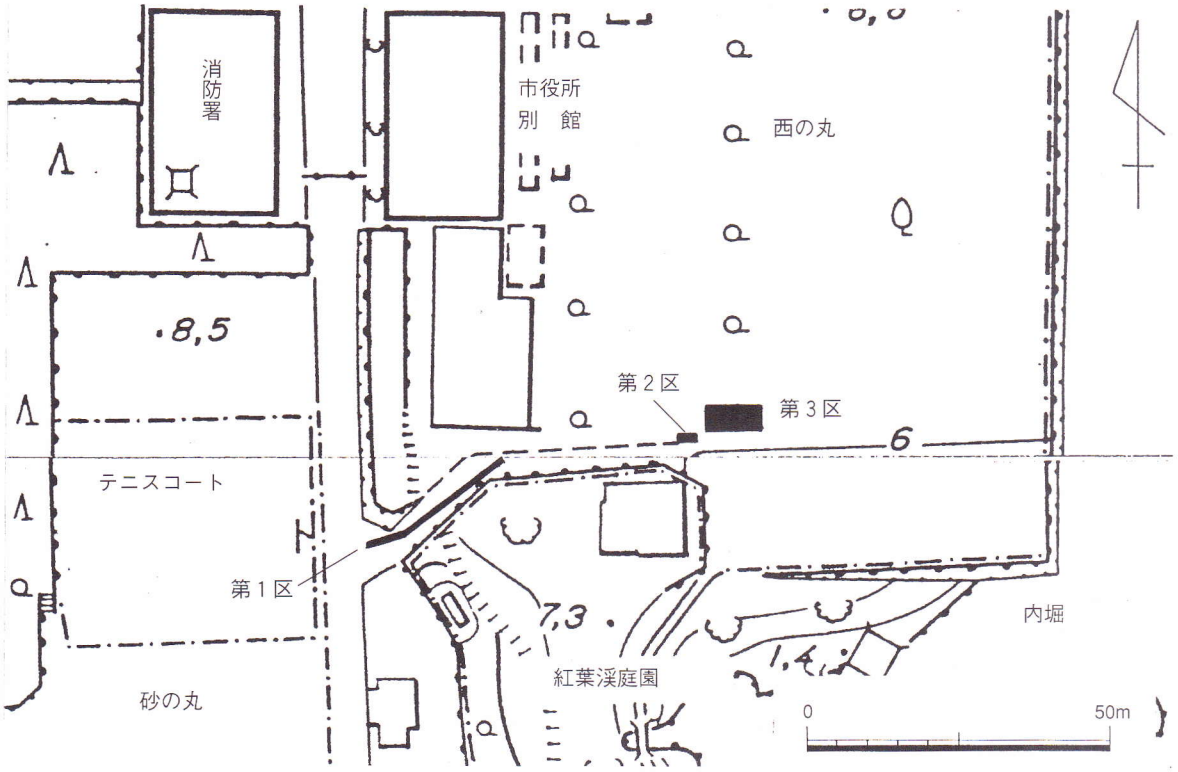
今回調査を行った西の丸は、藩主の隠居所としての機能を果たしたところで、初代藩主徳川頼宣が寛文七（1667）年11月16日に帰国して、西の丸に隠居した記録が史料に見える初見とされる。また幕末期の「御城内惣御絵図」によると、西の丸は大きく観能施設と数寄を楽しむ施設に分かれていたものとみられる。

調査内容

この調査は、和歌山城西の丸の範囲内南西部において、便所棟が設置されることになり、この便所棟本体および排水機械設置部、排水管埋設部分の３カ所の調査を実施した。調査区は、第１区が最も西側の排水管埋設部分であり、幅60cmのトレンチ総延長28mの区画、第２区が第３区の西側に



調査位置図

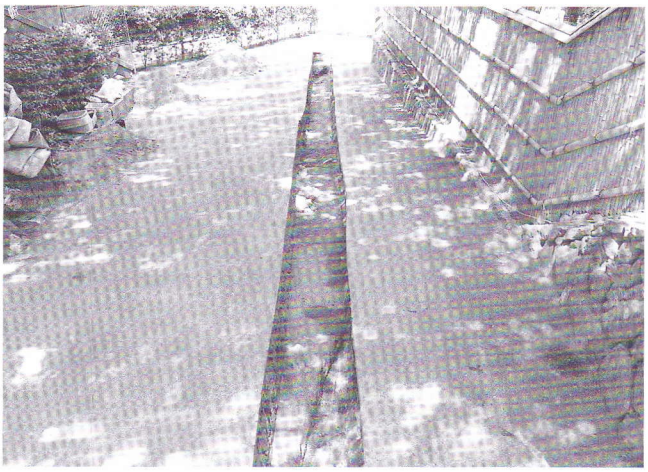


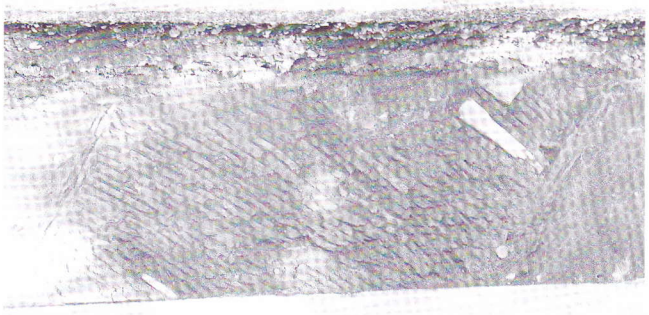
調査区配置図

あたる排水機械設置地点で東西３m、南北２mの区画、第３区が便所棟建設地点で東西10.5m、南北６mの区画である。

当調査における堆積では、江戸時代の生活面から現地表面までの厚さは第１区で約50cm、第２区で約60cm、第３区で約50cmを測り、これらは数単位に分けられる近代以降の整地土である。

まず第１区は、砂の丸から西の丸への通路部にあたり、現地表面において約５°の傾斜をもって緩やかに下る。この傾斜は江戸時代の遺構面においても同様である。第１区で検出した遺構は、石垣および瓦敷路１条である。石垣は、西側に面をもち、和泉砂岩で構築されたものである。この石垣は現存する砂の丸東側の石垣の基底部であるとみられる。また瓦敷路は、幅1.25mを測り、N−１°−Eの方向性をもつ。その構造は、平瓦をほぼ隙間なく立て並べたもので、少


第１区全景（西から）

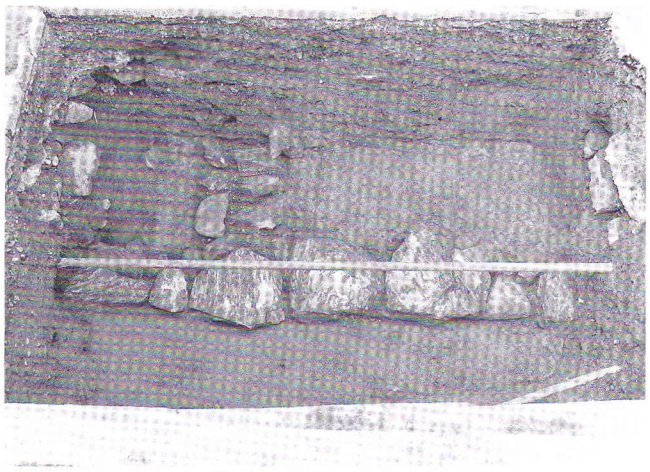

第１区瓦敷路（北から）

量の桟瓦や緑色片岩を含む。この瓦敷路の延長部は現在でも南側の紅葉渓庭園内にみられる。

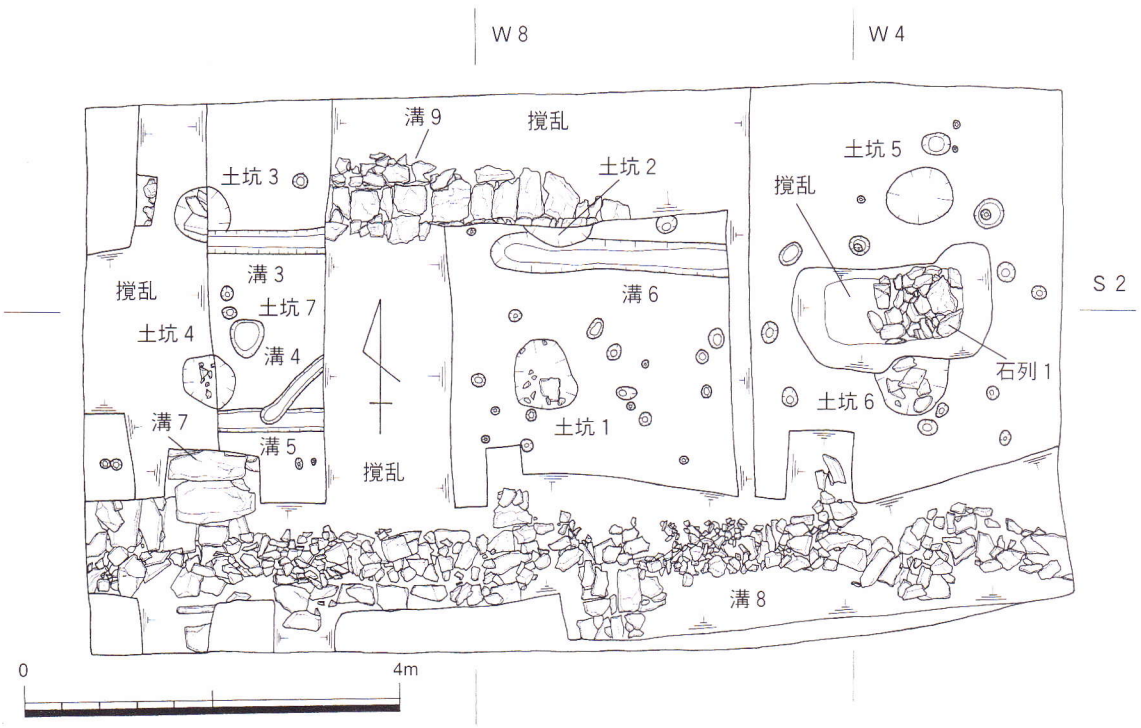
第２区では、根石、石敷溝（暗渠溝?）を検出した。根石は、10cm程度の緑色片岩の割石を東西50cm、南北20cm以上の範囲において検出した。石敷溝はその状況からみて、第３区において検出した暗渠溝との関連性が強く、同様のものである可能性が高い。

第３区では、根石状のピットや小溝、暗渠溝などを検出した。この調査区における下層調査は、遺構面保護のため、撹乱内部のみで行った。撹乱以外における第１遺構面ではピット39基、土坑７基、溝４条などを検出した。このなかで、土坑１～６は、直径50～70cm、深さ30cm程度を測るもので、根石状のピットとみられ、これらの並びからN－３°－Eの方向性をもつ建物が考えられる。この建物は現状では礎石が残存していないが、東西の間尺3.6m、南北の間尺1.8mを測る総柱の建物が復原でき、本来根石の規模からかなりの礎石が用いられていた大規模な建物であったことが推測できる。また撹乱坑内で検出した調査区を東西に貫く緑色片岩の石列は、その内部構造の一部を確認した結果、暗渠溝（溝８）であることが判明し、これに類似する溝７・９は同様の暗渠溝であることが考えられる。これらの溝７及び溝８・９は、上部の根石列に対してほぼ位置関係が重複し、さらにその方向性も一致することから上部施設構築以前にその下部構造として計画的に配置されたものと考えられる。また根石群と同一面で検出した溝３～６については、溝３・６と土坑２・３との重なりからみて、後出する遺構とみられる。

遺物は全体的に希薄であり、そのほとんどは、上部の堆積層から出土した。このた



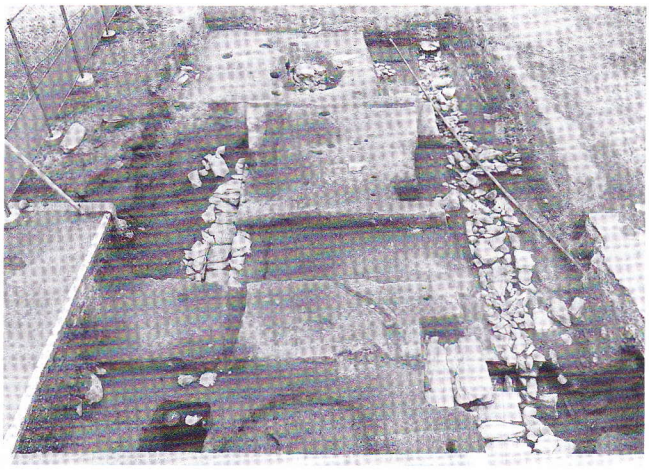
第２区全景（南から）



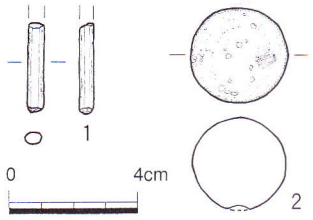
第３区遺構全体平面図

め遺構等の時期が確定できないのが現状である。

土器は、瀬戸・美濃系陶磁器や肥前系陶磁器のほか、堺焼すり鉢、土師器皿などが出土した。土器以外では、多数の瓦類のほか、碁石や鉄釘、煙管吹口などがある。なかでも石筆（1）は良質の滑石を用いた褐色の色調をもつもので、残存長3.5cmを測るものである。また用途不明の石製玉（2）は、良質の石灰岩系の石材を用いた白色の色調をもつもので、直径3.8cmのほぼ球体を呈し、全体に丁寧な研磨を施している。



第3区全景（西から）



遺物実測図

まとめ

西の丸は、幕末期の「御城内惣御絵図」によると、観能施設と数寄を楽しむ施設に分かれており、南西部には御座の間・数寄屋が並び、廊下伝いに紅葉渓に至る地点であり、また、この西側には御膳所・御茶所などの台所施設が集められていたところとされる。

当調査地は、西の丸の南西部にあたる地点であり、これに伴う施設が検出されるものとみられた。この結果、第3区において検出した建物に伴うとみられる根石状のピットは、総柱の礎石建物に伴うものと考えられ、先にふれた施設の一部であったものと考えられる。また撹乱坑内で検出した暗渠溝等の遺構は、西の丸御殿の下部構造の一端を明らかにしたものといえる。

また1区において検出した瓦敷路は、現在でも紅葉渓庭園に残存するものであり、江戸時代後期頃に構築されたものと考えられる。

このように、西の丸には部分的な撹乱が存在するが、良好な状態で御殿に関する遺構が残されていることが明らかとなった。今後の調査において、さらに御殿等の規模や構造が明らかにされるであろう。

（井馬好英）

【参考文献】
『和歌山市史』第二巻（近世）　和歌山市史編纂委員会　1989年

3．太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第35次調査

調 査 地　和歌山市太田538－20番地

調査面積　4 m²

位置と環境

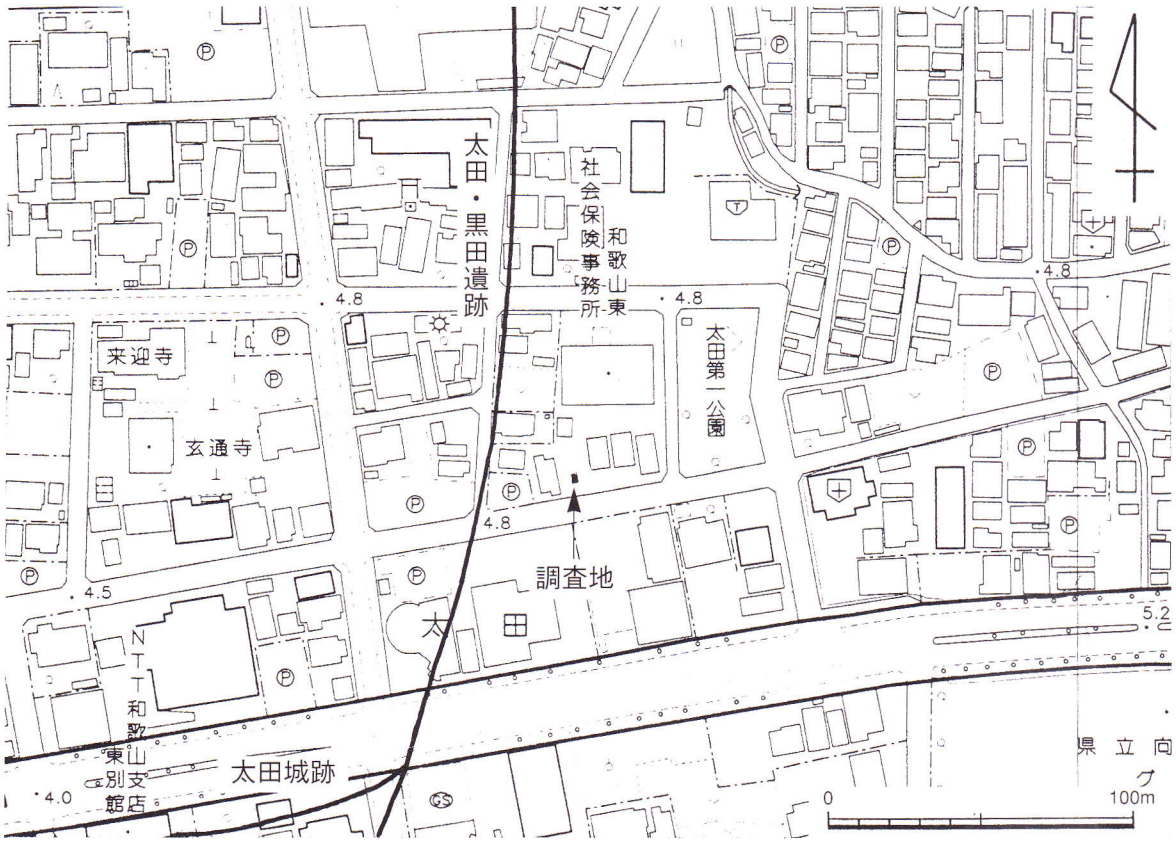
太田・黒田遺跡は、ＪＲ和歌山駅の東に広がる南北約700m、東西約400mの範囲をもつ大規模集落遺跡で、継続的な調査により、弥生時代から江戸時代にいたる複合遺跡であることが判明している。本遺跡の南半には中世期の城館跡と推定される太田城跡の範囲が重複して位置している。太田城跡推定範囲の北端部で東西方向に130m以上延びる濠状遺構が確認されており、中世末に埋没時期をもつ遺構として注意される。また、遺跡西部では中世の瓦溜め・溝状遺構や鉛製鉄砲玉を出土した溝等の中世期の遺構が多く検出されているが、遺跡南部では中世期の遺構の検出に乏しく、その実態についてはなお不明確である。

今回、太田・黒田遺跡推定範囲の南東端部における建物建築計画に対処するため、深く掘削される箇所について確認調査を実施した。

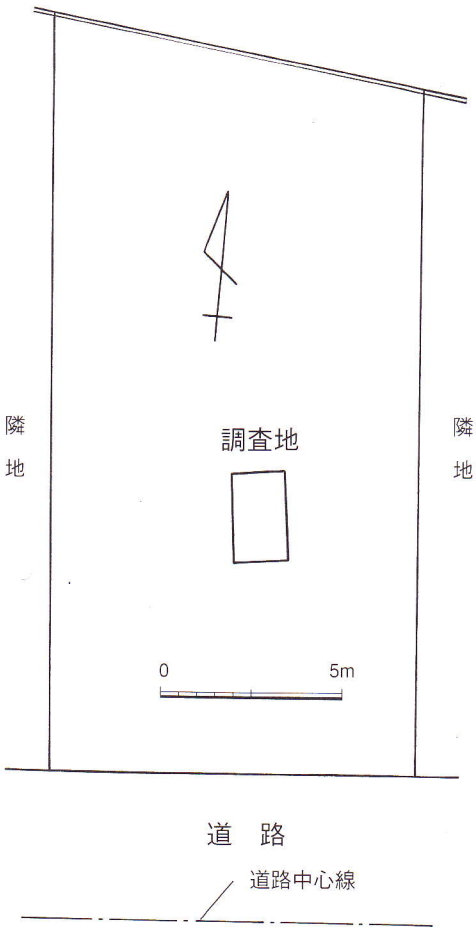
調査内容

道路から北へ６ｍの位置に、南北2.5m、東西1.5mの調査区を設定した。

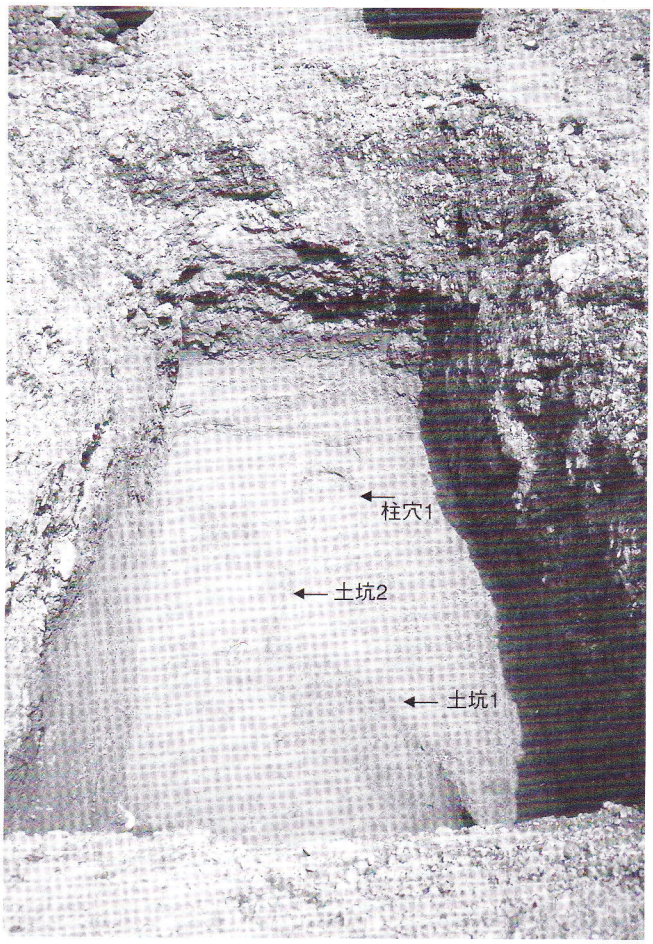
基本土層としては、地表より盛土、１層（旧耕作土）、２層（旧床土）、３層（灰茶褐色砂質土）、４層（淡灰褐色土）、５層（黄茶褐色砂質土）が堆積し、４層が中世期の希薄な包含層であり、４層下面が遺構面となる。



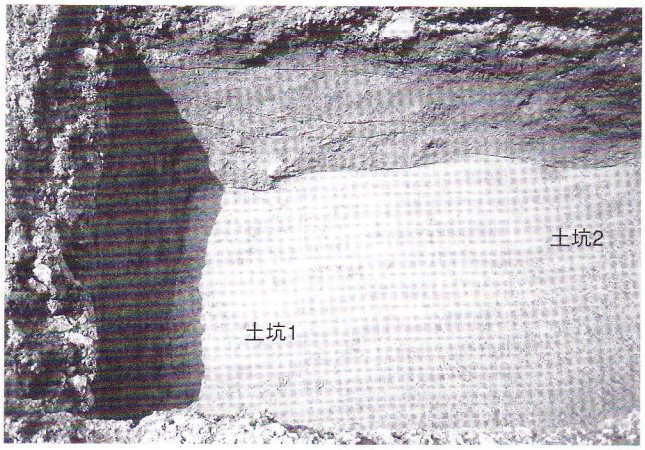
調査位置図



調査地位置図



調査地全景（南から）



調査地南半（東から）

検出された遺構には、土坑１・２、柱穴１がある。土坑１は、調査区の南西隅で検出された円形もしくは楕円形を呈する浅い土坑であり、４層に類似する灰褐色土を埋土とする。土坑１の深さは５～15cmである。この土坑１を切って、北側に形成される土坑２は、埋土の類似性や土坑形態の類似性より近接時期の形成と判断された。柱穴１は、直径約25cm、深さ５cmで、土坑と同様の埋土をもつ。

土坑埋土より、白磁・土師器・瓦器等が出土し、これらは中世期の遺構と判断された。

まとめ

遺跡推定範囲の南東端に位置する本調査地において中世期の遺構が複数検出された。本遺跡の中世期のありかたを考える上で重要である。調査面積が狭いため断言はできないが、本調査地周辺では包含層の状況よりみて中世期以外の遺構密度は低いかもしれない。（前田敬彦）

4．府中Ⅳ遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市府中313番地他

調査面積　780m²

位置と環境

府中Ⅳ遺跡は、和歌山平野を一望する紀ノ川北岸の標高約25mの丘陵上に立地する。この遺跡は、平成６年度に当調査地の南側において宅地造成のための土採り工事が行われた際に、多量の弥生土器を含む土層が断面観察から発見され、新発見の遺跡として周知された。この時行われた第１次調査によって弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡であることが明らかとなった。

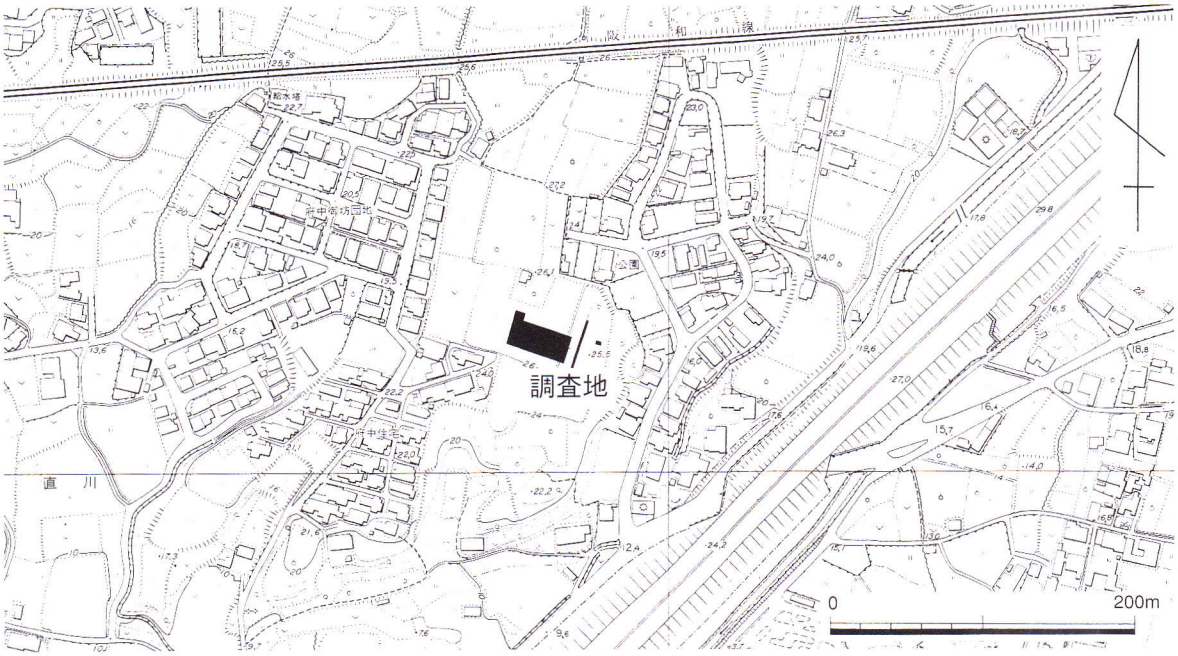
今回の調査地点は、第１次調査地の北側隣接地にあたる。

調査内容

調査地は丘陵上のほぼ頂上部の南東端に位置し、南および東に向かって傾斜をもった地形を成す。土層は、現代の耕作土（第１層）を含め４層に分けられる。第２層は耕作に伴う床土、第３層はにぶい黄色の粗砂混シルト、第４層は黄褐色系の細砂混シルトであり、ともに出土遺物から江戸時代以降の堆積とみられる。また地表面から遺構面までの厚さは30～40cmを測る。

遺構は、第４層の下面において検出したもので、弥生時代後期の円形竪穴住居２棟（４・６）、古墳時代前期の方形竪穴住居５棟（１～３・５・７）や掘立柱建物２棟（８・９）、奈良時代の掘立柱建物２棟（10・11）や土坑、鎌倉時代の掘立柱建物２棟（12・13）、江戸時代に埋没したとみられる素掘りの井戸が１基（井戸１）である。

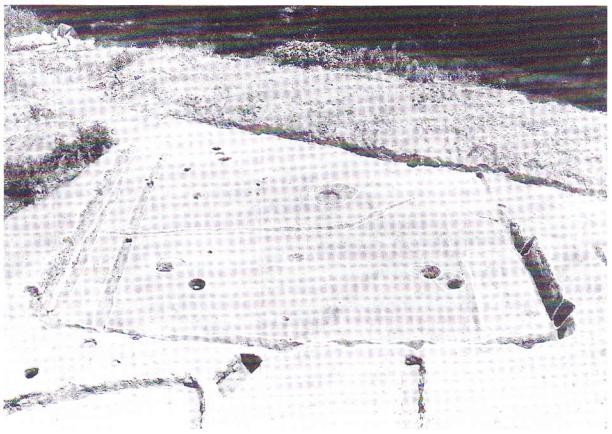
竪穴住居のなかでは、最も時期が新しい段階で南北幅8.6mの規模をもつ県内でも最大級の方形の大型住居（竪穴住居１）がある。この住居は、床面で検出した２条の壁溝から北側に２度拡張が行われたとみられる。住居の床面には、主柱穴とみられる柱穴４基と主柱穴間のほぼ中央に支柱穴を２基検出し、さらに垂木を支える支柱とみられる柱穴を周壁にそって12基検出した。また床面の南



調査位置図

西隅に東西2.1m、南北1.0m、床面からの高さ８cmを測るいわゆるベッド状の遺構が設けられていたほか、間仕切りの可能性がある溝や南壁のほぼ中央部に貯蔵穴を検出した。

遺物は、まず土器では弥生時代後期末の壺・甕・高杯や古墳時代前期の壺・甕・甑・高杯などがあり、特殊な土器に綾杉文風の線刻をもつ壺が１点出土した。このほか、奈良時代の塼や鎌倉時代の土師器釜などがある。



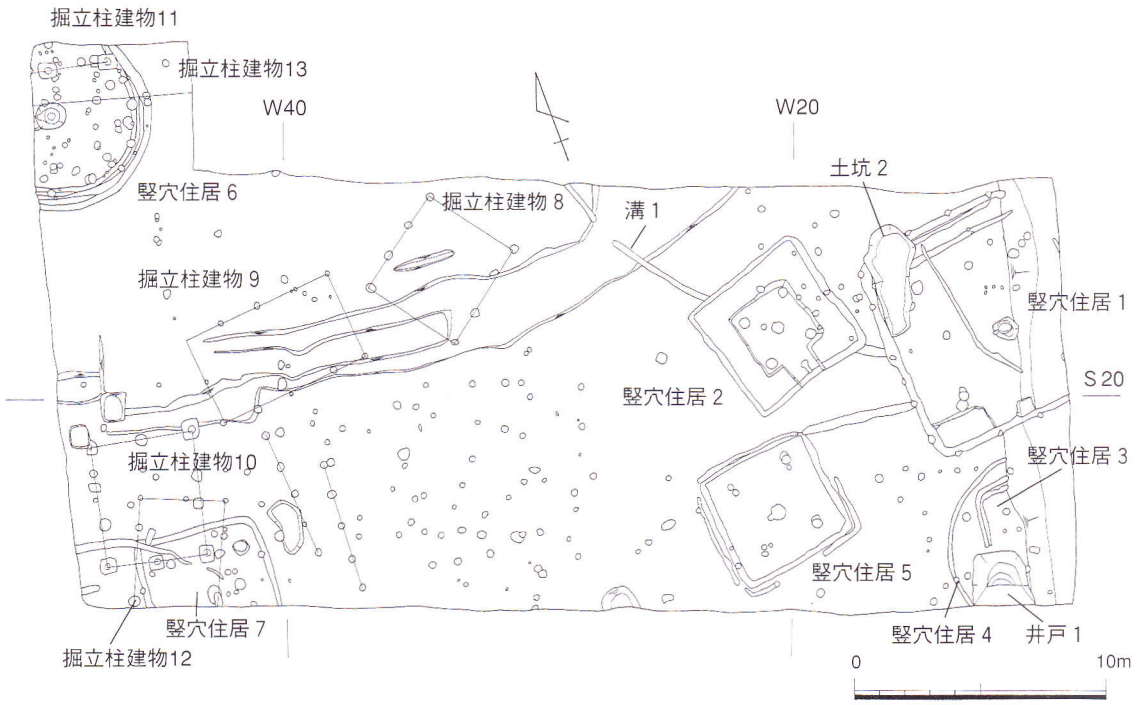
竪穴住居１（西から）

まとめ

この調査で検出した竪穴住居は平面形が円形のものが２棟、方形のものが５棟である。これら竪穴住居の変遷は、出土遺物や住居形態から４期に分類することができる。この４期の変遷は、Ⅰ期が弥生時代後期、畿内第Ⅴ様式の新段階（竪穴住居４・６）、Ⅱ期が古墳時代前期、庄内式併行期の古段階（竪穴住居５・７）、Ⅲ期が庄内式併行期の中段階（竪穴住居１）、Ⅳ期が庄内式併行期の新段階（竪穴住居２）である。また住居の形態では、方形住居の場合入り口部を除く壁際にベッド状の高まりをもつもの（竪穴住居２）や住居内や壁溝からのびる溝状遺構をもつもの（竪穴住居５・７）などがある。

（井馬好英）

【参考文献】
『府中Ⅳ遺跡 第２次発掘調査概報』 （財）和歌山市文化体育振興事業団 1996年



遺構全体平面図

5．井辺（いんべ）遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市神前190-1、196-1番地

調査面積　50m²

位置と環境

井辺遺跡は、紀の川南岸、和歌山平野の南東にそびえる岩橋山塊西端の半独立丘陵である福飯ヶ峰の北側山麓に位置する。当遺跡の推定範囲は東西約1.2km、南北約500mに広がっており、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物散布地として知られる。

1964（昭和39）年に和歌山市教育委員会の委託を受け、関西大学考古学研究室が行った第１次調査では、遺跡のほぼ中央部において約４mの間隔で東西方向に並行して延びる２列の土器列と井戸１基が検出されている。土器列の遺物は、弥生時代後期のものと報告されている。

調査位置は、井辺遺跡推定範囲の西側縁辺部に当たり、宅地造成に伴う工事が実施されるため、和歌山市教育委員会によって16ヶ所の試掘調査が行われた。その結果、良好な遺物包含層が確認されたため、調査に至ったものである。

調査内容

調査は、和歌山市教育委員会によって行われた16ヶ所の試掘調査の内、第９～11トレンチについて平面的な発掘調査を行い、第12・14・16トレンチ（幅約1.2m、長さ約４m）については、土層堆積状況の確認調査を行った。各トレンチの名称は、試掘調査時のものを踏襲した。

基本的な土層堆積状況は、現地表である水田耕土（第１層）が約20cm、床土（第２層）が約10cmの厚さで堆積する。第３層（10YR４/２（にぶい黄褐）シルト）が約20cm（旧水田耕土）、第４層

調査位置図

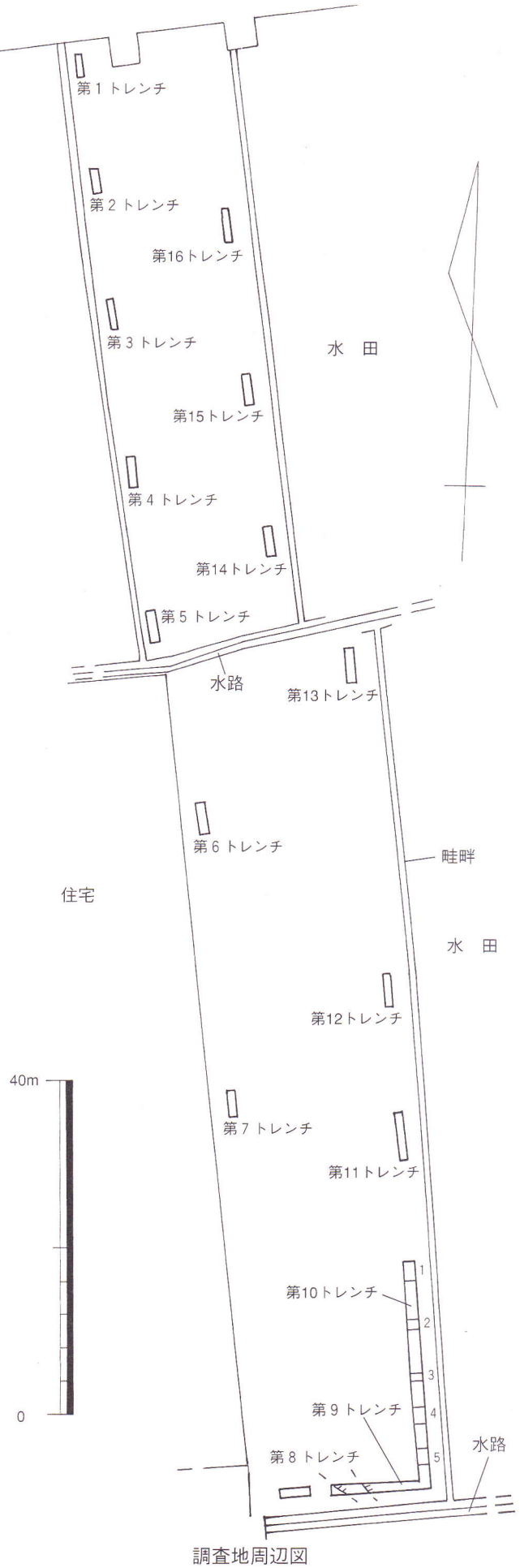
(2.5Y 4/2 (暗灰黄) シルト) が5～15cm (旧床土)、第5層 (2.5Y 4/1 (黄灰) シルト) が0～20cm、第6層 (5Y 4/1 (灰) シルト) が0～30cm、第7層 (7.5Y 4/1 (灰) 細砂混シルト) が約20cmの厚さで堆積する。また水路を隔てた第14・16トレンチでは第4～6層の土層堆積はみられず、第3層から下の堆積は、第4'層 (2.5Y 4/1 (黄灰) シルト) が約30cm、第5'層 (2.5Y 5/2 (暗黄灰) シルト) が約40cmの厚さで堆積していた。また、第5'層の下には先述の第7層の堆積を確認した。

調査の結果、第3・4層は鎌倉時代、第5層は古墳時代中・後期、第6層は弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物包含層であり、第7層は無遺物の自然堆積層であることを確認した。

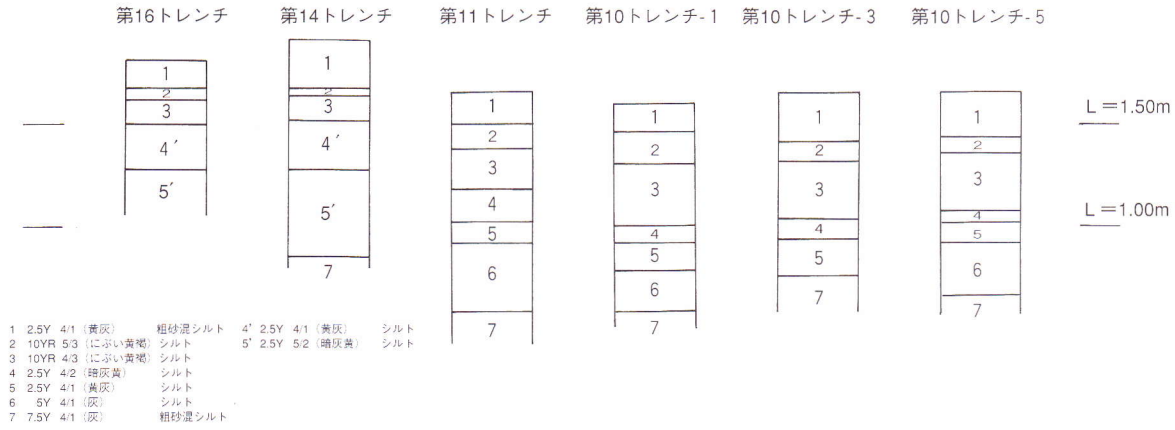
以下、第5・6層を検出した第9～11トレンチについて述べる。

第9トレンチ　幅約1.2m、長さ約12mの調査区西端において弥生時代後期末から古墳時代初頭の自然地形の落ち込み (河道の肩?) を検出した。埋土は第5・6層である。それぞれの落ち込みの肩部分を検出した。トレンチ東側が第6層、西側が第5層の肩部で、落ち込みは東側へ深く傾斜するものである。またトレンチ東端においては、第6層の遺物の出土が顕著であった。

第10トレンチ　幅約1.2m、約26mのトレンチを長さ約2mの区割りを行い、調査区を5ヶ所設定した。調査区は、北側から第10トレンチ-1～5と呼称した。第10トレンチ-2・3の調査区間において、第6層の堆積を確認することはできなかった。また第10トレンチ-4・5は、遺物の出土



調査地周辺図



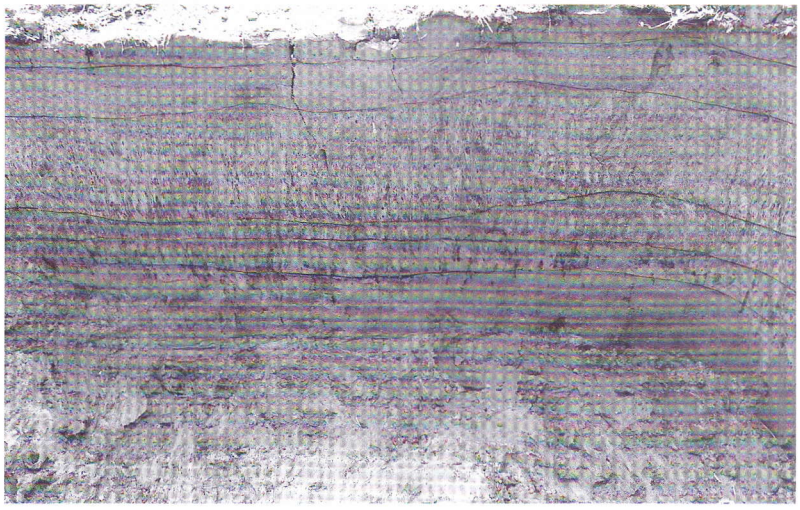
土層柱状模式図

が顕著であったほか、第７層は、木片などの植物遺体を多く含むものであった。

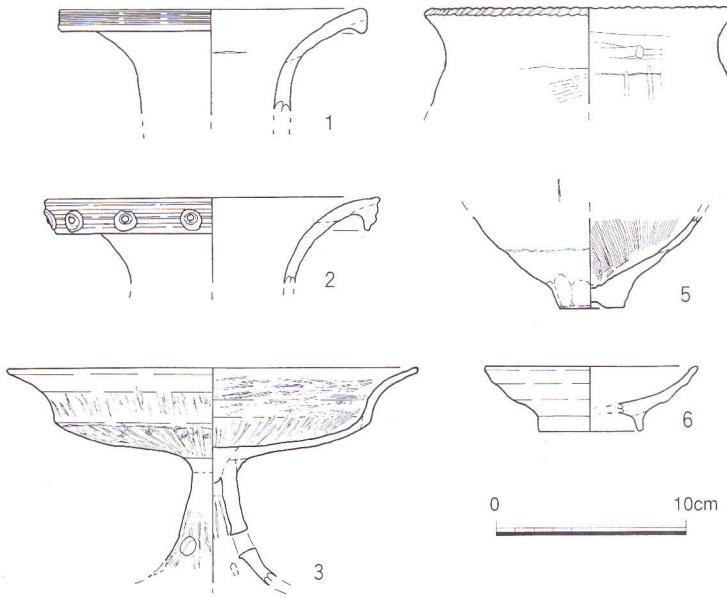
第11トレンチ　幅約1.2m、長さ約６ｍの調査区であるが、試掘調査の段階において自然堆積層である第７層まで掘削が及んでいたため土層堆積状況の調査を行った。その結果。第５・６層の堆積を確認することができた。

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、鎌倉時代の瓦器・輸入陶磁器・土師器、江戸時代の陶磁器などが出土した。遺物の大半は第６層出土のものであり、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土師器の甕・壺・高杯などが出土した。

１・２は、垂下口縁の広口壺である。１は口径16.2cmを測り、３条の擬凹線が施されている。２は復元口径17.6cmを測り、３条の擬凹線ののち、竹管押捺・円形浮文を貼り付けている。３は高杯で、復元

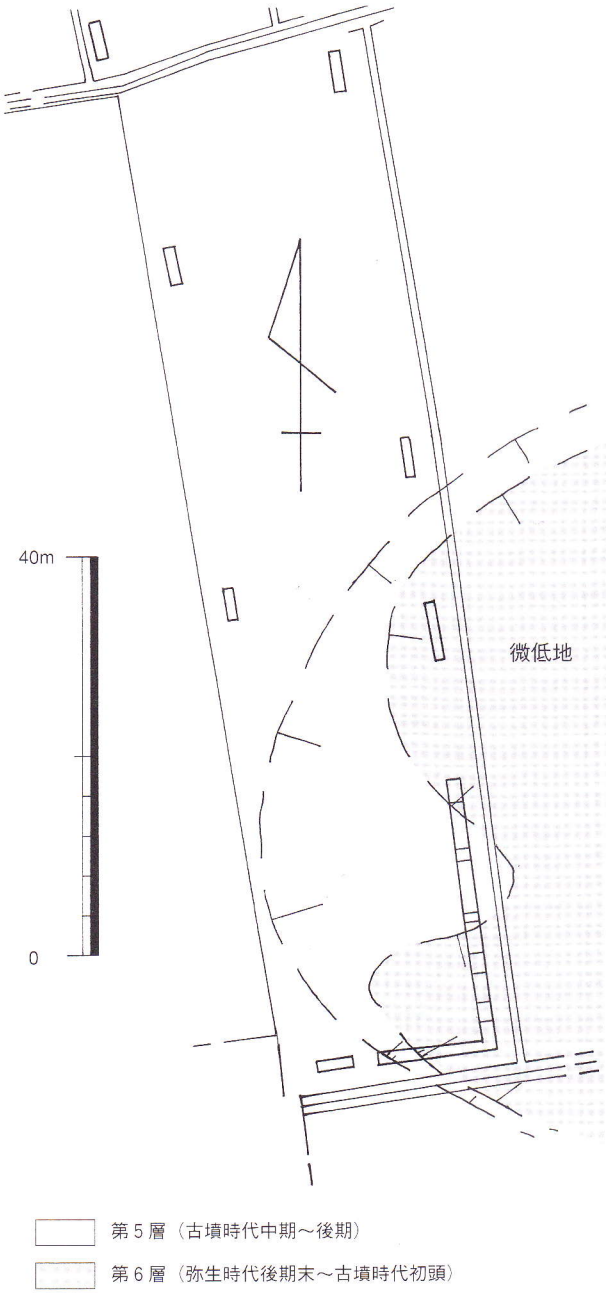


第10トレンチ-1西壁面土層堆積状況（東から）



遺物実測図

口径11.8cmを測る。脚部には、３方向からの透かしが２段穿たれている。内外面にはミガキの痕跡がみられる。４・５は甕である。４は復元口径21.6cmを測り、口縁部に刻み目が施されている。体部外面にはわずかにタタキ調整、口縁部内面はヘラケズリがみられる。５は底径3.2cmを測り、底部がドーナツ状にくぼむ、底部輪台技法がみられる。底部外面にはユビオサエ、内底面に細かなハケ調整が施されたものである。以上、１～３は弥生時代後期末、４・５は弥生時代後期末から古墳時代初頭のものである。６については平安時代の台付皿で、復元口径11.2cm、復元底径5.6cmを測るものである。



自然地形落ち込み（微低地）推定範囲

まとめ

調査の結果、調査区南端（第９トレンチ）において、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての自然地形の落ち込み（微低地）を検出した。落ち込みについて、第６層は第10トレンチ-２・３を除き、第９～11トレンチへとほぼ連続的にみられ、第５層は第10・11トレンチ全体にみられる。なお、第12トレンチには、第５・６層共に及んでいないことを確認した。このことから自然地形の落ち込み（微低地）は、調査地の南東方向に展開するものと考えられた（図参照）。また、第９トレンチ西端の落ち込みの肩部より西側は、微高地となっているものと考えられ、第６層の遺物集中地は、この微高地に存在したとみられる集落からの遺物が入り込んだものと考えられる。

これらのことから、本遺跡の範囲は、さらに西側へ広がっている可能性を指摘することができる。

以上、本調査において井辺遺跡西端部における遺跡の一様相を明らかにすることができた。

（奥村　薫）

6．太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡　第36次調査

調 査 地　和歌山市黒田134-6番地

調査面積　90m²

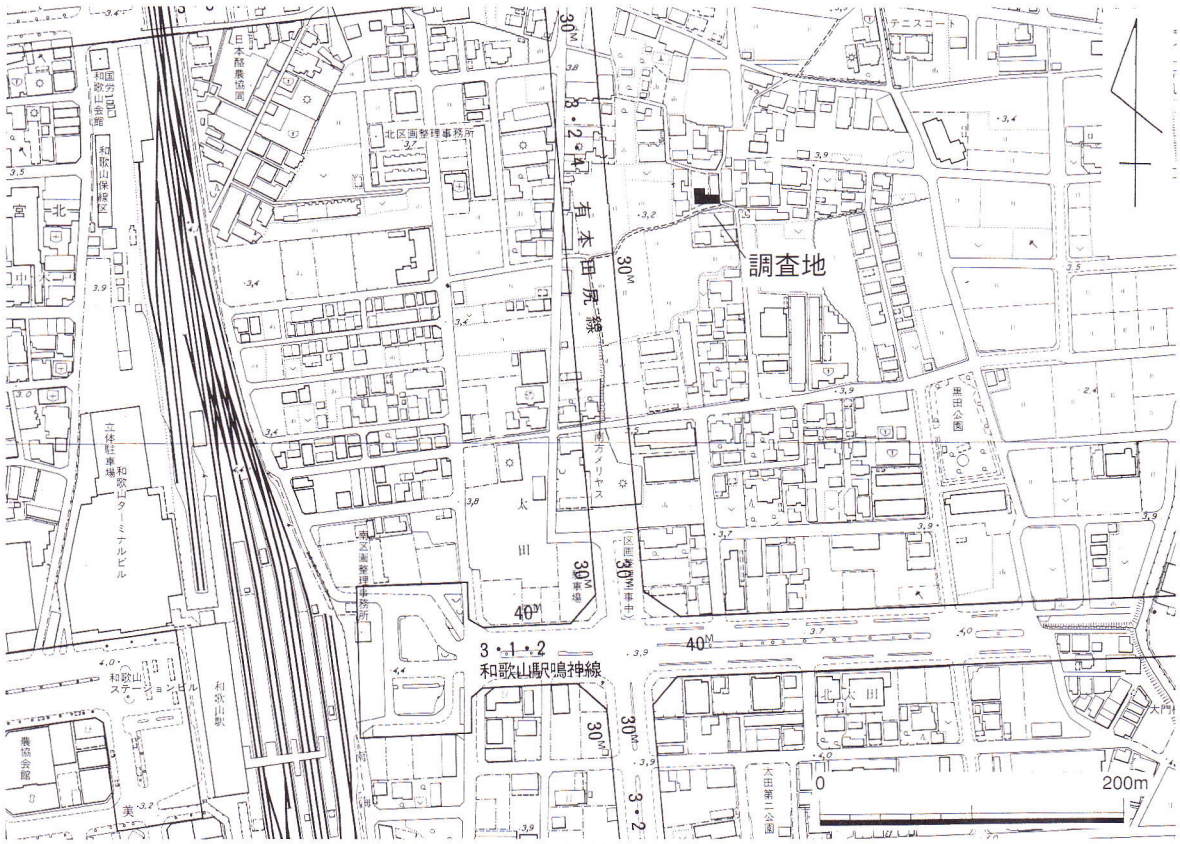
位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川南岸の平野域内のやや微高地に展開する弥生時代を中心とした集落遺跡であり、中世に存在したとされる太田城跡などとの複合遺跡としても周知されている。

弥生時代では前期から中期にかけての竪穴住居や井戸、土坑墓、水田などの多くの遺構が検出され、また中世では幅10m、深さ３mを測る大溝などが見つかっている。また遺物は、弥生時代では銅鐸をはじめ多量の壺や甕などの土器、室町時代では多量の陶磁器や火縄銃の玉とみられる鉛玉などが出土している。

調査内容

今回の調査地は、第42次調査が実施されるまでは遺跡範囲のなかで最も北部に位置する地点であり、これまで不明であった遺跡北部の様相の一端を明らかにすることができた。調査地周辺の現況は住宅地であり、部分的に水田が存在している。当調査地は、既に30cm程度の盛土が施された地点で、この盛土下に近年まで水田耕作が行われていたとみられる旧耕作土（第１層）が５～10cmの厚みで堆積している。第２層は厚さ約20cmを測る堆積であり、江戸時代の遺物を含む。この第２層の上面及び下面において江戸時代の遺構を検出した。遺構は、調査区を東西に貫く溝（溝３）や溝状遺構、土坑など多くのものを検出した。さらに下層の第３層及び第４層は、ともに５～20cm程度の



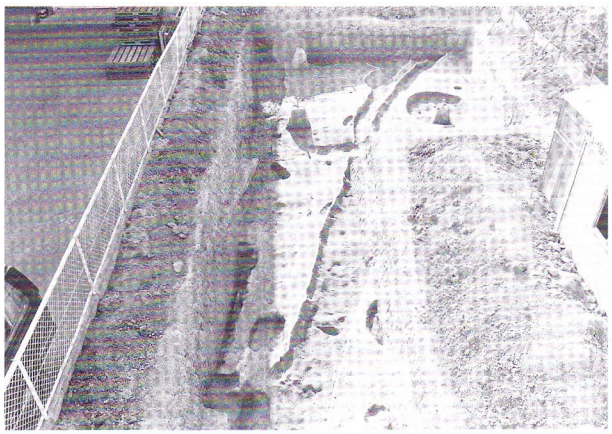
調査位置図

堆積であり、鎌倉時代から室町時代の遺物を含む。この第４層下面が標高2.6m前後を測る鎌倉時代の遺構面である。この面において検出した遺構は、N−70°−Wの方向性をもち、調査区を斜めに横切る溝７や土坑６がある。この遺構面を形成する第５層は、約40cmの厚みをもつ土層であり、奈良時代から平安時代の遺物を含む堆積である。さらに下層の第６層は、約70cmの厚みをもつ堆積であり、弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式の新段階から第Ⅲ様式の古段階）の遺物包含層である。

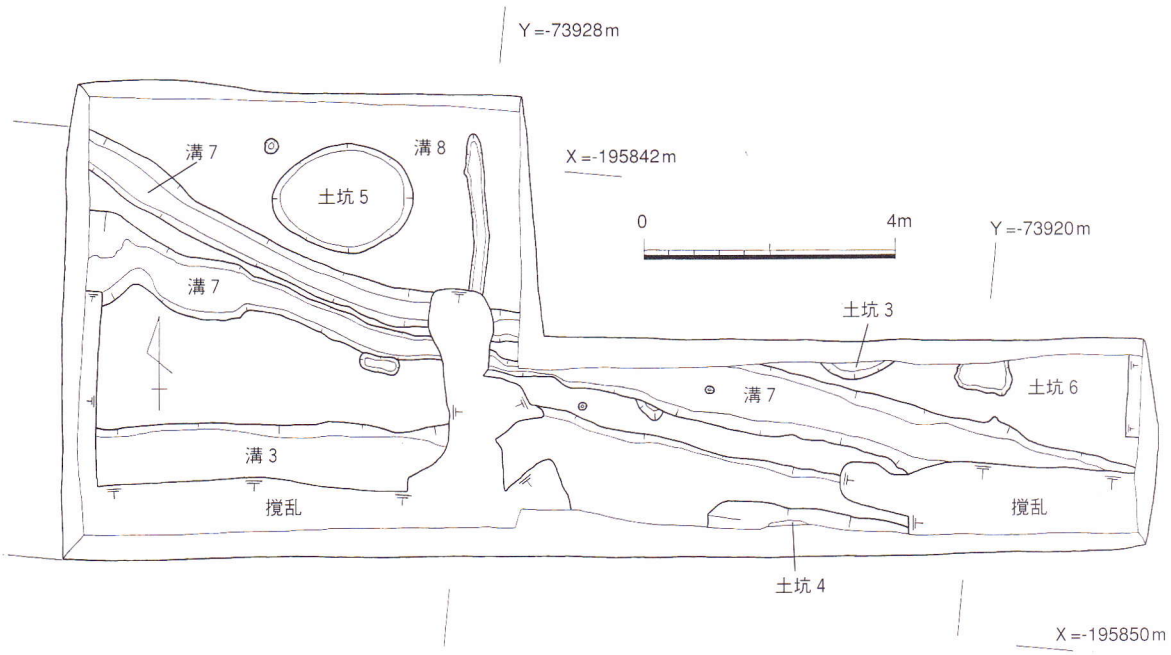
遺物には、弥生土器の壺・甕をはじめ土師器の高杯・甕・堝や須恵器の蓋杯・甕、黒色土器椀、瓦器椀、土師器皿、備前焼の壺・すり鉢、輸入陶磁器である中国製青磁碗、瀬戸・美濃系陶器や肥前系陶磁器などが出土している。また弥生時代の石器である石庖丁が１点、室町時代末から江戸時代にかけての瓦が一定量出土し、銭貨である寛永通寶が１点出土している。

まとめ

当遺跡はこれまで調査例のなかった遺跡の北部に位置する。今回の調査では鎌倉時代と江戸時代の遺構を検出したが、それ以前の遺構を検出していない。しかし、第６層が一定量の弥生土器を含む遺物包含層であることからこの面の上面もしくは下面に弥生時代の遺構が形成されている可能性が高いとみられ、また第５層に７世紀前半の遺物が多く含まれていることから、この時期の遺構の存在も考えられる。今後の調査ではこの比較的古い時代の様相を明確にすることが課題であろう。（井馬好英）



第３遺構面全景（東から）



第３遺構面遺構全体平面図

7．史跡和歌山城（しせきわかやまじょう）　第16次調査

調 査 地　和歌山市一番丁３番地

調査面積　40m²

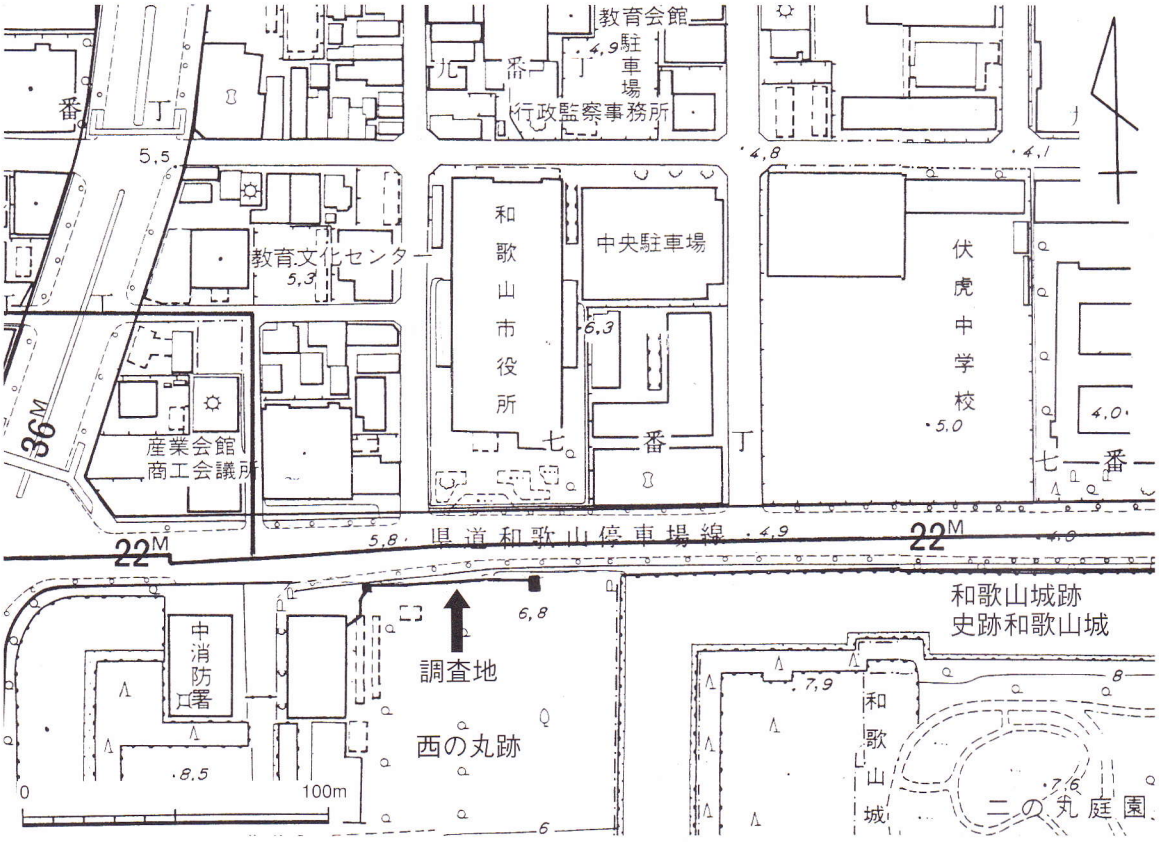
位置と環境

和歌山城は、紀ノ川河口平野の小丘陵の岡山に築かれた近世城郭である。天正13（1585）年に秀吉により築城が命ぜられ、桑山氏が城代となり、その後1600（慶長元）年には浅野幸長、1619（元和元）年には徳川頼宣が城主となり、以降は徳川家の歴代藩主が城主となった。今回、西の丸跡北辺部に防災無線ケーブル埋設工事が計画されたため、それに対処するため深く掘削される箇所について立ち会い調査を実施した。

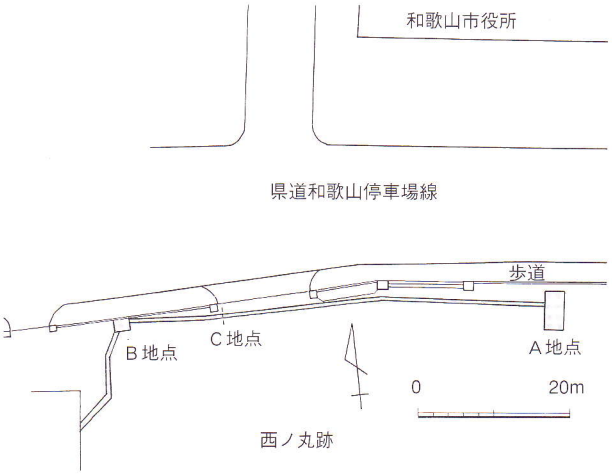
調査内容

基本的には幅約60cm、長さ約70mにわたるケーブル埋設予定地とそれに付随する諸施設設置場所について、順次立ち会いを実施した。遺構の検出された地点を便宜上Ａ～Ｃ地点とし、以下に概略を記述する。

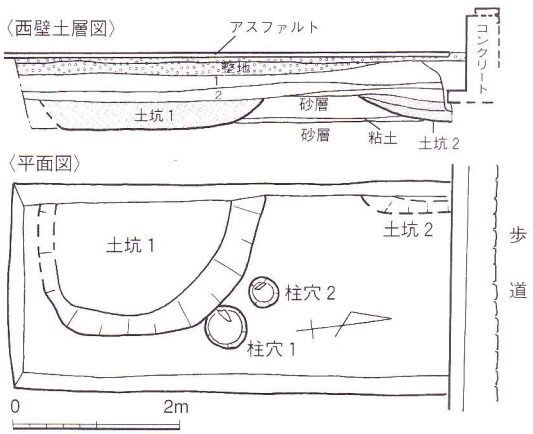
Ａ地点　機械設備設置予定地に幅2.6m、長さ5.1mの調査区を設定した。地表から25cm程度は、コンクリート舗装とバラス層、砂層等の整地に伴う土層であり、その下層に灰茶色粘土（１層）と灰色砂層（２層。玉石・粘土ブロック混じり）の土層が確認され、この土層下面が遺構面となっていた。検出された遺構には土坑２基と柱穴２基がある。土坑１は、南北長2.7m、深さ35～38cmで灰黄褐色砂質土を埋土とする。瓦の細片と若干の陶磁器片が出土しており、江戸時代末以降の時期が考



調査位置図



調査地点位置図

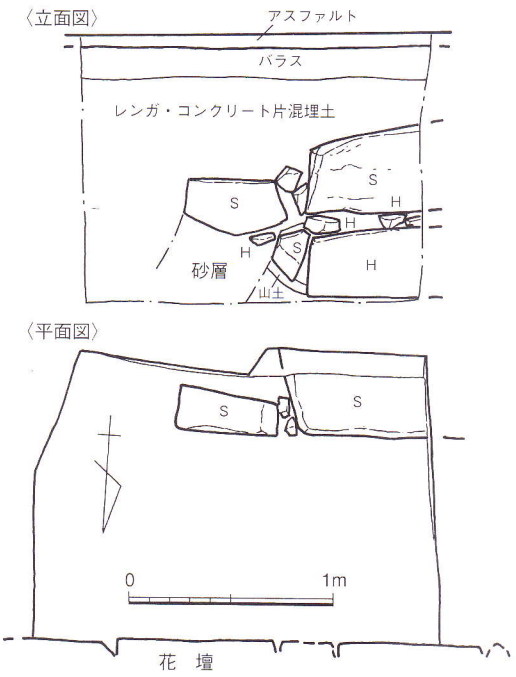


A地点遺構実測図

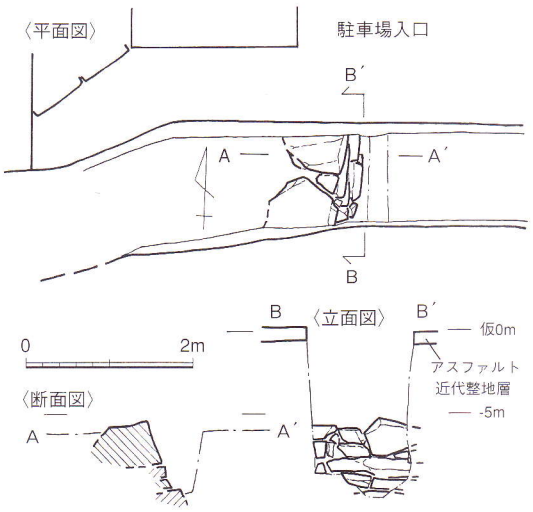
えられた。土坑２は、調査区北西隅で一部が確認されたのみであるが、土師器皿とともにカキ・サザエ等の貝殻を含んでいた。土器よりみて江戸時代前期の遺構とみられた。柱穴１・２は、直径36～52cmの規模で、ともに黄色粘土混じり灰黄茶色土を埋土とし、片岩材を含んでいた。これらの遺構の下層には灰色系砂層が堆積しており、明確な遺構面は確認されなかった。

B地点　現地表面の下約40cmの位置で石垣状遺構が確認された。北面する石垣は２段に積まれており、上段は砂岩、下段は片岩を使用する。ともに長さ55cm以上の巨石ではあるが、下段の石材の下は砂層で明確な基礎構造をもたない施設であり、時期的には新しい時期のものと推定される。

C地点　地表から60cmの位置で東面する石垣遺構が検出された。高さ約40cm分を確認し、さらに下部に続いている。小振りな石材（砂岩と片岩併用）使用することと石垣面が傾斜をもって構築されている特長がある。裏込めの石材も存在しないようである。



B地点石垣実測図（Sは砂岩、Hは片岩）



C地点石垣実測図

まとめ

調査により土坑、柱穴、石垣状遺構、石垣等を検出した。A地点の土坑２が江戸時代前期、土坑１が江戸時代末以降とみられた以外は、時期が不明確であったが、検出層位と構造よりみてかなり新しい時期のものと判断された。（前田敬彦）

8．井辺（いんべ）遺跡 第３次発掘調査

調 査 地　和歌山市神前7－17番地

調査面積　2㎡

位置と環境

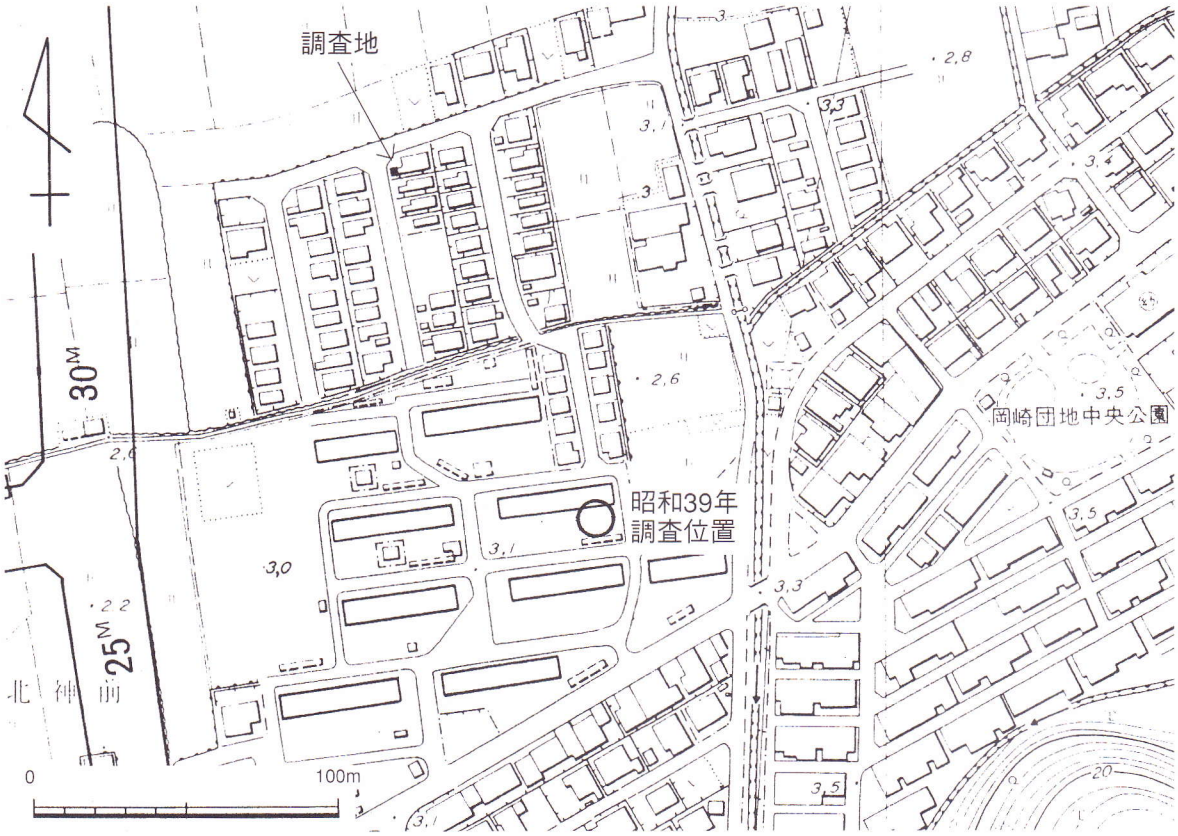
井辺遺跡は、福飯ケ峰の北西部に位置する遺跡で、東西約１km、南北約500mの大規模遺跡である。昭和39年に実施された第１次調査では、弥生時代後期末の２列の土器列（溝か？）や古墳時代初頭の井戸が検出されている(註1)。今回、遺跡範囲内において、個人住宅建築が計画されたため、深掘される箇所について確認調査を実施した。

調査内容

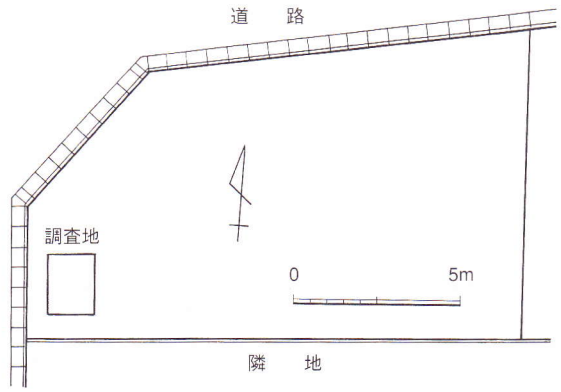
浄化槽設置部分について調査を実施したところ、狭い面積ながら弥生時代から古墳時代への移行期である庄内式併行期の土坑３基が切り合いをもって確認された。基本土層としては、地表面から１層（盛土。厚さ約75cm）、２層（旧耕作土。厚さ約20cm）、３ａ層（黄灰色粘土。厚さ５～８cm）、３ｂ層（山土混じり黄茶色粘土。厚さ４～５cm）がみられ、この３ｂ層の下面が遺構面となる。

土坑１は、平面規模南北90cm以上、東西30cm以上で、検出面からの深さは75cmである。平面プランは隅丸方形を示すが、壁面の状況より竪穴住居とは考えられず、土坑として扱った。土坑内の埋土はおおむね４層に分層でき、最上層と上層に甕を主体として壺・高杯等が多数包含されていた。

土坑２は、直径40cmの浅い窪みで、土坑１に先行する。出土遺物は認められなかった。土坑３も土坑１に先行するものであり、わずかに肩部が検出されたにすぎないが、厚さ20cm程度の堆積土を



調査位置図



調査地位置図

もち、上層（黄茶褐色土）と下層（灰褐色土）に分層される。高杯・器台等が確認された。

各遺構は、土坑３→土坑２→土坑１の順に形成された可能性が高い。

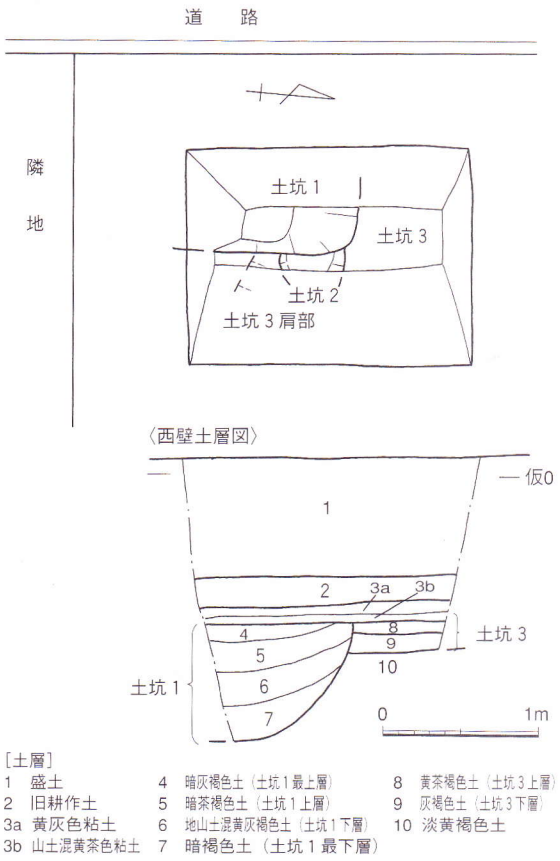
まとめ

極めて小規模な調査地ではあったが、庄内式併行期の遺構が密に形成されていたことが判明した。約130m南東に位置する第１次調査地から、今回のものと前後する時期の遺構が検出されていることから、周辺地域が、弥生時代後期末から古墳時代前期の生活域に相当する可能性が考えられた。

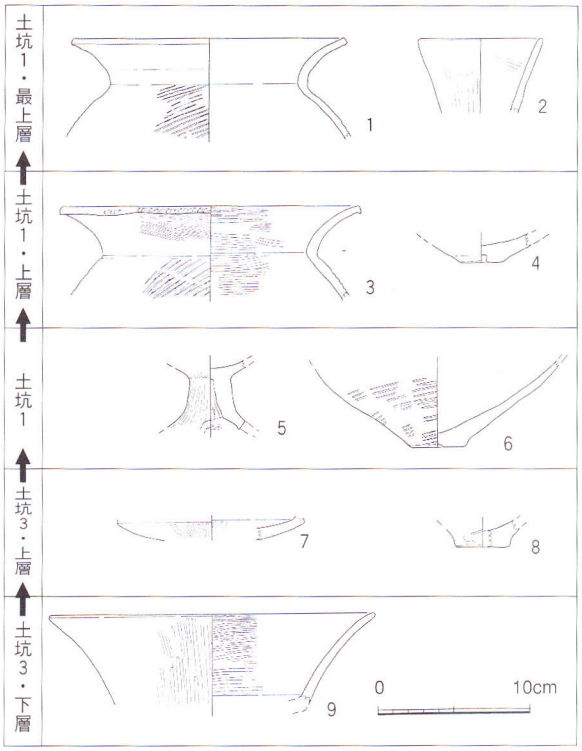
また、遺構の切り合い関係や層序より作成した遺物実測図によると、時期が新しくなるにつれて、底部の丸底化が進行する様子（８→６→４）がうかがわれる。さらに土坑３は小型器台（７）の存在や大きく外反する高杯（９）よりみて、庄内式新段階に比定され、土坑１もタタキ調整される甕の多さやその形態から布留式併行期には下らないとみなされることから、今回検出された土器群は庄内式新段階の微妙な変化を如実に示している可能性があると評価できる。　（前田敬彦）

（註１）

『井辺弥生式遺跡発掘調査報告』　和歌山市教育委員会　1965年



実測図（上：平面図　下：西壁土層図）



遺物実測図（矢印は遺構・堆積の形成順序を示す）

9．井辺（いんべ）Ⅱ遺跡 発掘調査

調 査 地　和歌山市鳴神62－3番地 他

調査面積　2㎡

位置と環境

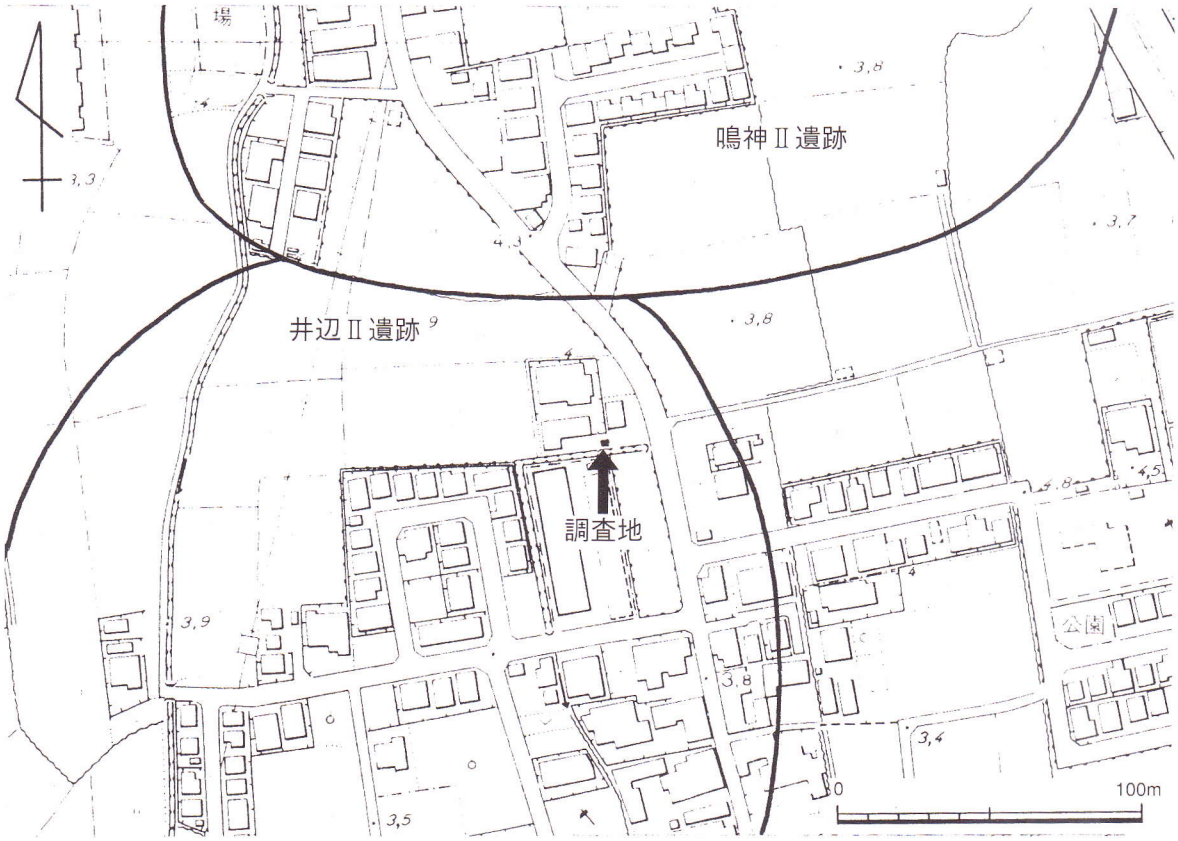
井辺Ⅱ遺跡は、岩橋千塚古墳群の所在する岩橋丘陵の西部の平野部に立地する。本遺跡の北は、鳴神Ⅱ遺跡と接しており、南は井辺遺跡に近接する。鳴神Ⅱ遺跡は、近年の調査により、古墳時代初頭の溝が検出されている。本遺跡は、調査歴もなく、実態が不明確である。

調査内容

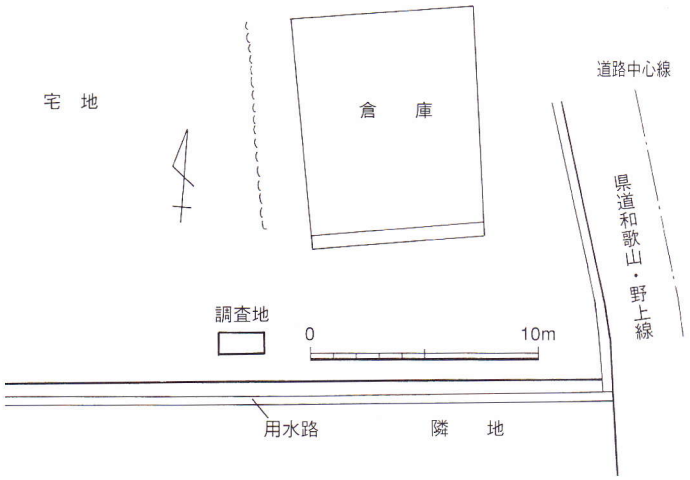
個人住宅建設に伴い、浄化槽部分について確認調査を実施した。調査位置は、東側の県道和歌山・野上線より西へ約15mの位置で、長さ約２m、幅約１mの調査区を設定した。

基本堆積は、地表より厚さ1.25mの盛土、１層（厚さ18cm、旧耕作土）、２層（厚さ４cm、旧床土）、３層（厚さ８cm、灰褐色粘土）、４層（厚さ10cm、地山土混じり灰茶色粘土）、５層（厚さ40cm、暗褐色粘土）、６層（暗灰黄色粘土）である。５層は、工事による掘削深度との関係で、部分的な確認に留めた。３層と５層が遺物包含層であり、４層にはベース層に類似するブロック土を含んでおり、整地に伴い形成された可能性のある土層とみられた。絶対高を求めてはいないが、敷地東側の県道の道路面の標高が４m前後とすると、３層下面は標高2.5m前後、５層下面は標高２m前後になる。

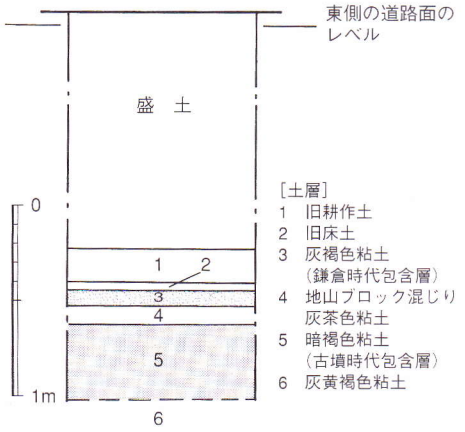
３層出土品には、土師器皿・瓦器等がある。１は土師器皿で、底面には糸切り痕が観察される。



調査位置図



調査地位置図



土層模式図

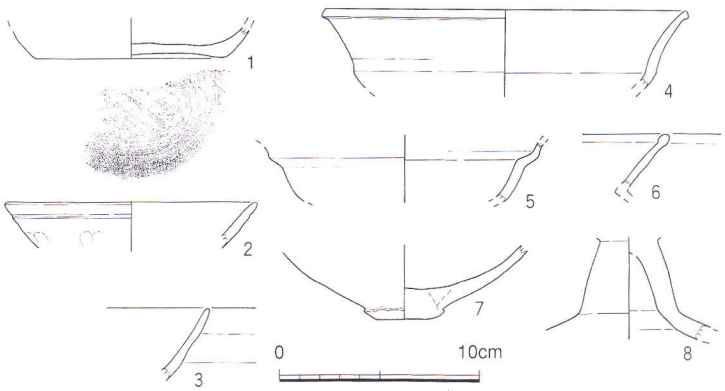
2・3は瓦器でともに椀である。5層からは、古式土師器が出土した。4は高杯の口縁部であり屈曲部をもつ。時期的な点を考慮するならば、あるいは二重口縁壺の口縁部かもしれない。5は有段口縁鉢の屈曲部である。器表面の磨滅が著しく調整は不明である。6は甕口縁部で、端部は肥厚して終わる。7は壺底部とみられ、不安定な平底である。8は高杯の脚部であり、中空でややエンタシスの形状を示す。5層出土土器のうち4・7はやや古い様相をもつものの、5・6・8などの特長からこれらは古墳時代前期の布留式古段階に比定される。

調査区（東より）

まとめ

調査地が極めて小面積であったため遺構は検出されなかったが、3層と5層には比較的多くの土器が包含されていた。3層出土土器は鎌倉時代、5層出土土器は古墳時代前期の布留式古段階に比定される。よって、近接地に当該期の遺構が形成されている可能性が高いと判断された。

（前田敬彦）



遺物実測図

10. 和歌山城跡（わかやまじょうせき） 第６次調査

調 査 地　和歌山市南汀丁８、９番地

調査面積　90m²

位置と環境

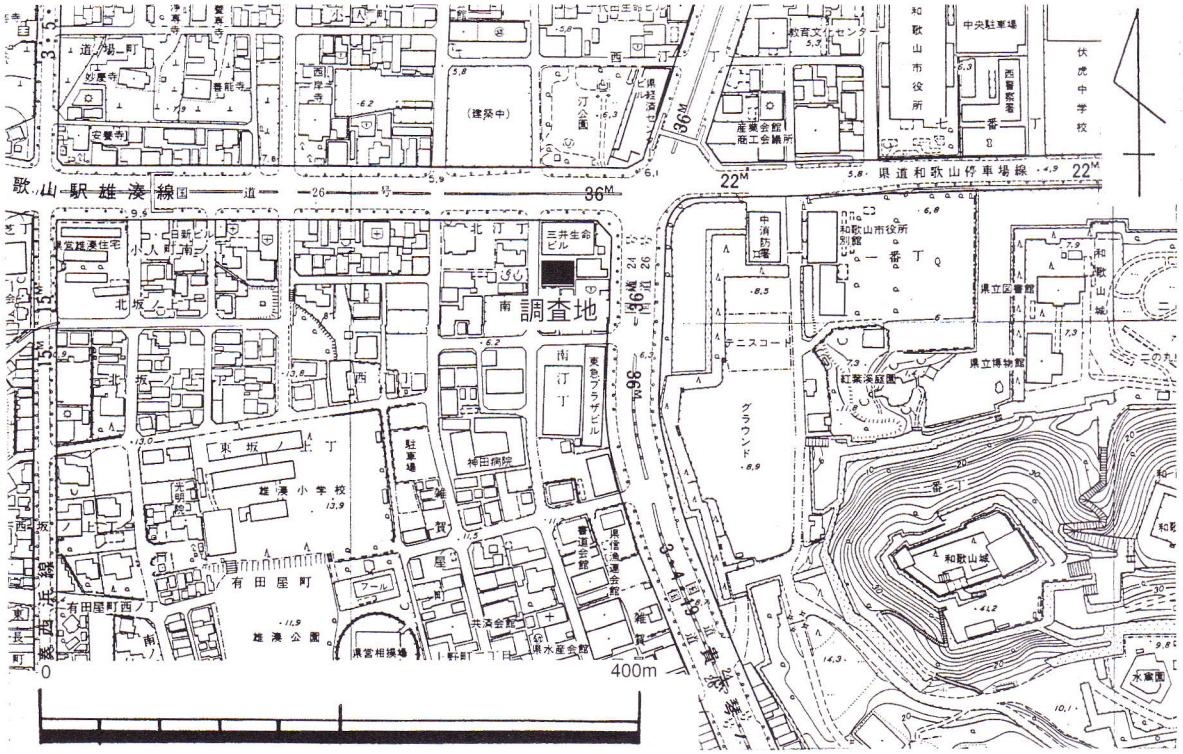
今回の調査地は、和歌山城の西側に位置するものである。遺跡は、和歌山城を中心とした近世の城下町の一角であり、安政２（1855）年のものと推定されている『和歌山城下町図』に、この時期の屋敷の敷地割りをみることができる。

城下町は、天正13（1585）年の和歌山城創建に伴って形成されたと推察されるが、桑山氏が城代であった時期の史料はほとんど現存しておらず詳細は不明である。慶長５（1600）年以降の藩主であった浅野氏の時期は、城下町についての史料がわずかにみられる。その後、徳川頼宣によって、元和７（1621）年から城下町の拡張・整備が行われたとされる。しかし、昭和20（1945）年の空襲によって城下町は壊滅的な被害を受け、往時の姿を残すものは皆無である。

今回は、和歌山城跡において事務所建設工事が実施されるため、和歌山市教育委員会によって試掘調査が行われた結果、石垣等が確認されたため、調査に至ったものである。これまで城下町の調査は、史跡和歌山城を挟んで北側と南側でそれぞれ数回行われているが、西側における調査は今回が初めてである。

調査内容

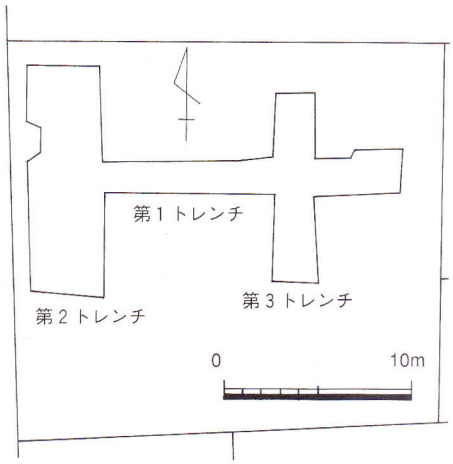
調査区は調査地中央部の東西に延長約20m、幅約１mの調査区を第１トレンチと称し、これと直行する南北の延長約12.5m、幅約3.6mを第２トレンチ、また、調査地中央からやや東に寄ったところの南北長約11m、幅約２mを第３トレンチとして発掘調査を行った。



調査位置図

第１トレンチについては、事前の市教育委員会試掘調査時に自然堆積層近くまで掘削が及んでおり、遺構は確認できなかったため、土層堆積状況の調査を行った。

調査地の基本的な土層堆積状況をみると、現地表（バラス）の下層に戦災後の整地土（第１層）が20～60cm、戦災時の生活面（第２層）が20～40cmの厚さで堆積する。第３層の厚さは約20cmであるが、場所により土色及び土質が何種類かみられる。第４層は約30cm、第５層は、粗砂を多く含む堆積土で、約30cmの厚さで堆積する。第６層（粗砂混シルト）は自然堆積層と考えられる。第４～６層は、調査区全面に堆積している。



調査地区割図

遺構は第２～４層上面を検出面とし、それぞれの面において建物に伴う基礎・石垣・石列・基礎石組み遺構など、江戸時代から近代までのものを確認した。遺構面の標高はそれぞれ約5.3m、約5.1m、約4.7mを測る。以下、時代順に主要な遺構を説明する。

江戸時代中期の遺構（Ⅰ期）

基礎１　第３トレンチで検出したものである。建物の基礎構造と考えられる整地土が溝状に幅約50cm、深さ約50cmの規模で堆積する。基礎は南北方向に延長約3.7mを検出し、北壁から南へ約2.4mの位置で東に屈曲するものである。この遺構は、第４層上面から掘削されており、整地土内から丸瓦と平瓦が出土している。

基礎２　第２・３トレンチの北側で検出した。第２トレンチでは北端から南に約3.8m、第３トレンチでは北端から南に約1.8mの位置で検出した。基礎１と同様に整地土が溝状に幅約60cm、深さ30～60cmに堆積しており、掘り方は、壁面がほぼ垂直に掘削されている。遺構は東西方向に延長約１mを検出したものである。

江戸時代後期の遺構（Ⅱ期）

石垣　第２トレンチの西壁から約1.5mの位置で検出した。この石垣は結晶片岩と砂岩がほぼ等分で構築されているほか、わずかであるが基底石に花崗岩を含む。この基底石は黄色土の土で固定されていた。また石垣の西側に面をもち、調査区の南壁から北へ向かって約7.4m続くものである。このほか石垣基底石の標高は、第１トレンチを境に約10cm北側の方が高くなっている。南側の石垣石材の中には砥石を転用しているものもみられた。

踏石　第２トレンチの南壁面から約2.2mの位置で検出した。１辺約40cm、厚さ約20cmの砂岩で、東側石垣面に近接して据えられている。

瓦列　第２トレンチ南側の西壁から約0.6mの位置で検出した。この瓦列は幅約30cm、深さ約30cmを測る。この瓦列は南北方向でほぼ直線に延びているが、踏石の西側で膨らみ、南壁から約５mの位置で西へ屈曲している。瓦は全部で18枚が埋設されていたが、内３枚（軒平瓦・平瓦）は踏石の西側に重ねて埋設されていた。瓦の種類は、軒平瓦１枚、平瓦16枚、桟瓦１枚である。

基礎石組１　第３トレンチの南側で検出した土塀の基礎とみられる石組である。この基礎石組は、トレンチの南壁から約3.7mの位置で撹乱を受け、途切れていた。石組みは、東西に面をもつもので、

幅は約１mを測る。検出した範囲においては、使用された石材は結晶片岩と砂岩がほぼ等分で構築されている。

基礎石組２　第２トレンチの北側で検出したもので、これも基礎石組１同様、土塀基礎とみられる石組である。使用された石材は、結晶片岩と砂岩の他、わずかであるがチャート系のものを含む。構築された石組は東西に面をもち、トレンチの北壁から約3.5cm、幅約80cmの規模を測る。また、この石組みはスロープ状になっており、南側が約20cm高くなっている。裏込からは輸入磁器（中国製）などが出土した。

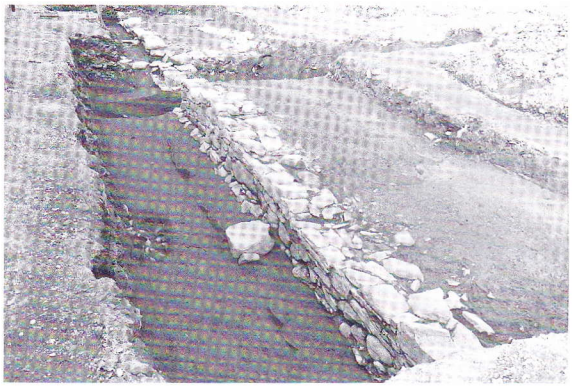
江戸時代後期～昭和20（1945）年の遺構（Ⅲ期）

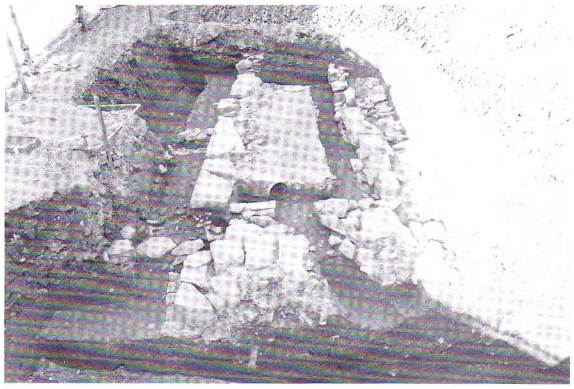
石垣　第２トレンチで検出した。石垣は西側に面をもち、調査区の南壁から北へ約7.4mの位置までは江戸時代後期の石垣の方向、面、石材を踏襲して積み替えており、それより北側は新しく積んだものと思われる。石材は主に結晶片岩を使用しており、特に上面に配置しているが、砂岩やチャート系の河原石もみられる。また裏込には瓦、堺焼すり鉢をはじめとする幕末の遺物を含むものである。この石垣の上面には、焼土や焼けた石があることから、昭和20（1945）年の戦災を受けるまで機能していたものと考えられる。

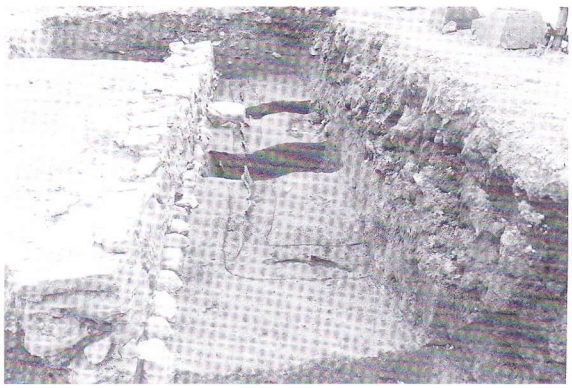
基礎石組み３　第２トレンチの北壁から南へ約５mの位置で検出した土塀の基礎とみられる石組である。この石組は南北に面をもち、検出長約３m、幅約60cmの規模を測る。

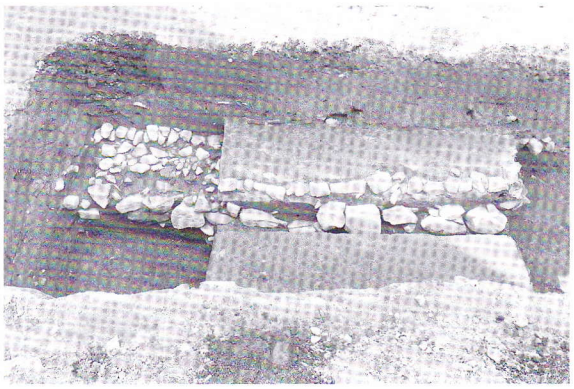
石組排水溝　第２トレンチの北側で検出したもので、Ⅲ期に延長された部分の石垣下に組み込まれた土管を通り、ここに排水されるものである。この石組排水溝の壁面は結晶片岩を用いているが、底には平瓦を使用している。石垣下に組み込まれた土管は、石垣裏側で南東方向に埋設されていたが、第１トレンチを境に壊されており、その延長部を確認することができなかった。

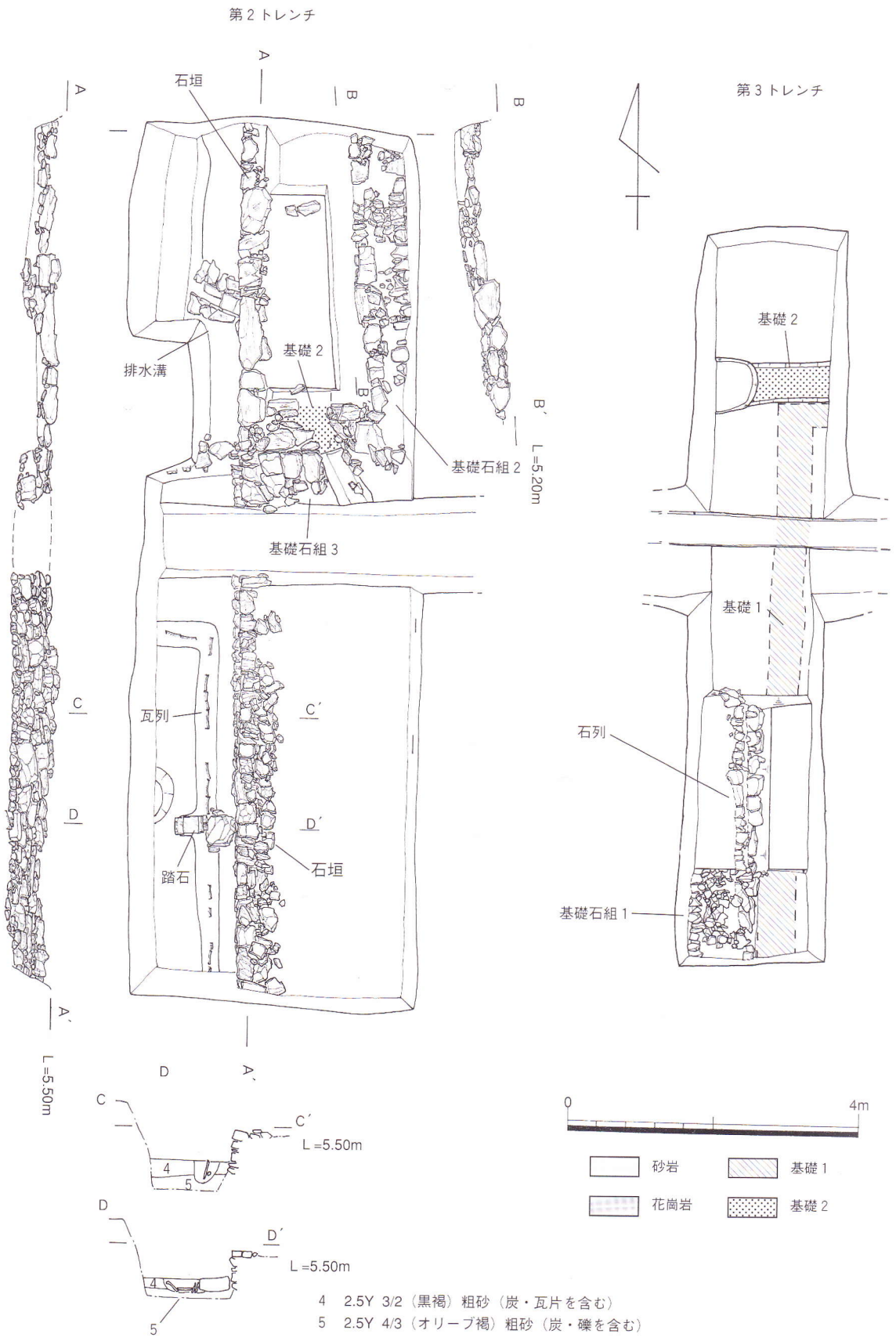
石列　第３トレンチの南側で検出した。この石列


第２トレンチ全景（南西から）


第２トレンチ北側全景（南から）


第２トレンチ南側全景（北から）


第３トレンチ基礎石組１・石列（東から）

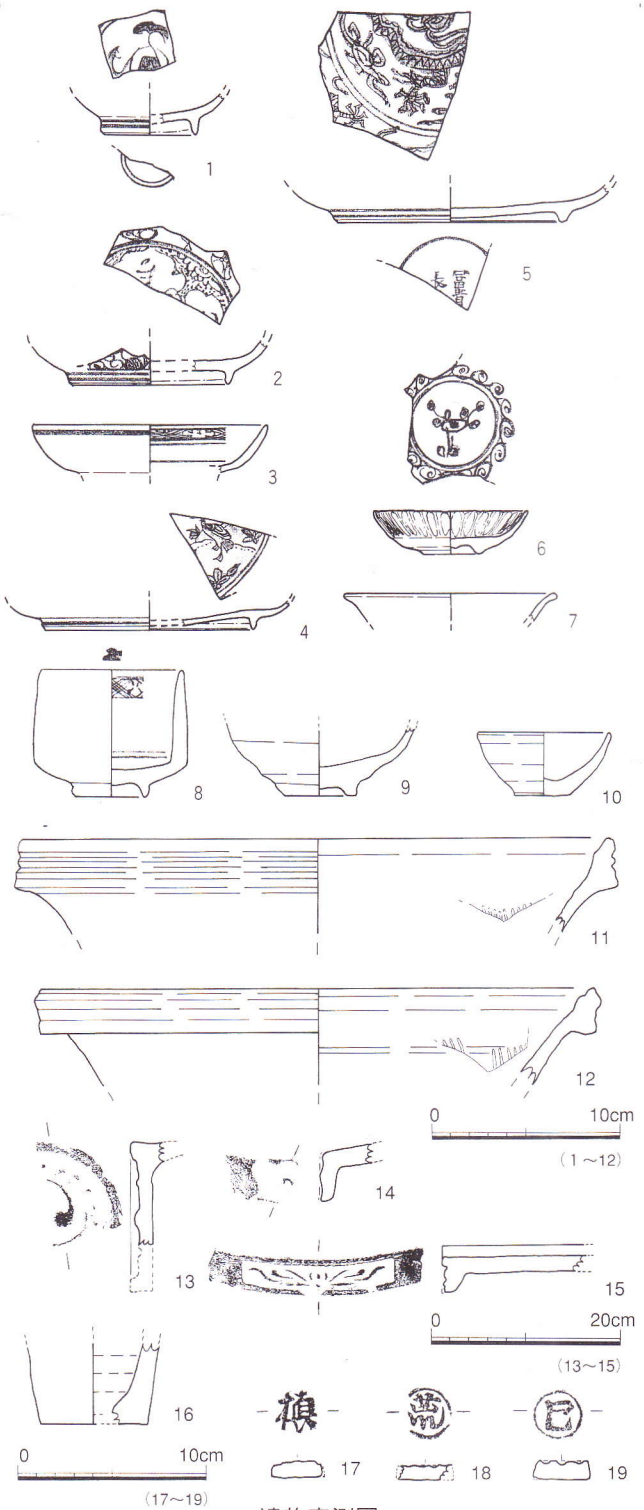


第2・3トレンチ遺構実測図

は、江戸時代後期の基礎石組１の方向性をほぼ踏襲している。ここで使用されている石材は結晶片岩と砂岩であるが、この調査で検出した他の石材を用いた遺構と比較すると直径10cm程度と小ぶりなものが多い。

出土遺物は、須恵器、中世土師器、輸入磁器（中国製）、備前（壺、甕、水指、すり鉢、徳利）・丹波・信楽・堺（擂鉢）などの焼締陶器、志野などの瀬戸美濃系陶器、唐津などの肥前系陶磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦・塼などの瓦、炮烙・火鉢・焼塩壺・灯明皿・泥面子・土人形などの土製品、火打石、硯などの石製品がある。

１は染付碗である。内面に花文を描き、口縁部を欠くが口縁端部を内湾させるのである。染付皿（２～６）について、２は口縁部を欠くが口縁端部を外反させるものである。外側面に唐草文を、内面には梵字文を描く。３から６までは口縁部を内湾させるものである。３は口縁端部内面に四方襷文を描く。４は内面に細線描きで水鳥などを描くものである。５は高台内に圏線と「長命富貴」を、内面に龍を描く。６は内面中央に花文、その周りに圏線と渦文を描くものである。口縁部は型押しにより菊花形を呈する。白磁皿（７）は口径11.4cm、残存高1.5cmを測り、灰白色を呈するものである。８は青磁染付碗である。内面は口縁部に「四方襷文」、底面にコンニャク印判で「五弁花文」、体部に圏線を描くものである。９は唐津焼碗で、内面に胎土目、外底面にはちりめん皺、内外面に灰色の施釉がみられる。10は唐津焼小碗である。内面に緑灰色の施釉、底部に糸切りの痕跡がみられる。11・12は、備前焼擂鉢である。13は左巻き三巴文軒丸瓦である。14・15は軒平瓦である。16は焼塩壺の底部である。ロクロ成形で、底部に糸切りの痕跡がみられる。17～19は文字を型押しした泥面子である。17は「槙」。18は「荒」。19は「巳」の文字が表面に確認できた。

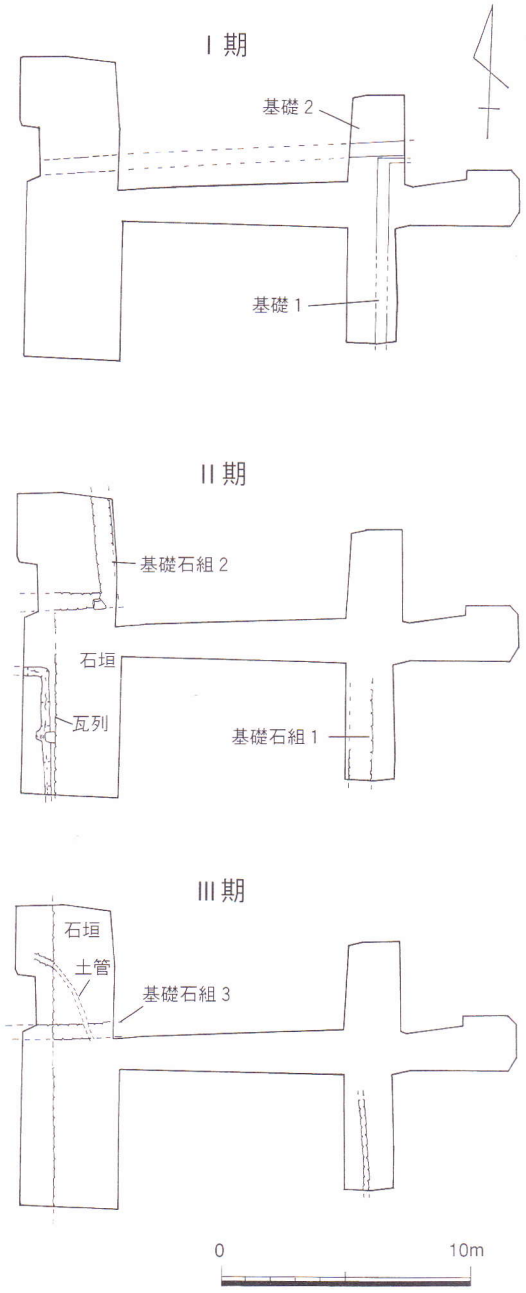


遺物実測図

まとめ

調査の結果、建物に伴う基礎・石垣・石列・基礎石組などの遺構を検出した。

基礎については、基礎２は基礎１より時期の新しいものであるが、基礎１と基礎２を同一面（第４層上面）において検出した（Ⅰ期）。このことから、基礎１・基礎２は構築された時期は異なるものであるが、大きな年代差はないものと推定される。また、検出面である第４層内に和歌山城創建時に伴う遺物が出土している。検出した江戸時代後期の遺構である石垣、基礎石組みをみると、途中で東に屈曲して構築されていた（Ⅱ期）。安政２（1855）年のものと推定される『和歌山城下町図』での敷地割りをみると各屋敷の境界が互い違いになっている。検出した江戸時代後期から昭和20（1945）年にかけての遺構である石垣、石列をみると、南北方向にほぼ直線的な構造をもつものである（Ⅲ期）。『切絵　和歌山城下町考』は、明治19（1886）年発行の「和歌山市街図」を基本にして補正復元したものを、昭和46（1971）年の現勢図と対置したものである。この地図をみると安政２（1855）年には互い違いになっていた屋敷の境界が、明治19（1886）年には直線になっている様相が窺える。これは、検出した遺構面のⅡ期とⅢ期の画期を年代的に示唆するものであろう。



遺構変遷図

和歌山城跡に関する調査は今回で６回目を数え、それぞれ限られた範囲での調査であるが少しづつ和歌山城下の実態が明らかになりつつある。特に今回はこれまで調査例のない和歌山城跡西端部での資料を得て、遺跡様相の一部を明らかにすることができた。

（奥村　薫）

11. 史跡和歌山城（しせきわかやまじょう） 第17次発掘調査

調 査 地　和歌山市一番丁３番地

調査面積　約180m²

位置と環境

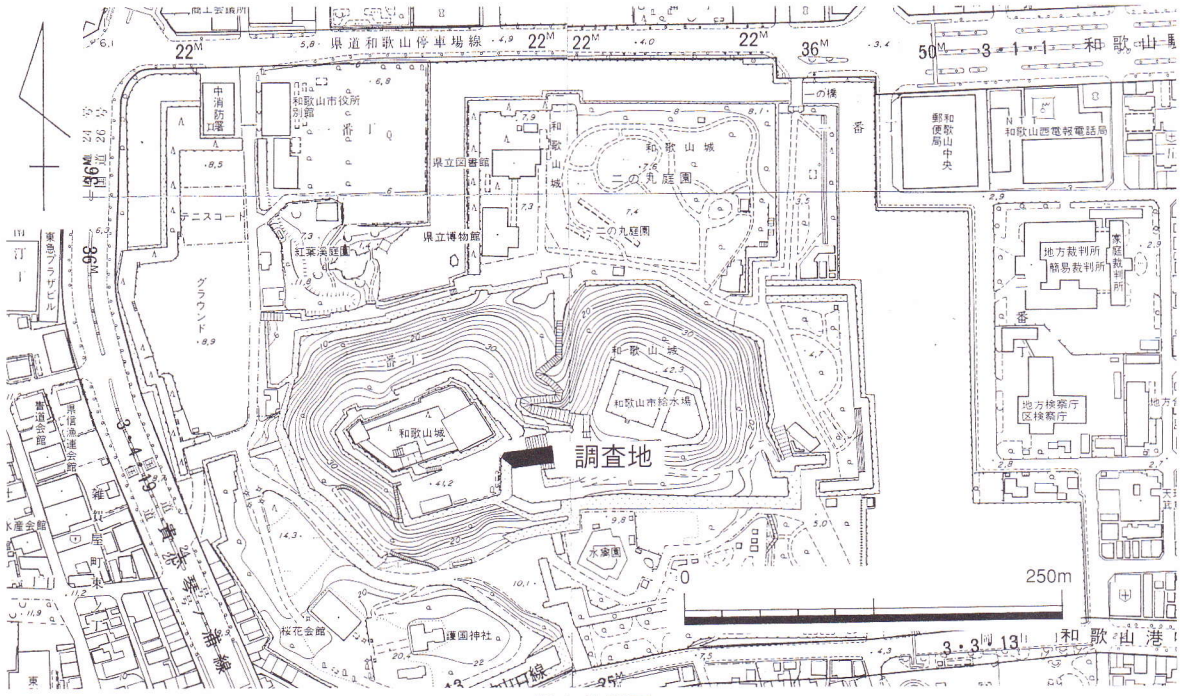
史跡和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。岡山は、東西２つの頂部を持つその景観から虎伏山とも称されており、中央の谷状地形を挟んだ西側には天守閣が、東側には本丸御殿跡が存在する。今回の調査は天守閣の南東に位置する御天守一ノ門櫓台石垣の改修に先立ち、周辺の遺構確認及び石垣の構造解明を目的として行ったものである。

調査内容

本石垣は、自然石の野面積みで構築された櫓台石垣である。石垣は北、東、南側にそれぞれ面を持ち、南面は２段積みで構築されている。石材にはほとんど結晶片岩を用いているが、一部に砂岩もみられ、その中には石塔の一部や石臼の未製品、柱の礎石なども存在している。

石垣の現状を概観すると、まず櫓台の北面にあたる石垣１は東西方向に約21mの規模で築かれているもので、石垣１北側の坂道路面の傾斜角は７度、天端はほぼ水平に積まれている。石垣の高さは最大3.5mで、勾配は65度を測る。東面にあたる石垣２は、基底部で幅約８m、上端部で幅約4.5mを測る。石垣の高さは最大５mで、勾配は69度である。南面にあたる２段積み石垣（石垣３、石垣４）は、東西方向にそれぞれ約32mの規模で築かれている。高さは石垣３が約６m、石垣４が約３mであり、石垣４の上部は幅１～1.5mの犬走り状の平坦面になっている。勾配は石垣３が65～70度、石垣４が68～73度であり、野面積みの石垣としてはかなり急な勾配をもつものであるといえる。また石垣の隅角部には算木積みがみられる。

調査は石垣の裾部及び上面を便宜上A～D区と呼称して、それぞれの調査区単位で行った。



調査位置図

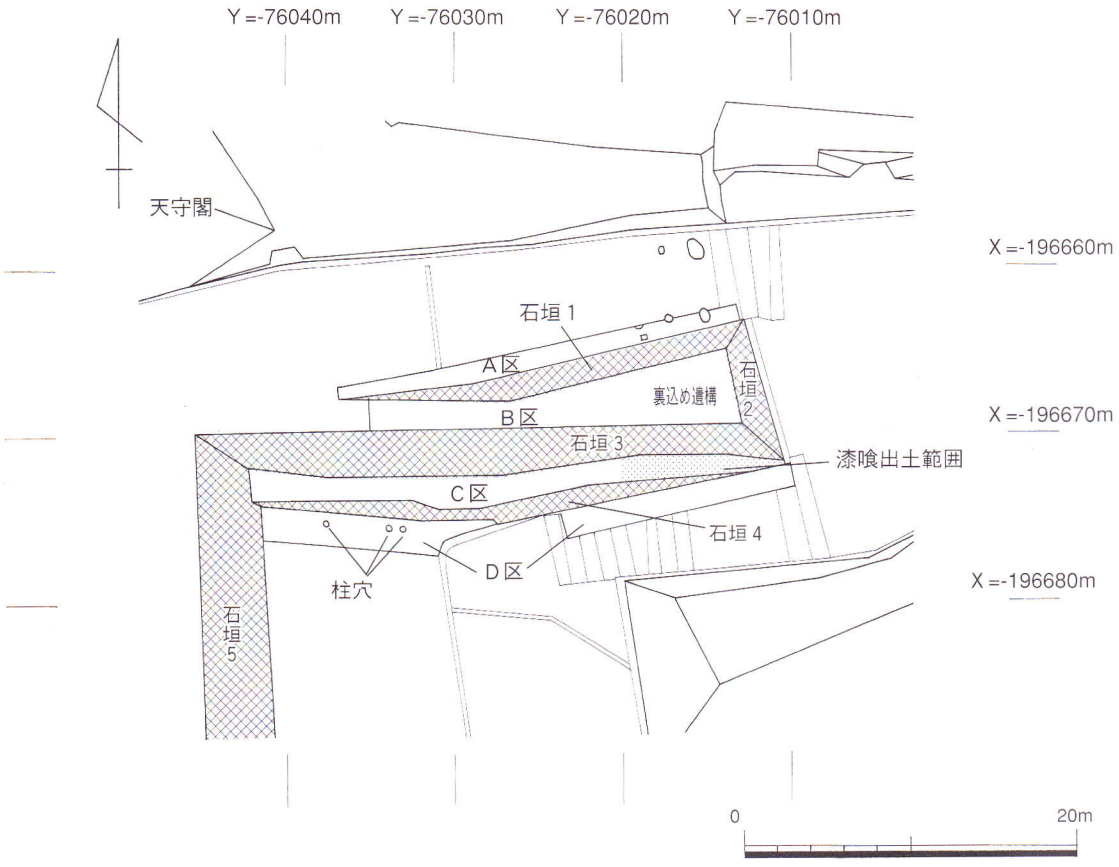
［A区］　遺構は、第２次世界大戦の戦災に伴う焼土混じりの整地土（第２層）を掘削した後の第３層上面において検出している。溝１は石垣１に沿って構築されている石組の側溝で、石組は基本的に３～４段で構成されている。溝の底部の一部に敷石もみられる。幅約30cm、深さ20～30cm、検出長約23mを測る。流路方向は西から東であり、石材には結晶片岩を用いるものである。また現地表面に露出していた４つの礎石以外に新たに礎石を２ヶ所検出した。第３層上面に据えられており、櫓門に関わる礎石であると思われる。石材は全て砂岩である。

［B区］　基本的な土層堆積状況は表土である第１層が約20cm、瓦を多く含む第２層が10～20cmの厚さで堆積する。裏込め石は第２層を掘削・除去後に検出したが、その検出範囲はＢ区東側に限定される。検出遺構としては基礎石組がある。これは石垣３の天端に沿って構築されているもので、南北両側に面を持っていることから土塀の基礎と考えられる。石材は石垣と同じく結晶片岩である。またB区東端から約７mの範囲において、直径約15cm程度の結晶片岩と砂岩を密に敷き詰めた状況（裏込め遺構）を確認できた。

［C区］　基本的な土層堆積状況としては、表土である第１層が約15cm、第２層が10～30cm、裏込め石の埋土である第３層が約20cmの厚さで堆積しており、第３層下層から調査区のほぼ全面に裏込め石を検出した。第４層は調査区西側にのみ堆積しており、その下面から岩盤を検出した。

第２層はB区から転落、堆積した土と考えられるが、さらに漆喰を含む層（第2a層）と含まない層（第2b層）に細分することができる。第2a層の堆積範囲は調査区東端から約10mまでの範囲であり、Ｂ区裏込め遺構と対応しているものと考えられる。

［D区］　Ｄ区の土層堆積状況は、東側の階段部分と西側の表土堆積部分とで様相が大きく異なる。



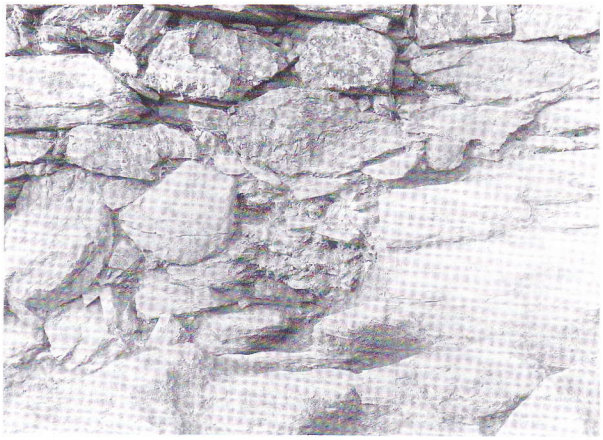
調査地周辺図

まず、D区東側の基本的な土層堆積状況としては、石畳の下の整地土（第１層）が５cm、焼土を含んだ整地土（第２層）が５～10cmの厚さで堆積している。その下面である３層上面において石組の側溝（溝２）、第４層上面において暗渠排水施設（溝３）を検出した。溝２は後世に付設された側溝である。溝３は簡素な形の暗渠排水施設であり、第４層及び岩盤を垂直に近い形で掘削し、その中に径約20cmの結晶片岩を詰めこんでいるものである。流路方向は東から西であるが溝の西端から表坂に沿って南へ屈曲すると思われる。

調査地全景（南西から）

次に、D区西側の土層は、10層に分層できた。その内第１～４層は近代以降、第５～７層は近世の遺物を包含するものである。岩盤は、石垣構築の際の整地土と思われる第８～10層の下面から検出した。

遺構としては岩盤上において、石垣構築に関係するとみられる柱穴を３基検出している。



D区石垣基底部岩盤成形状況（南から）

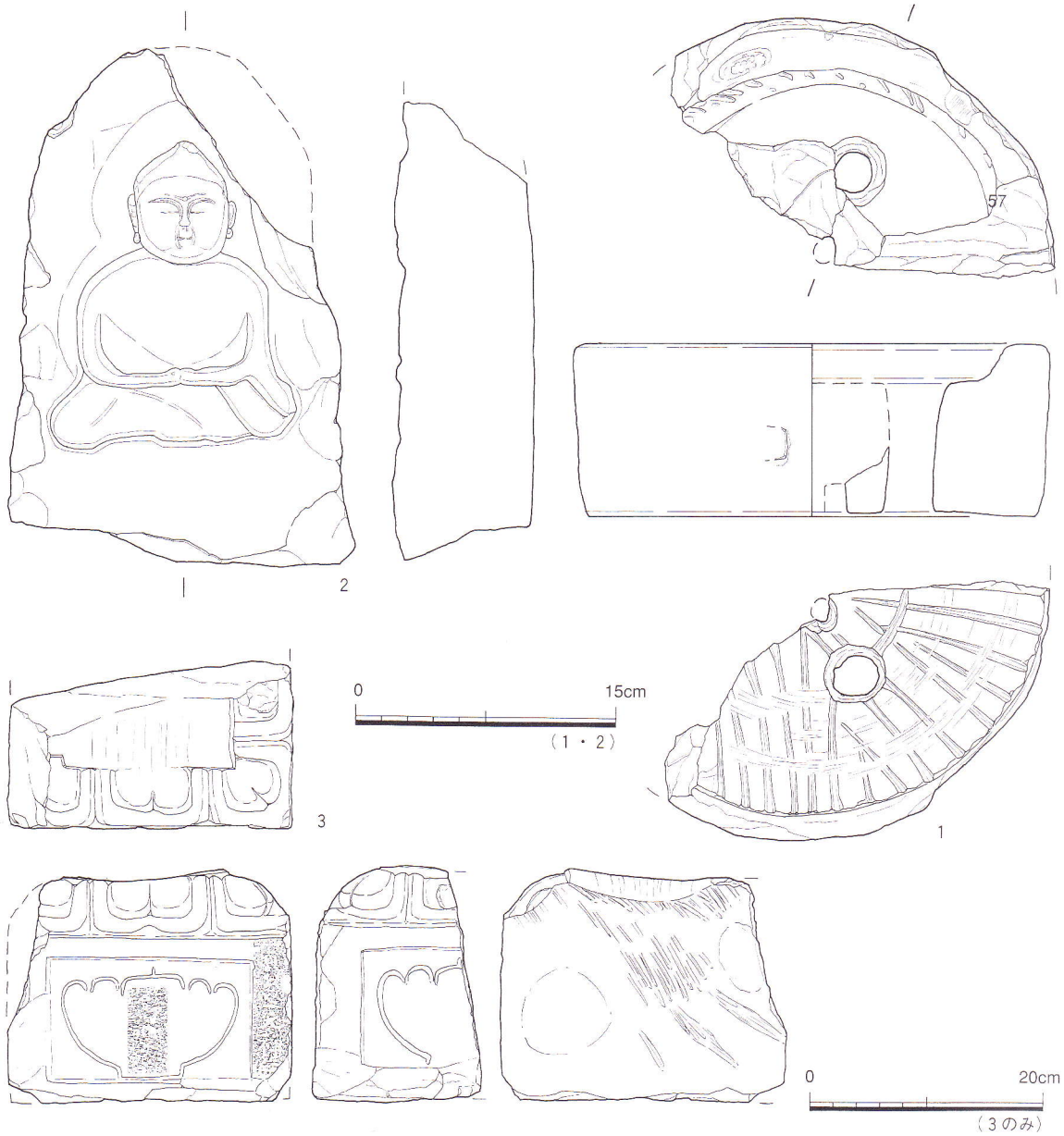
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器（中国製・朝鮮製）、唐津焼などの肥前系をはじめとする陶磁器、備前焼などの焼締陶器、焼塩壺、土人形などの土製品、軒平・軒丸・桟瓦・道具瓦などの瓦のほか鉄釘などが遺物収納箱（コンテナ）に約50箱出土した。この中でも瓦が大半を占め、特にC区から多く出土している。ここでは昭和60、61年度に行われた石垣４の崩壊に伴う修復工事の際に、裏込めから出土した遺物を紹介したい。

１は砂岩製粉引き臼の上臼で、高さ9.9cm、臼部径は25.6cmを測る。目は８分画５～７溝で使用痕が顕著に残る。縁の部分は平滑であり、石臼が破損した後も砥石として用いられたことを示している。２は石仏で阿弥陀如来座像を表現したものである。像は浮き彫りにされており、裏面は自然面のままである。高さ28.6cm、最大幅19.4cm、重量は6.24kgを量る。３は宝篋印塔の基礎で、欠損の後に上部及び背面を砥石として転用するものである。複弁一葉の反花式基礎で輪郭右側に「貞公宝元禅師」の銘がみられ、格挟間の中央部にも判然としないが銘が刻まれている。これは「乾坤」と読める可能性がある。以上の遺物は、最終的に石垣の裏込め材として転用されたものである。

まとめ

以上、今回の御天守一ノ門櫓台南面石垣改修に伴う発掘調査で一ノ門櫓台に関わる石垣の構築方法及びその周辺の坂道の構造の一部を明らかにすることができた。

石垣周辺の坂道の造成状況について、石垣北側では当時の地表面であるA区第３層上面が現在の



遺物実測図

地表面と同じようにスロープを形成しており、石垣に沿って石組の側溝を設けている。石垣南側のD区は現在階段となっているが、階段に相当する遺構は検出することができず、当初は坂道であったものと推定することができた。なおD区で検出した溝３は、道の中央部の下に設けられた暗渠排水というべき様相を呈しており、表坂の造成及び坂道の排水処理方法を考える上で注目される遺構である。

A区では新たに２個の礎石を検出したが、これらの礎石が当初の地表面と考えられる第３層上面に据えられていたこと、B 区の櫓台上面で裏込め遺構を確認したこと、また裏込め遺構の範囲がC区の漆喰堆積層（第2a層）検出範囲と対応することなどから、御天守一ノ門が『和歌山御城内惣御絵図』に描かれたとおりの櫓門形式を備えたものであったことを裏付けることができた。

なお本石垣は、石材の種類や構築方法などから、御天守一ノ門櫓台は和歌山城の創建期に天守台とともに成立した可能性が高いと考えられる。（高橋方紀）

12. 太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第37次調査

調 査 地　和歌山市太田422番地

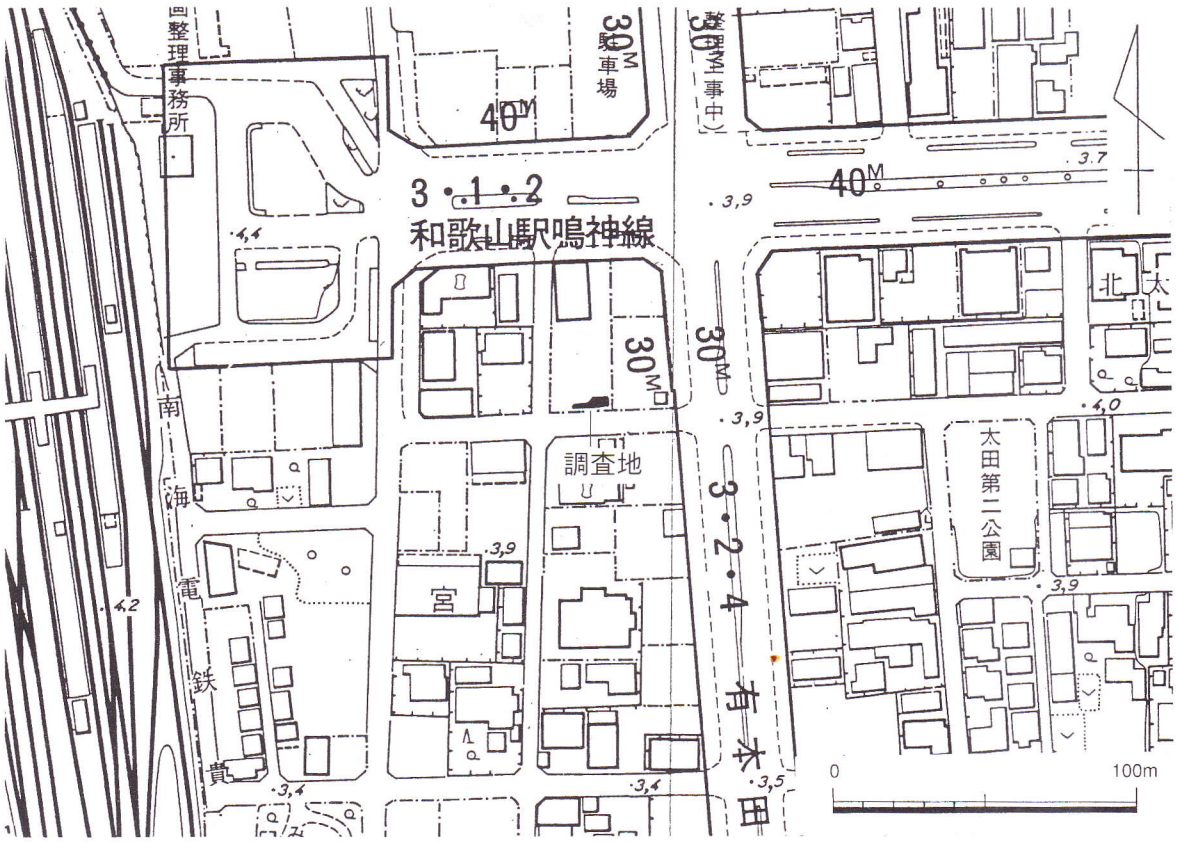
調査面積　20m²

位置と環境

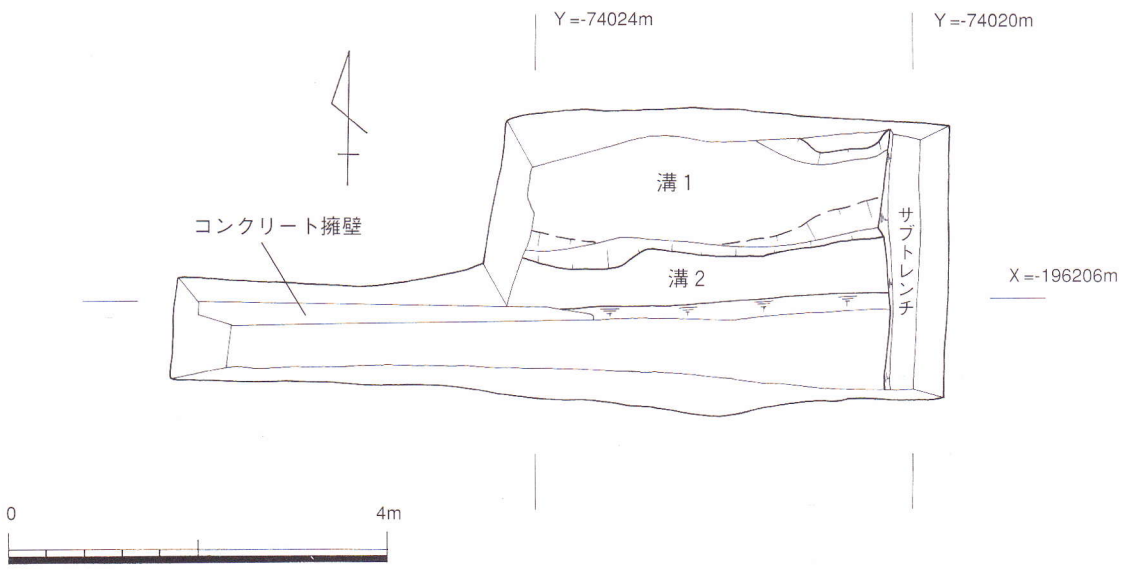
今回の調査地は、遺跡の西部に位置し、既往の調査地点である第26次調査地が幅約８ｍの道路を挟んだ南側近接地に、また北側約100mの地点には、第33・34次調査地点が位置する。第26次調査では弥生時代前期の大溝、弥生時代中期の水田や室町時代の溝が、また第33・34次調査では、弥生時代中期の大溝、奈良時代の大溝、平安時代の溝などが検出されている。

調査内容

今回の調査範囲内の南側は、既にコンクリート擁壁が東西方向に構築され、幅60cm、地表面からの深さ1.2mの範囲で南壁際全体が撹乱を受けていた。また当地は既に造成が行われている地点であり、この整地土が60～80cmの厚さを測る。このように、撹乱等が著しく土層の堆積は一様ではないが、基本的に整地層下から無遺物層まで大きく６単位の堆積を確認することができた。整地層下の第１層は近代から現代にかけての堆積であり、約10cmの厚さを測る。第２層は一定量の遺物を含む江戸時代末期の遺物包含層であり、約60cmの厚さをもつ。第３層は暗灰黄色の粗砂混シルトで20cmの厚さを測る江戸時代の遺物包含層である。この第３層上面において東西方向の江戸時代の溝１を検出した。さらに下層の第４層は黄褐色系の粗砂混シルトであり、15cm前後の厚さを測る江戸時代初頭の遺物包含層である。この第４層の下面では、室町時代の溝２を検出した。また第５層は鎌倉

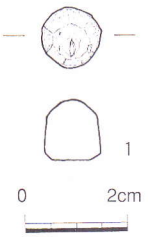


調査位置図



遺構全体平面図

時代頃の堆積とみられ、さらに第５層下の状況は、調査区東壁直下に設定したサブトレンチ壁面において、厚さ60cmを測る黄褐色系の細砂混シルト（第６層）と灰色シルト（第７層）を検出したが、両者とも全く遺物が含まれていない無遺物層である。この第６層上面での標高は、約2.1mである。



遺物実測図

土器には弥生土器の壺・高杯、土師器の甕、須恵器の蓋杯・甕、黒色土器椀、瓦器椀、土師器皿、備前焼のすり鉢、輸入陶磁器である中国製青磁碗・染付皿、瀬戸・美濃系陶器や肥前系陶磁器などが出土した。石器ではサヌカイトを用いた石鏃が１点と砂岩の自然石を用いた叩き石が１点出土した。また金属製品では火縄銃の玉とみられる鉛玉（１）や銭貨である寛永通寶などがあり、また自然遺物には馬の歯や桃の種子がある。

まとめ

今回の調査地は第26次調査地と近接していたことから弥生時代前期から中期にかけての遺構が検出されるものと考えられた。特に、弥生時代中期の水田が当調査地に広がりをみせることが確実とみられた。しかし、室町時代および江戸時代の遺構によって弥生時代の遺構面が既に失われていることが確認できた。今回検出した室町時代の溝２と第33・34次調査において検出された平安時代の溝は、ほぼ平行するものであり、両者の間隔が約110mを測る。このことから、「名草郡４図７里36坪」と「名草郡４図８里１坪」の坪および里境溝の可能性が高いものと考えられる。さらに、溝１は溝２を踏襲する形で掘削されていることから、この条里制土地区画が江戸時代においても地割りに踏襲されていたものと考えられる。

（井馬好英）

【参考文献】

中野栄治「条里制」『和歌山市史』第１巻　和歌山市史編纂委員会　1991年

『太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年

13. 和歌山城跡（わかやまじょうあと） 第７次調査

調 査 地　和歌山市三番丁２番地

調査面積　約80m²

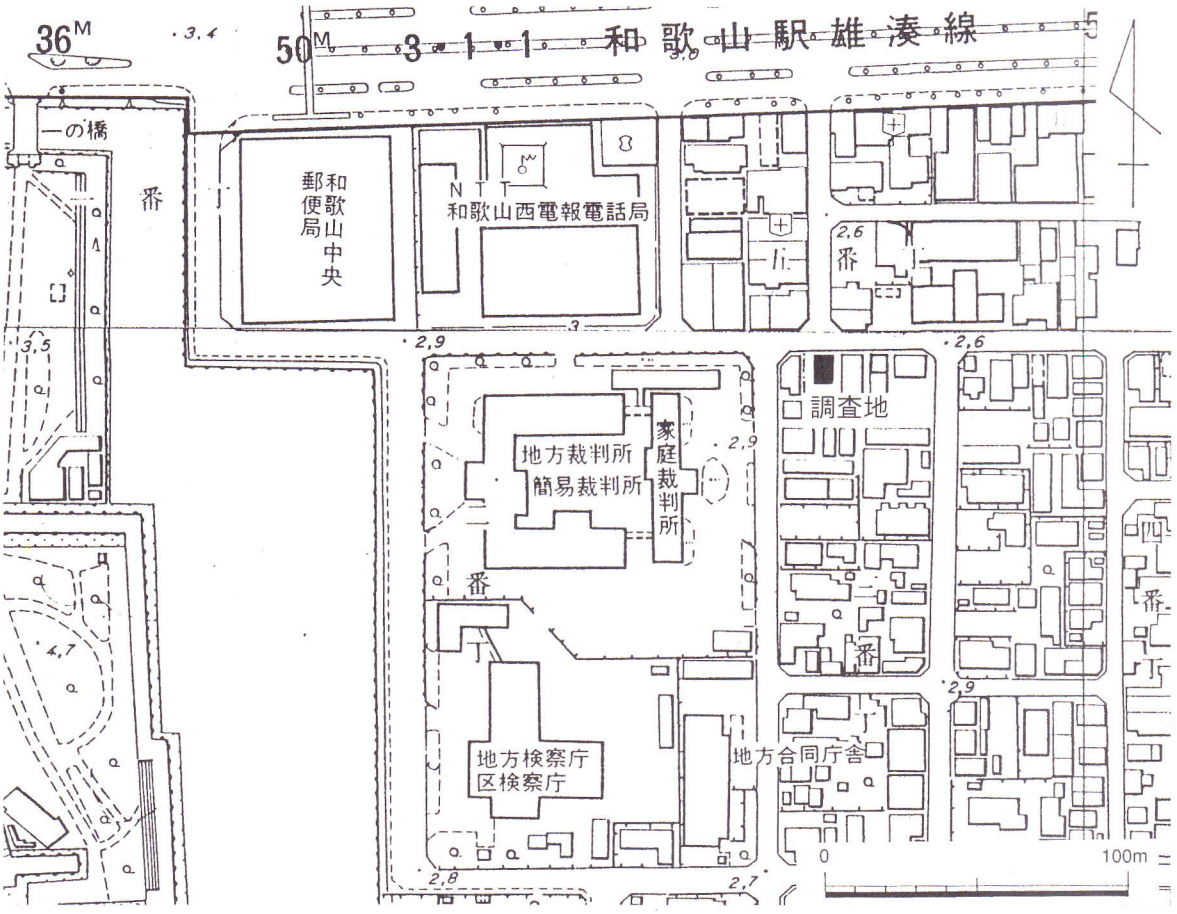
位置と環境

今回の調査地は、史跡和歌山城の東約300mに位置し、元来和歌山城の三の丸にあたる地点であり、現在和歌山城跡として周知されている。また当地は、幕末当時の地目が武家屋敷とされている地点にあたり、安政２（1855）年の「和歌山城下町図」を参照すると、調査地に相当する地点は松本幸次郎の屋敷内の一角であったものと推定できる。

調査内容

調査地の基本層序は、上層から厚さ10cmを測る現代の整地土（第１層）、約20cmを測る戦災によるとみられる焼土（第２層）、５～15cmを測る明治時代の整地土（第３層）が堆積し、この第３層の下面が第１遺構面である。さらに第３層下には、部分的に厚さ10cm程度を測る江戸時代の遺物包含層（第４層）が堆積し、この第４層の下面が第２遺構面である。これらの遺構面を形成する第５層は、江戸時代初頭の整地土とみられる。

まず第１遺構面は、標高2.95mを測るもので、石列３条、溝２条、土坑２基や礎石建物に伴うとみられる根石群などを検出した。礎石建物に伴うとみられる根石では、調査区のほぼ中央部を南北に



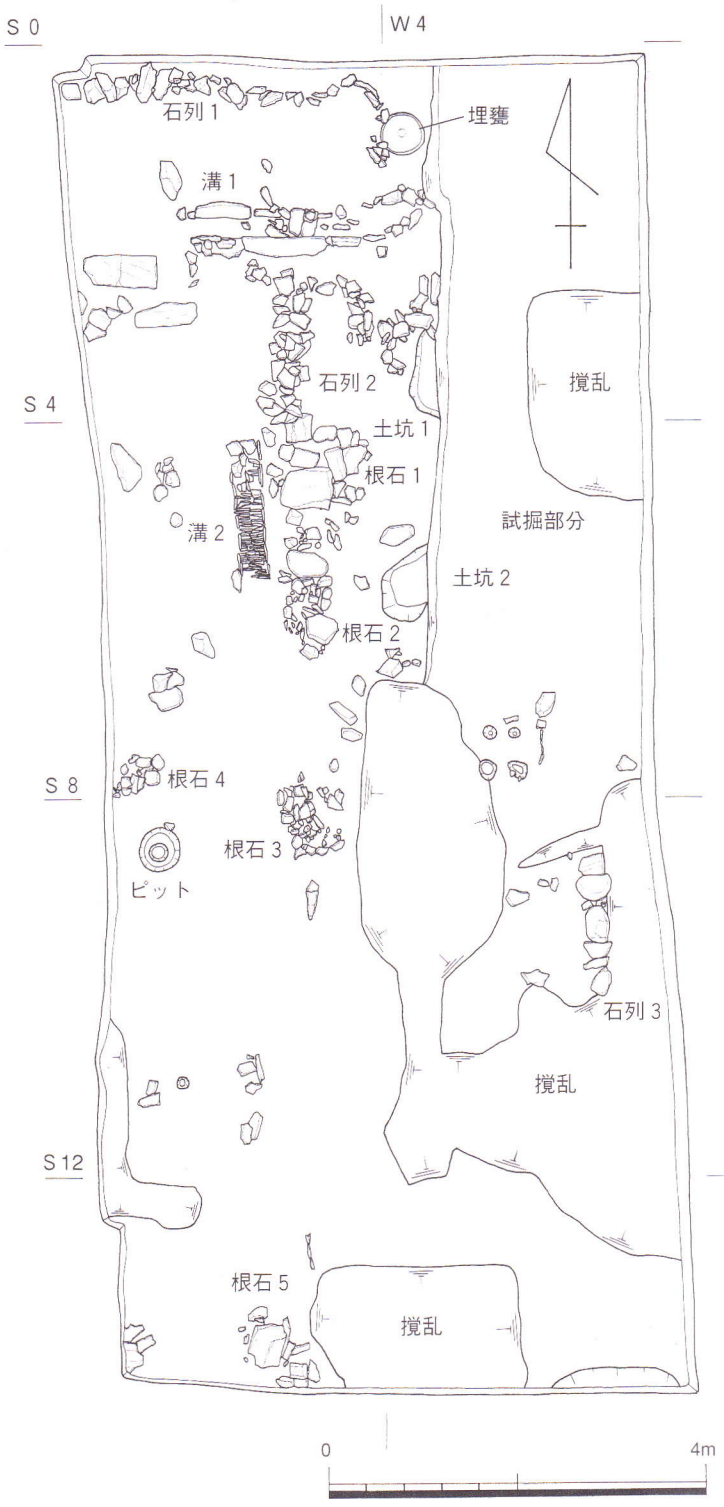
調査位置図

のびる結晶片岩の集石部分を４カ所（根石１～３・５）検出し、これらが直線上に並ぶことから、根石３・５間に根石が存在していたものとみられる。また根石３に対応するとみられる根石４や根石５に対応するとみられる調査区南西端の集石部から西側への展開が考えられ、N-４°-Eに主軸をもつ総柱の礎石建物であったものとみられる。溝１は、N-86°-Wに主軸をもつ幅20cm深さ20cm程度を測るもので長さ2.4m分を検出した。この溝の構築方法は、結晶片岩と砂岩の両方を側壁に利用した石組溝であり、側壁内側には漆喰を塗布している。また溝２は、N-３°-Wに主軸をもつ幅30cmを測るもので、長さ1.4m分を検出した。この溝は、側壁に平瓦を立て並べ、その内側には側壁と直交方向に隙間なく瓦を立てている。調査区北端で検出した石列１は、石垣等のウラゴメの一部とみられ、このウラゴメをもつ石垣は、調査区の北側にあたり、その面は北側にあるものと考えられる。

次に第２遺構面は、特に遺構が良好に残存しているとみられたS３～９m付近に限定して調査を行った。この第２遺構面は標高2.85mを測るもので、溝１条、土坑２基、ピットなどを検出した。溝３は、ほぼ真北に主軸をもつ溝で、残存状態の良好な部分での幅50cm、検出長2.2mを測る。この溝は、側壁に結晶片岩を用いた石組溝であり、内部には溝の主軸方向に平瓦を２～３列立て並べている。土坑５は、東西幅60cm、深さは10cm程度のもので、埋設時に土器を一括廃棄したものと考えられる。

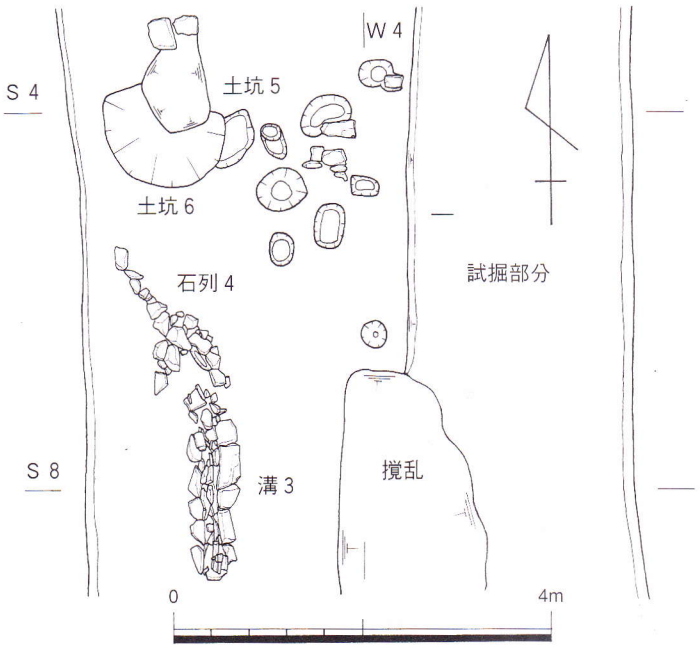
遺物については、土坑５から一括出土した土器（１～26）とそれ以外の遺物（27～32）に分けて記述する。

１・２は、肥前系の陶器碗で



第１遺構面遺構全体平面図

ある。３・４は、瀬戸・美濃系の陶器であり、３が黒釉のいわゆる拳骨茶碗、４が緑灰釉を施した鉢である。５～８は、近在窯系の湯飲み茶碗である。６には小杉文が染付され、また７には笹が色絵付けされている。９～26は肥前系磁器の染付である。９は肉厚の碗で、外面と見込み部に菊文をスタンプしている。また12・13は同タイプの碗である。14・15と16・17はそれぞれセット関係にある蓋物で、これらはいわゆる広東系碗である。また18・19も広東系碗であり、18の外面には稲束文が描かれている。20・21は、山水文が描かれた碗である。また21は二次焼成を受けている。22は筒茶碗である。外面には菊文を上下に施し、見込み部に五弁化をスタンプしている。23・24は蛇ノ目凹形高台をもつ皿である。24には体部に焼き接ぎ痕がみられる。25は小杯、また26は花瓶である。



第２遺構面遺構平面図

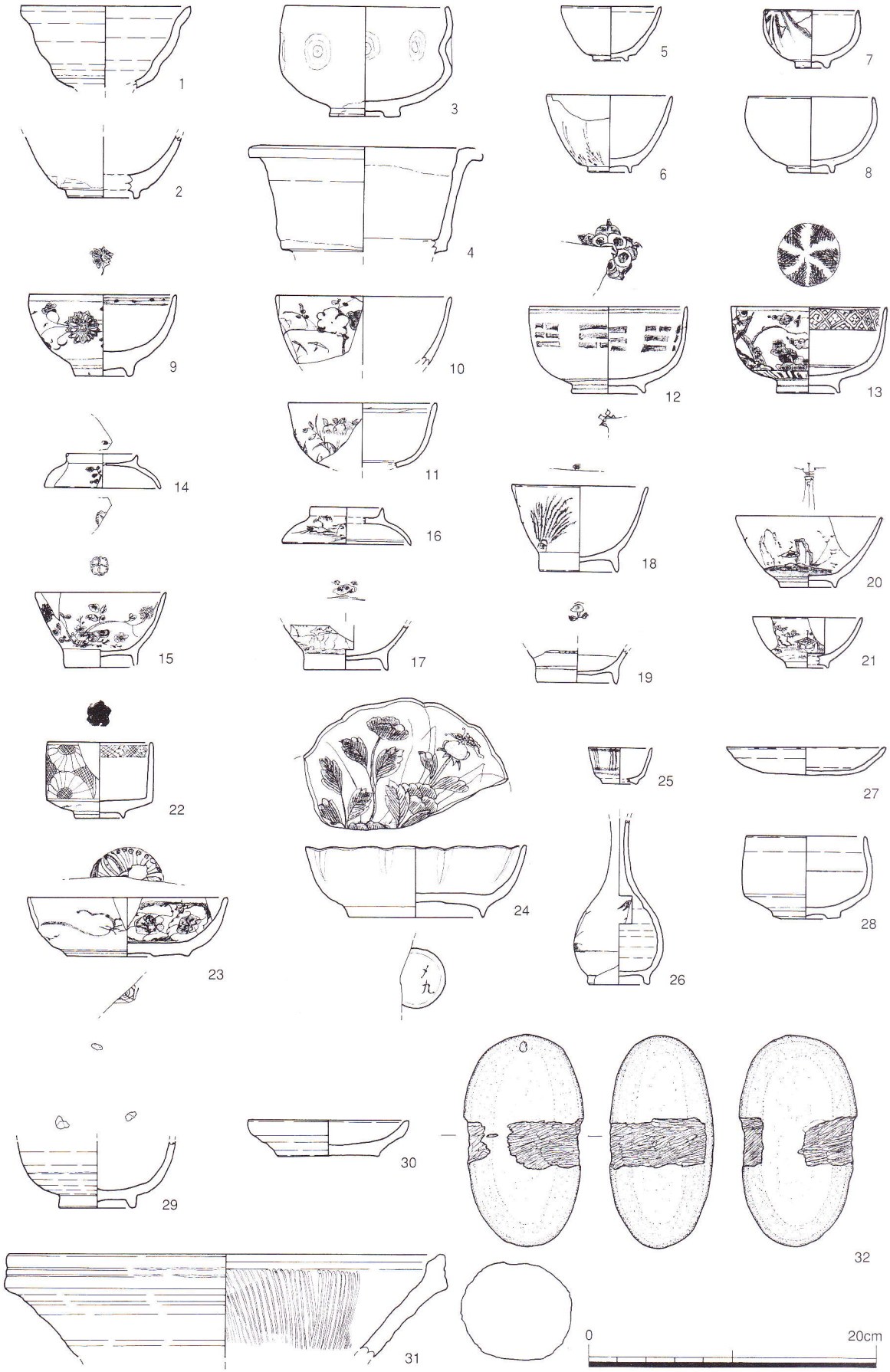
27は、土坑２から出土した土師器の灯明皿で口縁端部に煤が付着している。28は、第３層から出土した肥前系筒茶碗であり、体部内面に１条の圏線がめぐる。29は第２層から出土した瀬戸・美濃系の碗であり、見込み部には３カ所の胎土目の痕跡がみられる。30は土坑１から出土した志野の皿であり、砂目の痕跡が観察できる。31は第２層から出土した堺焼のすり鉢である。

32は攪乱から出土した砂岩の河原石を用いた長卵形の石錘である。この石錘の重量は1.18kgを量り、表面には塩の結晶が付着している。

まとめ

第１遺構面は、遺物から江戸時代の範疇とみられるが、具体的な時期が得られていないのが現状である。礎石建物に伴うとみられる根石列（根石１～３・５）の主軸がN－４°－Eであるものと溝１の主軸がN－86°－Wを示すことから根石列に対して溝１が直交する関係にあることがわかり、溝１が礎石建物に伴う溝の可能性が高い。また石列２・３及び溝２は、ともにN－３°－Wの方向性で一致するものであることから、これらは関連する遺構とみられ、第１遺構面において少なくとも２時期の遺構が存在するものと考えられる。

第２遺構面では、土坑５から一括出土した土器群から比較的古いものも含まれるが、18世紀末から19世紀前半の土器が多くをしめることから、この時期に下限をおくことができる。さらに、溝３の主軸はほぼ真北と一致することから第１遺構面で検出した他の遺構とは異なる方向性をもつものであることが指摘できる。（井馬好英）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
20cm

遺物実測図

14. 和田（わだ）遺跡 発掘調査

調 査 地　和歌山市和田592-1番地

調査面積　25m²

位置と環境

和田遺跡は和歌山市の南西部、岩橋山塊の最も西端に位置する福飯ヶ峯（標高約100m）の南側に所在する。遺跡は東西400m、南北500mを範囲とし、遺跡に接して北側には市内の東山東地区の谷部に源をもつ和田川が西流する。この遺跡の周辺には、独立丘陵である福飯ヶ峯に井辺前山古墳群が、またその西側には弥生時代の周知の遺跡である井辺遺跡や神前遺跡が所在する。

調査内容

今回の調査地は、遺跡の北東端に位置し、和田川に近接する地点である。調査地の現況は水田であり、地表面の標高は1.2m前後を測る。調査地の堆積は、まず第１層である耕作土が、現代の耕作土（約20cm）と近代の耕作土（約10cm）の２単位に分けられる。その下面に床土と考えられる明黄褐色の細砂混シルト（第２層）が４cmの厚みで堆積する。この第２層の下面には、江戸時代に堆積したとみられる灰オリーブ色の細砂混シルト（第３層）が10cm前後の厚みで、またその下層には、鎌倉時代に堆積したとみられる灰色の細砂混シルト（第４層）が堆積する。これらの土層は、包含されている遺物が希薄であるものの、第３層には肥前系磁器が、第４層には瓦器椀が含まれている。この第４層の下面においてイネの根跡とみられる部分を多数検出した。さらに、下層の状況は調査区南壁直下に設定した下層調査のためのサブトレンチ内壁面によって観察した結果、厚さ20cmを測

調査位置図

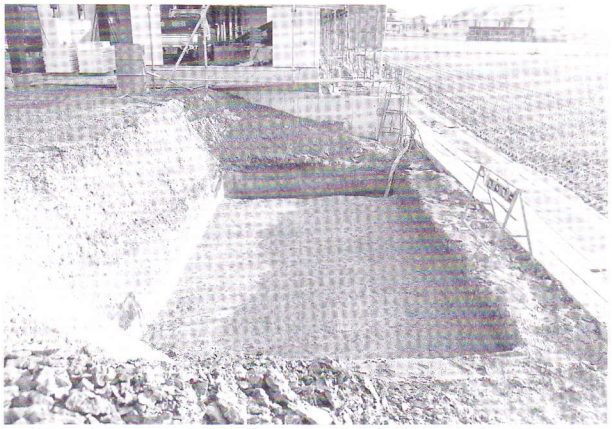
る灰オリーブ色の細砂混シルト（第５層）、厚さ60cm以上を測る灰黄色系の粗砂（第６層）を検出した。これらの堆積内からは全く遺物が出土しなかったことから自然堆積層と考えられる。

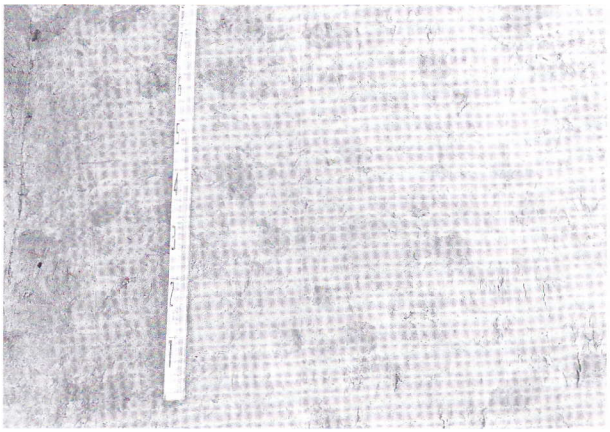
今回の調査では、４・５層上面において遺構検出を行ったが、明確な遺構は検出できなかった。しかし、第５層上面において検出したイネの根跡と考えられる痕跡とこの痕跡が断面観察から第４層内に達していることを考えると第４層が水田耕作土であるものと判断できた。よって、当地は鎌倉時代頃に水田開発が行われ、以後連綿として水田域として土地利用が行われてきた地点であるものと考えられる。出土遺物には、弥生土器をはじめ土師器、須恵器、瓦器、中世土師器、肥前系陶磁器などが出土している。

まとめ

当遺跡はこれまで弥生時代の周知の遺跡として知られていたが、これまで全く調査は行われていなかった。今回の調査地は、遺跡の最も北東縁辺部に位置する。しかし、遺跡全体のほとんどが水田である現況と、比高差がほとんどみられない状況から弥生時代の遺跡の中心部を推定することは困難である。また当遺跡の西約400mの地点には、和歌山市が1981年に調査を行った和田岩坪遺跡が存在し、この調査において５世紀代の遺構、遺物が検出されている。この和田岩坪遺跡の調査地点は和田川の近接地にあたり、当遺跡と比べて環境的に酷似することなどから当調査地周辺においても弥生時代もしくは古墳時代の遺構が検出される可能性が高いものと指摘できる。　（井馬好英）

【参考文献】
『和田岩坪遺跡緊急発掘調査概要』
和歌山市教育委員会　1981年


調査地全景（北から）


植物痕跡検出状況（上が南）

西壁面土層堆積状況（東から）

15. 太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第38次調査

調 査 地　和歌山市太田375－1番地

調査面積　18m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は、ＪＲ和歌山駅の東側に広がる大規模複合遺跡であり、遺跡推定範囲の南半には中世期の太田城跡が重複して所在している。継続的な調査により弥生時代から江戸時代にいたる複合遺跡であることが判明している。調査地は、遺跡推定範囲の南西部に位置する。近接する第11次調査地点では中世の溝２条、古墳時代前期の土坑などが検出され、中世の溝からは瓦類・中国製青磁・中国製白磁・瀬戸美濃系陶器・一石五輪塔残欠等が出土している[註1]。今回、医院建築計画に対処するため確認調査を実施した。

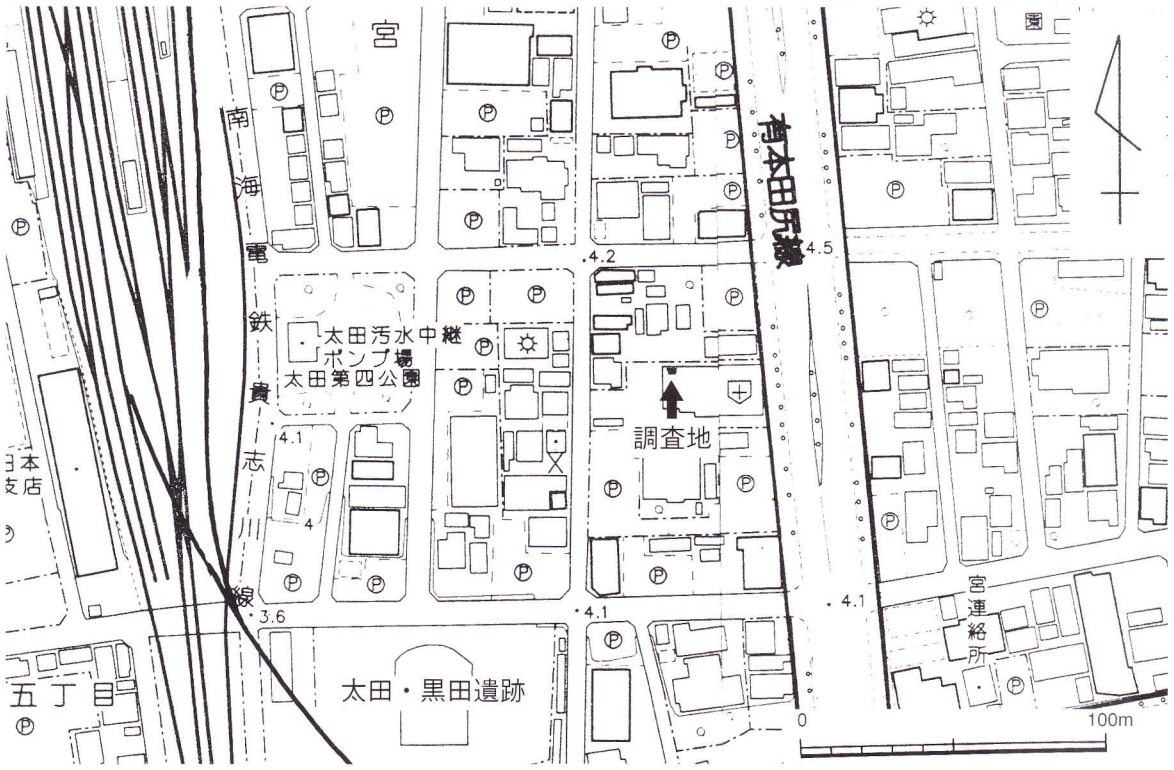
調査の内容

厚さ30～40cmの盛土と厚さ10～15cmの旧耕作土、厚さ約１～２cmの旧床土を機械掘削により除去したところ、数条の溝状遺構が確認されたために、以下を人力掘削した。

調査により地表下約50cmの２・３層下面において北東から南西方向の４条の小溝が検出された。溝１～４は幅15～20cm、深さ７～８cmで1.1～1.2m間隔で平行に走っており、畑作等に伴う畝溝であると推定される。溝２からは近世以降の磁器片とともに石英製火打ち石、瓦器、瓦片が出土した。調査区中央北端において、扁平な片岩材を据えた長径35cmの柱穴１が検出された。この柱穴１の南1.9mに位置する柱穴２とともに建物遺構を構成するものかもしれない。

切り合い関係よりみて土坑群は、小溝群より古い時期の遺構と判断された。

土坑１～３からは瓦器・土師器・弥生土器の破片とともに近世の磁器片が出土し、土坑５・６と



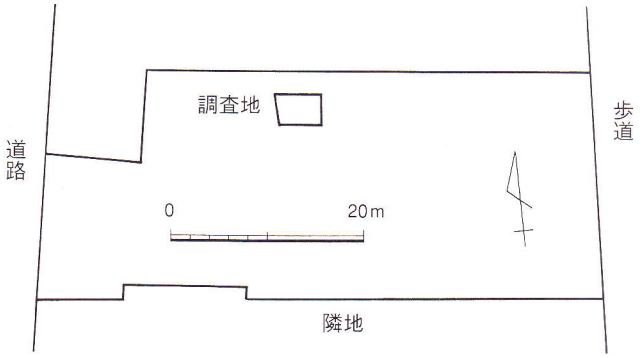
調査位置図

柱穴２及び４層からは瓦器・土師器・瓦片等が出土した。中でも検出面よりみて土坑６は最も古い時期に遡る遺構と判断された。

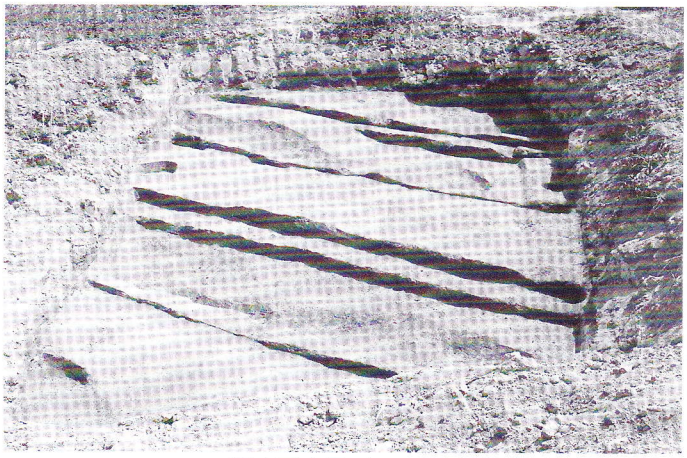
まとめ

土坑・柱穴・小溝が検出された。切り合い関係よりみて、土坑が古く小溝群が新しい。小溝群の時期については江戸時代後期以降とみられ、土器類が細片であることを考慮するならば近代に下ることも考えられた。土坑のうち１～３も江戸時代後期以降の形成であるが、土坑６は中世に遡る遺構である可能性も考えられた。土坑５と柱穴２は出土土器と検出面より中世～近世の時期幅をもたせておくこととする。

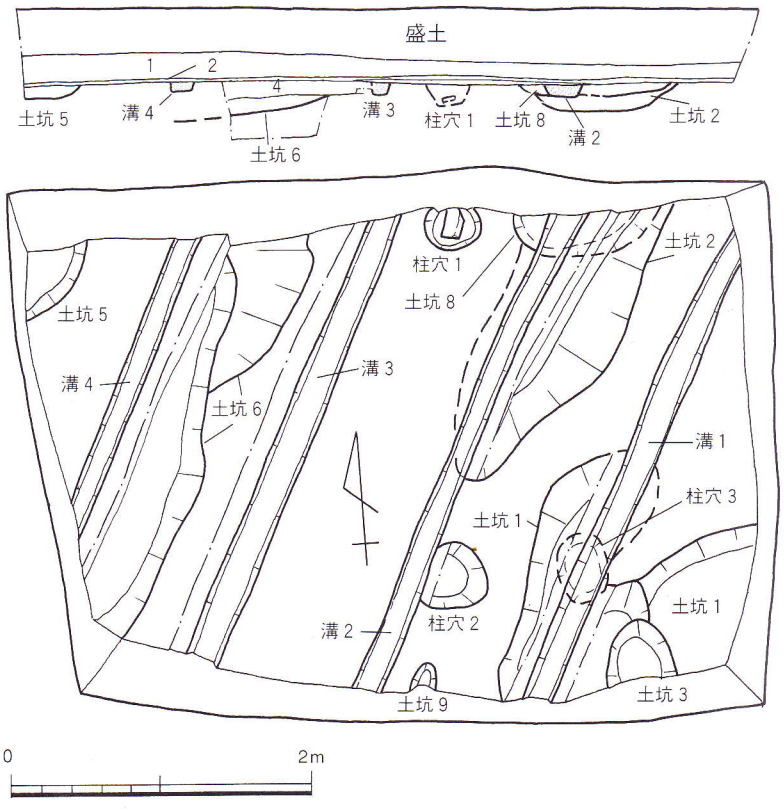
土坑や柱穴の断ち割り調査によっても下層の遺構面や遺物包含層は確認されなかった。　（前田敬彦）



調査地位置図


調査区全景（西より）

（註１）
『太山・黒田遺跡第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年



遺構実測図

16. 神前（こうざき）遺跡発掘調査

調 査 地　和歌山市神前588-2番地

調査面積　220m²

位置と環境

神前遺跡は、旧紀の川が和歌浦湾に注いでいた当時の自然堤防上の標高約２m前後の微高地に所在し、弥生時代前期から古墳時代前期の遺物散布地として知られる。昭和37（1962）年に水田改良工事に伴い遺物包含層の一部が確認され、出土遺物は耕地の床下げで採集されたものが多く、弥生時代前期から古墳時代前期の土器のほか、紡錘車・滑石製勾玉などが出土している。

今回の調査は、神前遺跡内において宅地造成に伴う工事が実施されることになり、和歌山市教育委員会による試掘調査が行われた結果、近世をはじめとする良好な遺構が確認されたため、当財団による発掘調査に至ったものである。調査地は遺跡の中でもやや低い標高約１mを測る沖積平野上にあり、遺跡の東端部に当たる。

調査内容

調査は、調査地北側の東西長約1.3m、南北長約16mをA区、中央の東西長約1.4m、南北長約８mをB区、南端の東西長約1.2m、南北長約17mをC区、中央の南北長約1.4m、東西長約28mをD区とし、東西長幅約２m、南北長約48mの試掘調査地をE区として行った。

基本的な土層堆積状況は現地表である耕作土（第１層）が10～30cm、床土（第２層）が約10cm堆積している。B～D区において、耕作土（第１層）及び床土（第２層）の下面に耕作に伴うものと考えられる江戸時代末期から近代にかけての遺構を検出した。その下は、整地土と考えられる堆積が調査範囲から南東にかけて堆積していた。このため上面遺構を掘削した後、整地の範囲を確認するために幅約50cm、深さ約30cmのサブトレンチをB～D区に適宜設け掘削を行った。この結果、整

調査位置図

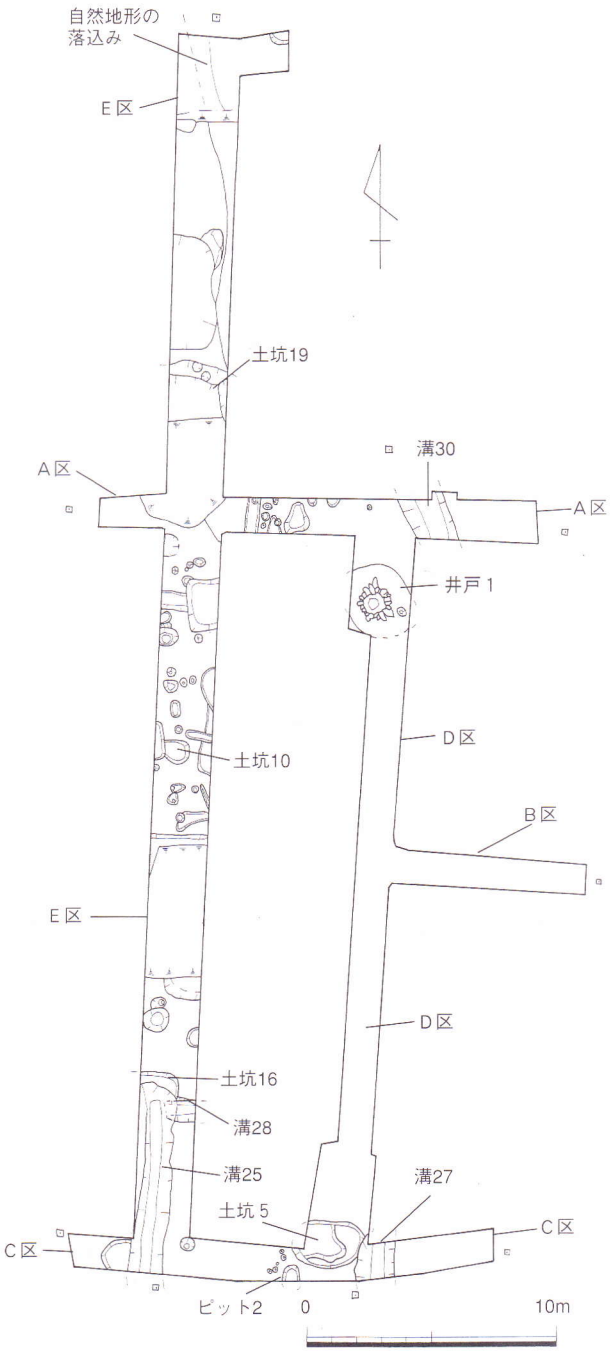
地上（第３層）が10～40cmの厚さでＡ区東端からＢ～Ｄ区の全域に及んでいたことが明らかになったほか、整地土（第３層）の下面において遺構を検出した。第４層は厚さ約30cm、第５層は厚さ約30cmの堆積である。この第４・５層は、Ｅ区北東から調査区南東に広がっており、弥生時代前期の谷状地形に堆積した自然堆積層であることを確認した。第６層の上面は、弥生時代と鎌倉時代から江戸時代初期にかけての遺構面であり、東側の谷状地形に対して微高地であったものと考えられる。Ｅ区の西壁土層断面の観察の結果、第６層は無遺物層であることなどを確認し、微高地が西側へ広がるものであると推定することができた。

上層遺構面である第３層上面においては、江戸時代末期以降の溝・土坑・柱穴遺構などを検出した。下面遺構である第４・６層上面においては、弥生時代と鎌倉時代から江戸時代の遺構を検出した。第３層上面の標高は約50cm、第４・６層上遺構面の標高は40～50cmを測る。

以下主要な遺構を説明する。

弥生時代の遺構は、前期の土坑１基（土坑10）、後期の溝１条（溝30）を検出した。土坑10はＥ区中央部で検出し、平面形楕円形で最大径1.1m、深さ約10cmを測る。溝30はＡ区東側で検出し、幅約1.6m、深さ約60cm、検出長約2.0mの規模を測るものであり、流路方向は北から東と考えられる。また、弥生時代前期の谷状地形に堆積層の西肩を検出したことによって、この堆積が北東から南東に広がることが明確となった。谷状地形をなしていた調査地の東側は、土層断面の観察から弥生時代前期に河川の氾濫によって埋没したものと考えられる。

鎌倉時代の遺構である井戸１は、Ｄ区北端部で検出した。井戸は結晶片岩の割石を用い、いわゆる小口積みで円形に構築したものである。石組井戸の上部内径は約80cm、深さ2.2mの規模を測る。基底部には直径40cm、高さ30cmの底を抜いた曲物桶を井筒として据えている。石積みは基底部の曲物桶を据えた後、曲物の縁部を押さえるように曲物の口径40cmとほぼ同じ直径で積み始められており、上部内径は積み

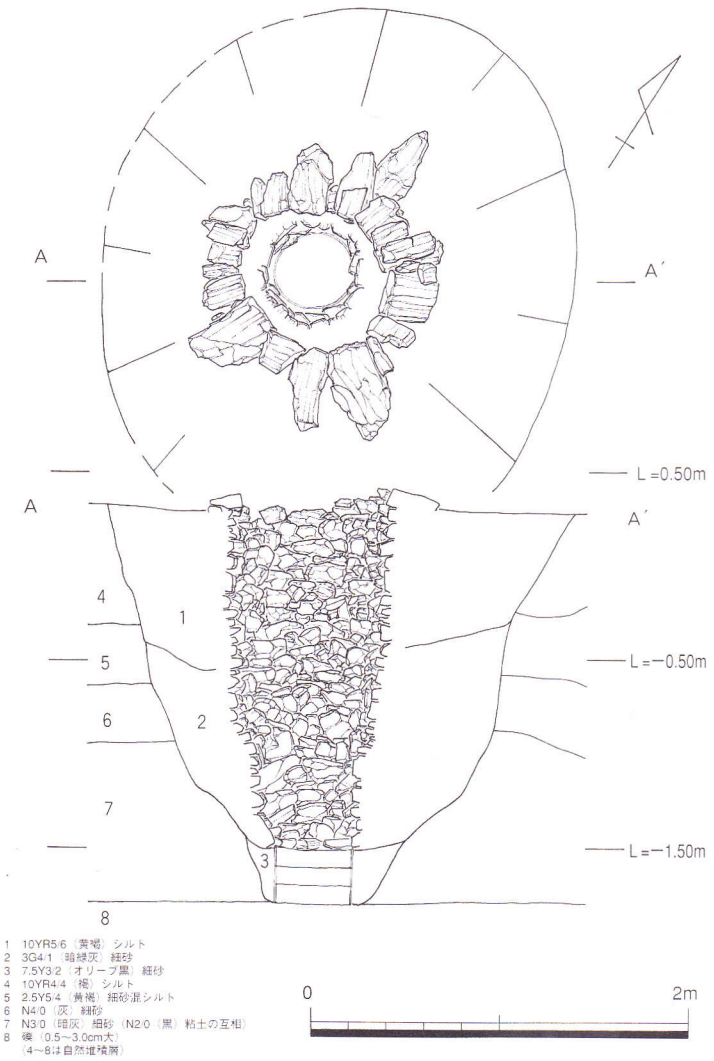


遺構全体平面図

始めのほぼ2倍の規模となっている。

井戸内部の土層堆積は3層に分層することができた。最上層の第1層は、約30cmの厚さを測り、10YR3/3（暗褐）粗砂混シルトである。瓦器椀、土師器皿、中国製青磁碗などが出土した。第2層は約40cmの厚さで堆積しており、2.5Y5/1（黄灰）シルトで炭を少量含むものである。土師器皿・釜、常滑擂鉢が出土した。第3層はそのまま底まで約1.3mの厚さで堆積し、7.5Y4/1（灰）シルトで植物を多く含む層であり、曲物、箸などの木器類の他、瓦器椀、土師器皿、瓦質擂鉢、漆器椀などが出土した。

掘方は南北2.8m、東西2.5mの規模を測り、断面形は擂鉢状を呈する。掘方の土層堆積については、3層に分層することができた。上から、第1層は厚さ約80cmで10YR5/1（黄褐）シルト、第2層は厚さ約1mで3G4/1（暗緑灰）細砂、第3層は厚さ約30cmで7.5Y3/2（オリーブ黒）細砂であり、この第3層で曲物桶を固定するものである。



1 10YR5/6（黄褐）シルト
2 3G4/1（暗緑灰）細砂
3 7.5Y3/2（オリーブ黒）細砂
4 10YR4/4（褐）シルト
5 2.5Y5/4（黄褐）細砂混シルト
6 N4/0（灰）細砂
7 N3/0（暗灰）細砂（N2/0（黒）粘土の互相）
8 礫（0.5〜3.0cm大）
（4〜8は自然堆積層）

井戸1実測図

井戸内部の堆積層出土遺物から、室町時代前期に埋没したものと考えられる。

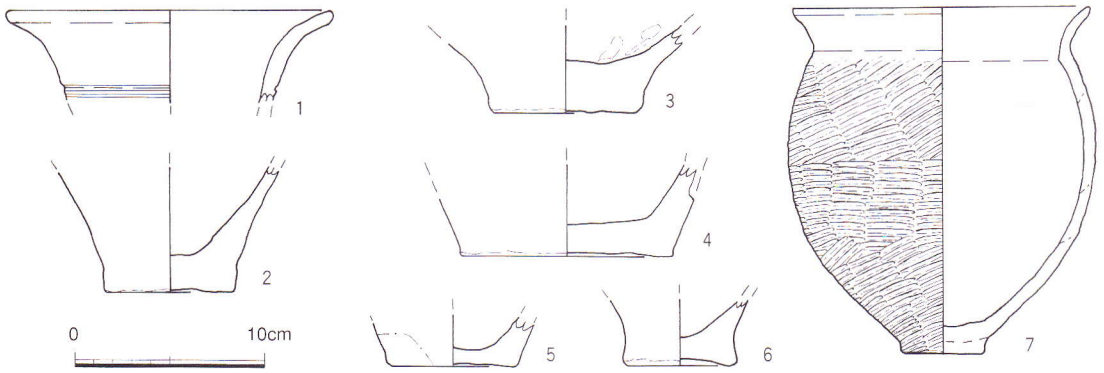
室町時代の遺構は土坑16、溝27・28がある。土坑16はE区の南側で検出したもので、溝28に切られており、16世紀末のものであると考えられる。溝27はC区の東側で検出した。幅約1.5m、深さ約60cm、検出長約1.2mの規模を測る。流路方向は北東から南西とみられる。最終埋没の時期は出土遺物からみて16世紀末〜17世紀初頭であると考えられる。溝28はE区の南側で検出した。幅約80cm、深さ約40cm、検出長約1mの規模を測る。流路方向は東から西である。最終埋没の時期は、溝27と同時期とみられ、溝27に接続するものと考えられる。

江戸時代の遺構は溝25がある。溝25はE区からC区にかけて検出した。幅約1.4m、深さ約70cm、検出長約7.6mの規模を測り、北東から南西方向に掘削されている。出土遺物は17世紀前半のものが主体をなし、最終埋没の時期は17世紀中頃であると考えられる。

江戸時代末期の遺構は、土坑1基、耕作に伴う小溝、暗渠排水溝を検出した。これらのことから、本調査地は江戸時代後期以降は耕作地であったものと考えられる。

出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器（中国製・朝鮮製）、常滑・備前・丹波などの焼締陶器、瀬戸美濃系陶器、肥前系陶磁器、軒丸瓦・軒平瓦・桟瓦、灯明皿、焼塩壺、土人形、サヌカイトの剥片、曲げ物・箸などがある。

1～7は弥生土器で、1～5は壺、6・7は甕である。1は前期の広口壺口縁部である。2は前

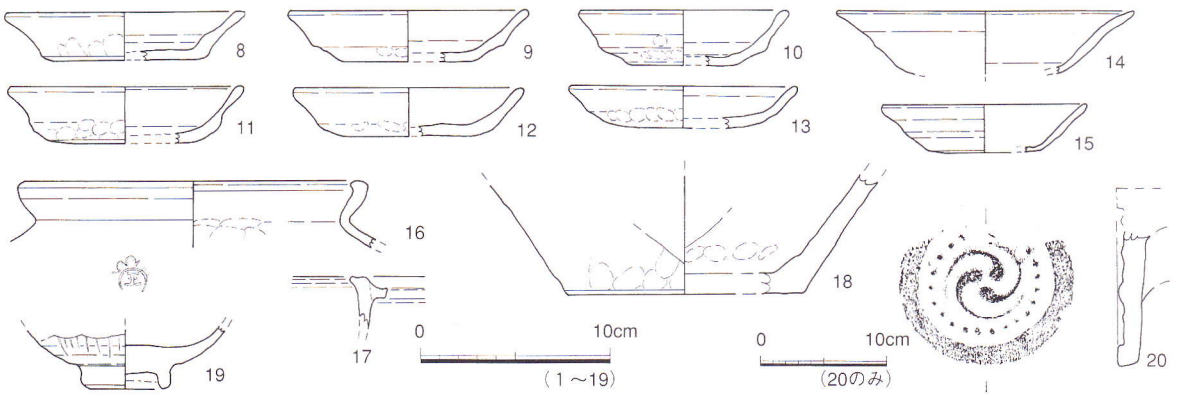


遺物実測図1

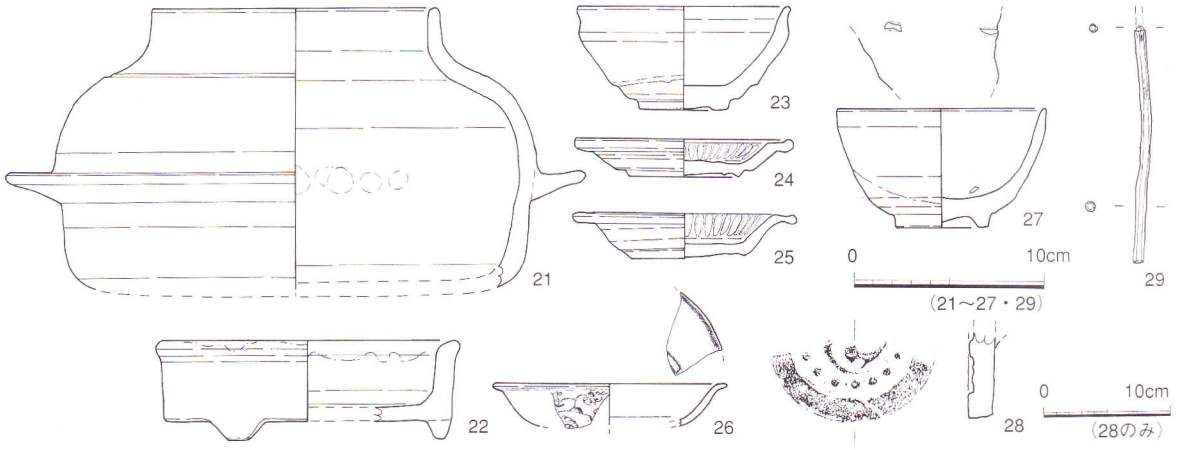
期の壺底部、3は甕底部、4は中期の壺底部である。7は後期の小型甕である。1はピット2、3は土坑5、5・7は溝30、2・6は前期の包含層、4は井戸1掘方から出土したものである。

8～20は井戸1から出土したものである。8～17は土師器である。8～15は皿で、8～10は乳白色系統、11～13は赤褐色系統の色調をもつものである。これらの8～13は在地産のものとみられ口径12.6～11.0cm、器高3.0～2.3cmの範囲にまとまるものである。14は淡褐色で、口径15.6cm、器高3.3cm以上を測り、他と比べて大振りなものである。15は白色系の色調で、胎土は緻密なものであり、口径10.8cm、器高2.6cmを測る。これらの14・15は京都系のものと考えられる。16・17は釜である。どちらも赤褐色の色調をもち、16は口径18.6cmを測る。18は常滑焼の片口鉢底部である。底部径は12.6cmを測る。19は青磁碗で、内底面には蓮華座に「王」のスタンプが押され、体部外面には線描きで蓮弁文が施されている。外面は全面に施釉されているが、高台内側面の途中から外底面にかけての部分については無釉である。20は軒丸瓦である。8～10・13～15は第3層、17・18は第2層、11・12・16は第1層の出土であり、19・20は井戸1埋没直後の堆積層出土である。その他、井戸1の出土遺物として瓦器、平瓦、糸巻き状木製品、箸、種子などがある。

21～29は溝27・28出土遺物である。21は瓦質釜で、口径15.2cm、鍔部の径は30.5cmを測るものである。22は三足の貼付脚部をもつ土師質香炉である。口径16.0cm、器高5.2cmを測る。23～25は瀬



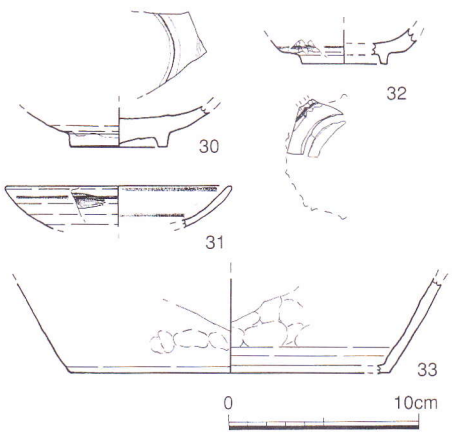
遺物実測図2



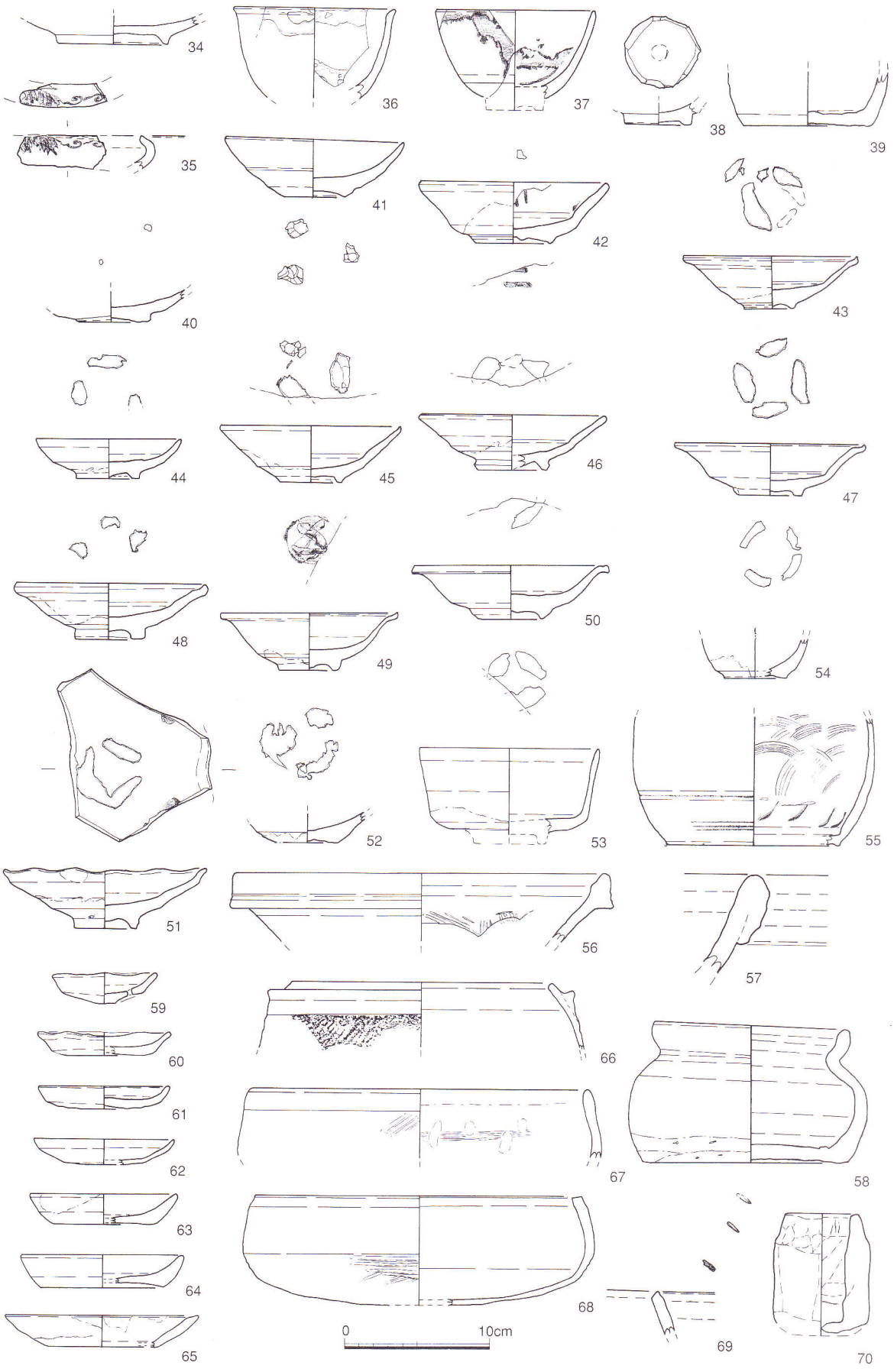
遺物実測図３

戸美濃系陶器である。23は褐釉天目茶碗で、口径11.0cm、器高5.5cmを測る。口縁端部を明瞭に外反させ、高台部の削り出しは非常に浅いものである。24・25は灰釉皿である。24は外面、25は内外面に輪トチの痕跡がみられる。26は中国製の染付皿である。口径は12.4cmを測り、外面に圏線と唐草、内面に圏線をめぐらせている。27は肥前系陶器灰釉碗で、内底面に胎土目の痕跡がみられる。口径11.1cm、器高6.2cmを測る。底部は削り出し高台である。28は軒丸瓦である。29は銅製火箸で、断面が六角形で中空のものである。径５mm、残存長12.5cmを測るものである。

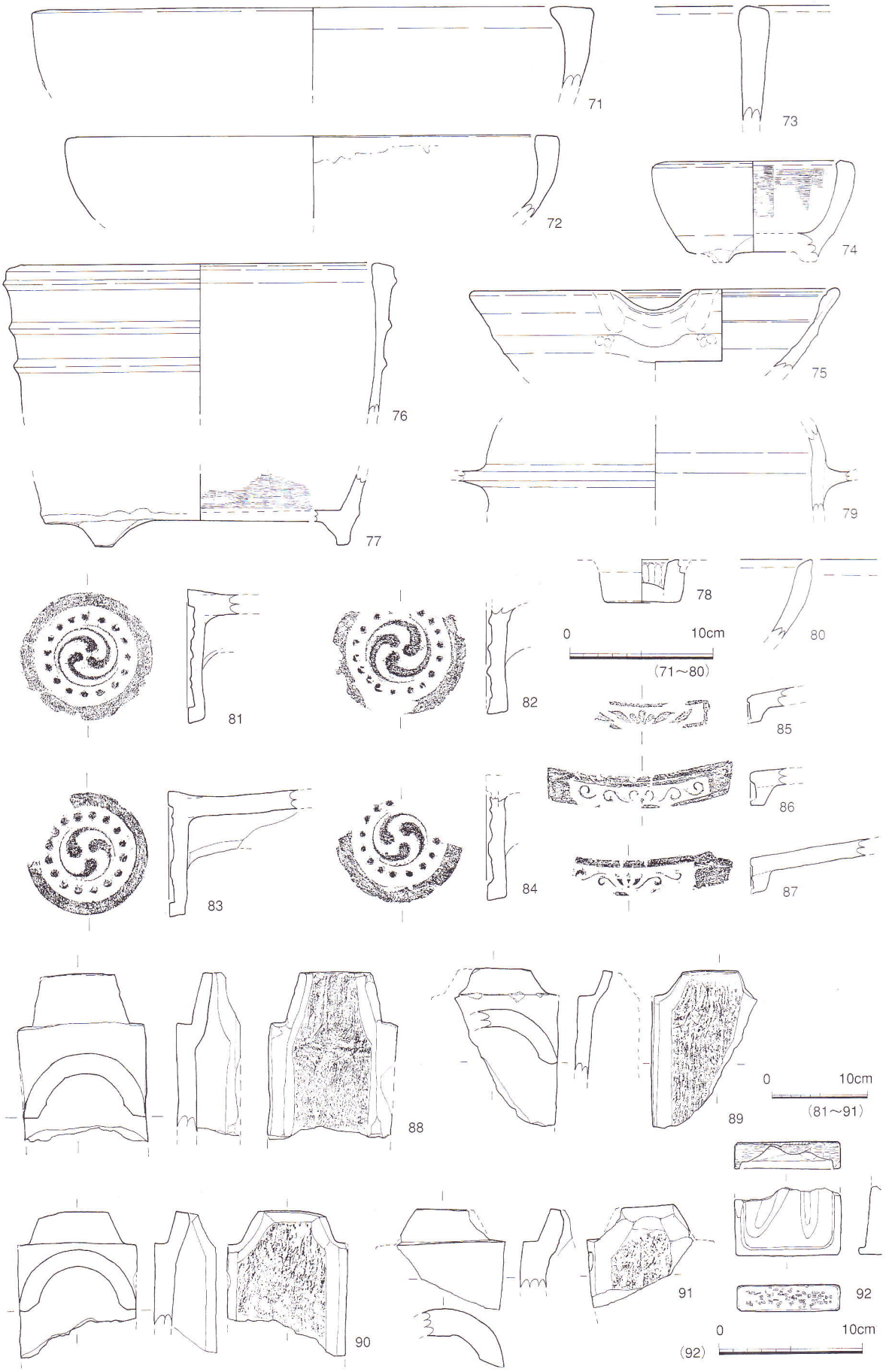
30～92は溝25出土遺物である。30～32は中国製磁器である。30は青磁碗で、他の遺物と比べ古い年代のものであり、クシ状工具で内面に画花文を施文するものである。31・32は染付であり、31は口径12.0cmを測る皿、32は高台径4.6cmを測る十角鉢である。33は朝鮮製褐釉船徳利である。底径16.9cmを測る。内外面に白濁した褐釉を施釉するもので、内面に当て具痕がみられる。胎土は非常に緻密なものである。34～39は瀬戸美濃系陶器である。34は志野皿、35は志野向付、36～38は天目茶碗である。38は転用され円板状にとなっている。39は褐釉壺である。40～55は肥前系陶器である。40～52は皿であり、40～42は胎土目、43～52は砂目の痕跡がみられ、42・51の内面には鉄絵がみられる。特に、43・47～50は溝縁皿である。また、42・45・49・51の底部には墨書が残る。53は腰折れの天目茶碗、54は小型壺、55は徳利である。55の内面には青海波状の当て具痕がみられる。56～58は備前焼である。56は擂鉢、57は大甕口縁部、58は建水である。58の外底部には幅約１cmのヘラ状工具によるキザミ目が３ヶ所にみられる。59～65は土師器皿である。66～69は体部外面に平行タタキを残す土師器塝である。70は焼塩壺である。口径4.6cm、復元器高7.5cmを測る。71～75は土師質土器である。71～73は火鉢の口縁部、74は小型香炉、75は片口鉢である。76～80は瓦質土器である。76・77は同一個体とみられる火鉢、78は火鉢脚部、79は釜、80は擂鉢口縁部である。81～84は軒丸瓦、85～87は軒平瓦、88～91は丸瓦である。92は石製硯である。赤褐色の緻密な石材を用いたもので側面に敲打痕、破断面に刻目など再利用の痕跡を観察することができる。



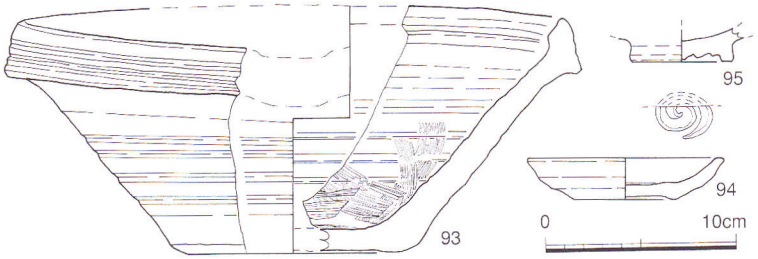
遺物実測図４


34
35
36
37
38
39
41
42
40
43
44
45
46
47
48
49
50
54
52
53
55
51
56
57
59
60
66
61
62
67
58
63
64
68
65
69
70
0
10cm

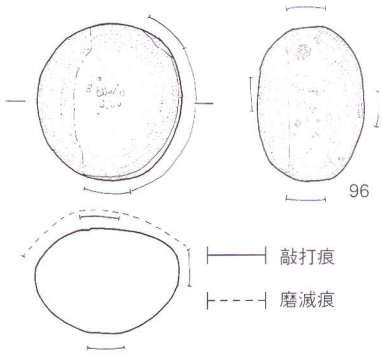
遺物実測図 5

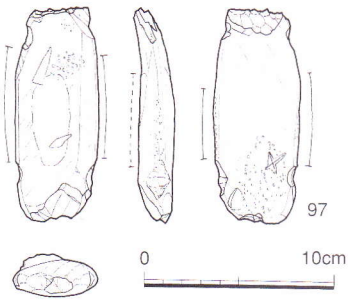

71
73
72
74
76
75
79
77
78
80
0
10cm
(71～80)
81
82
85
86
83
84
87
88
89
0
10cm
(81～91)
90
91
92
0
10cm
(92)

遺物実測図 6



遺物実測図７





遺物実測図８

93は備前焼擂鉢、94は灰釉皿である。95は萩焼碗とみられ、外底面にヘラによる渦巻き状のエグリ込みがみられる。93は土坑16、94は土坑12、95は包含層からの出土である。

96は叩石である。敲打痕が両面及び上下端部、側面には弱い敲打痕が帯状にみられる。全体的に痕跡は浅いが叩石・磨石として用いられたと考えられる。97は扁平な棒状石製品で長辺の両端及び側面に左右対応する位置にそれぞれ２ヶ所、合計６ヶ所のエグリがみられる。おそらくはこの対応するエグリ位置にヒモをかけたものとみられ、錘として用いられた可能性もある。

まとめ

神前遺跡は弥生時代前期から古墳時代前期の遺物散布地として周知の遺跡であるが、発掘調査を行ったのは今回が初めてである。調査の結果、弥生時代と鎌倉時代から江戸時代にかけての遺構を検出したことによって、当遺跡は複合遺跡であるということが明確となった。

弥生時代の遺構は、前期の土坑1基、後期の溝1条を検出した。また、今回の調査においては古墳時代の明確な遺構は検出されなかったが、遺物を確認したことや土層観察からみて、弥生時代から古墳時代の良好な遺構は調査地の西側微高地上に展開し、東側は低湿地であった旧地形を復原することができる。

井戸１の検出によって鎌倉時代にはこの周辺に集落の存在を推測することができる。同じく室町時代についてはL字状に掘削され、16世紀末～17世紀初頭に埋没した溝27・28は、屋敷割りの一部であった可能性が考えられる。溝25は出土遺物からみて17世紀中頃に埋没したものとみられる。これらの遺構出土遺物の中には、志野（皿・向付）、焼塩壺や輸入磁器などが出土しており、調査地は当地における有力者の屋敷地の一角と考えられる。また「坊垣内」の字名が周囲にみられること、香炉や瓦などが多量に出土したことなどから付近に寺院があった可能性も考えられる。

また、大溝の埋没時期がそれぞれ16世紀末～17世紀初頭と17世紀中頃にみられることから、周辺の土地利用に画期があったことを推定することができる。これらの時期は豊臣家、浅野家、徳川家へと目まぐるしく支配者層が移り変わった時期でもあり、２度の整地の画期はこのような政権交代の影響を受けたものとも考えられる。

以上、神前遺跡についての貴重な資料を得ることができた。　（奥村　薫）

17. 鳴神（なるかみ）Ⅴ遺跡 第４次調査

調 査 地　和歌山市鳴神285-1番地

調査面積　15m²

位置と環境

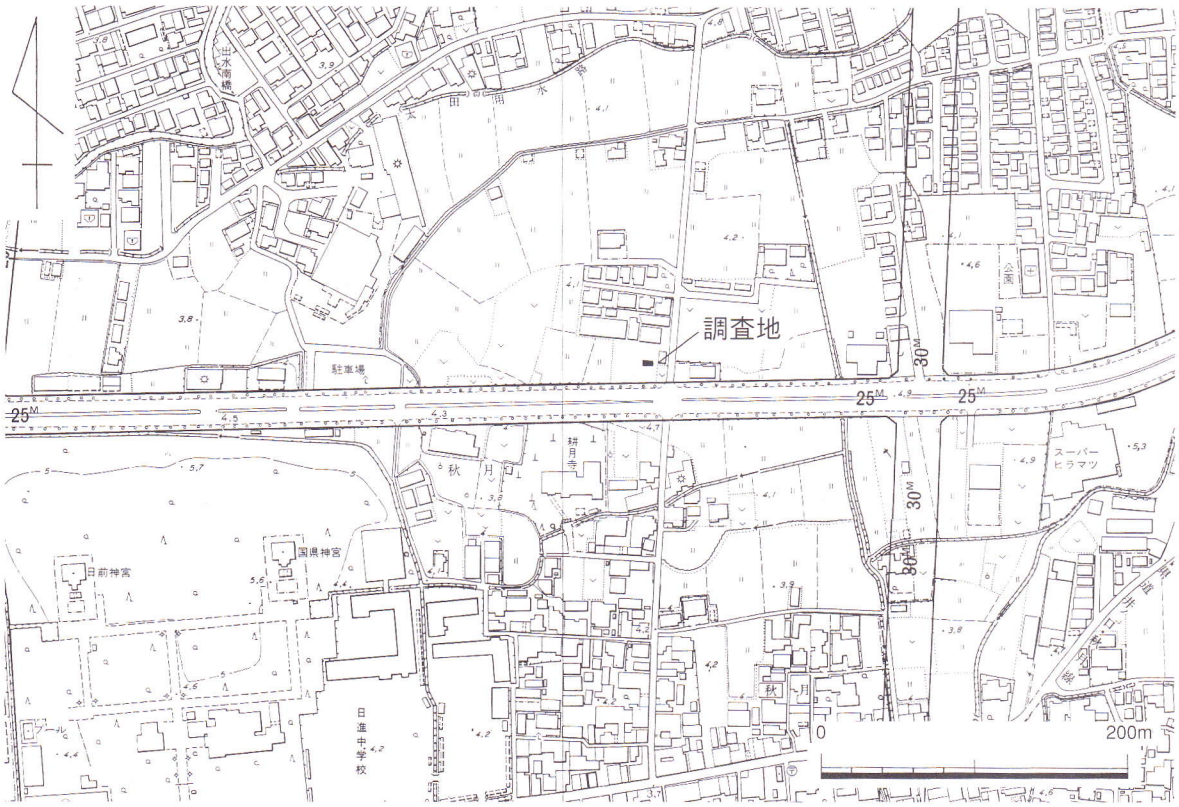
鳴神Ⅴ遺跡は、紀ノ川の南岸に広がる和歌山平野上に立地する弥生時代から平安時代にかけての周知の遺跡である。この遺跡は、東側に鳴神Ⅳ遺跡、南側に秋月遺跡と接する。当遺跡の発掘調査は４度目にあたるが、当遺跡と近接する鳴神遺跡群や秋月遺跡などでは数次にわたる調査が行われ、当遺跡周辺の状況が少しずつ明らかになりつつある。なかでも和歌山県教育委員会が実施した国道24号線バイパス建設に伴う調査では古墳時代の竪穴住居跡などの遺構が検出され、また当財団が行った和歌山市都市計画道路松島本渡線建設に伴う調査では古墳時代前期の水田区画や古墳時代前期から中期にかけての古墳群などを検出している。

今回の調査対象地は、遺跡のほぼ中央部に位置する。

調査内容

当調査地は、上部が厚さ120cmの整地土で覆われていた。整地土下は、整地以前の耕作土（第１層）が10～40cmの厚みで堆積し、その下には黄褐色系の床土（第２層）が堆積している。この床土の下面が遺構を検出したベース面（標高3.6m前後）である。このベース層は東壁直下に設定した下層調査のためのサブトレンチから２単位に分けられ、上位の第３層は厚さ35cmを測る黄褐色系のシルト層、下層の第４層は褐色系の粗砂となる。

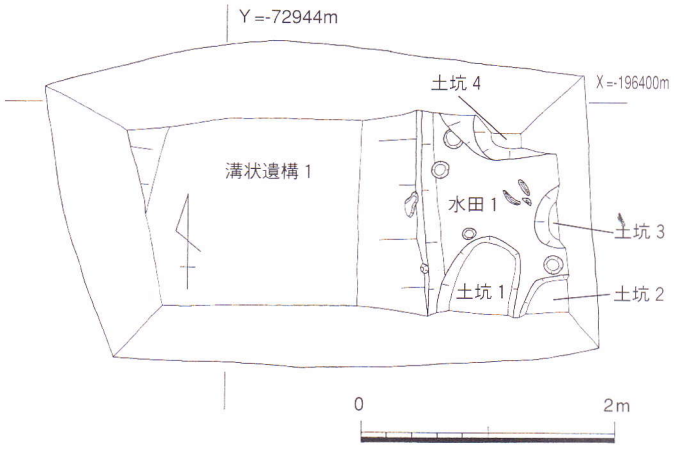
遺構は、鎌倉時代の溝状遺構１や土坑２基（３・４）、江戸時代の水田１などを検出したほか、ピ



調査位置図

ット５基のうち遺物から古墳時代に遡る可能性があるものがある。

溝状遺構１は、幅2.7m以上、深さ35cm前後を測る南北方向のものである。この遺構は覆土に黄褐色系のシルトブロックを多く含むことから人為的に埋められたものと考えられ、遺物に鎌倉時代の瓦器や土師器皿などを含むことから、この頃に埋め戻された遺構とみられる。



遺構全体平面図

土坑３・４は、江戸時代の水田１底面において検出したもので、比較的深掘されたものである。

遺物は、弥生時代から江戸時代にかけてのものが出土した。

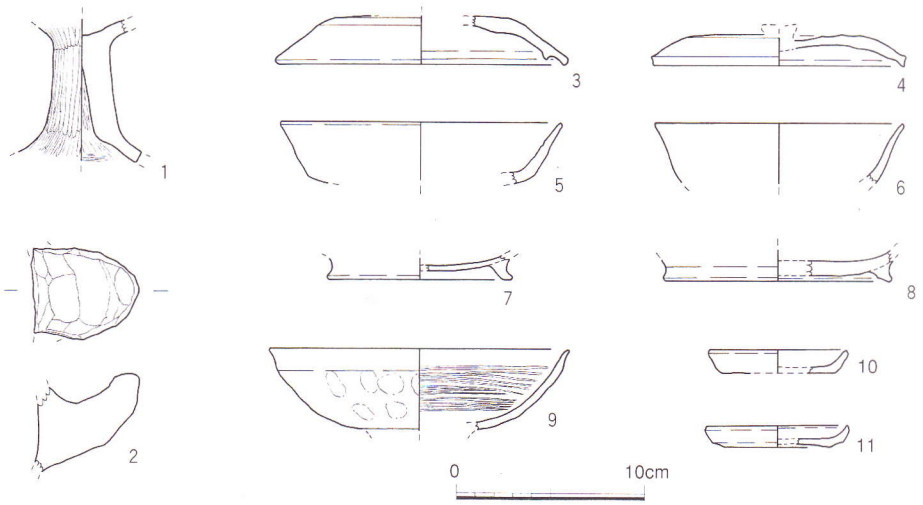
１・２は古墳時代の土師器である。１は高杯の脚部、２は堝の把手である。３～６は奈良時代の須恵器である。３・４は杯蓋であり、欠失している天井部に擬宝珠様のツマミが付くものである。５は杯身、６は無蓋高杯の杯部である。７・８は平安時代の土器である。７が黒色土器、８が土師器のそれぞれ底部である。９～11は鎌倉時代の土器である。９は瓦器椀、10・11は土師器皿である。

調査地全景（西から）

まとめ

今回の調査地は、鳴神Ⅴ遺跡のほぼ中央部に位置する地点であり、西側に近接する秋月遺跡から連なる鳴神遺跡群の中央部に位置することから、遺構の密集する地域と考えられた。今回の調査範囲は狭少であったが、多くの遺構を検出し、遺跡の一端を明らかにすることができたものといえる。

（井馬好英）



遺構実測図

18. 太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第39次調査

調 査 地　和歌山市461番地 他

調査面積　60m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川南岸の平野域でもやや微高地上に立地する弥生時代前期から中期にかけての集落遺跡であり、中世に存在したとされる太田城跡などとの複合遺跡としても周知されている。

今回の調査地は、遺跡のほぼ中心部に位置する地点であり、和歌山駅東側一帯の区画整理事業に先立って1968年から1971年にかけて太田黒田遺跡調査団が行った調査範囲（第１次～第９次調査）の第１・２次調査範囲と重複する地点である。この既往の調査では弥生時代の竪穴住居18軒（建てかえを含む）のほか、井戸、溝、土坑墓や奈良時代の井戸、溝、土坑などが多数検出されている。なかでも奈良時代の大型井戸内から出土した和同開珎42枚・万年通宝４枚などの一括出土が注目される。

調査内容

この調査は、現在ではその景観も留めていない太田・黒田周辺の過去の調査位置をより明確にするため、太田黒田遺跡調査団が行った遺構等の再記録とこの時の未調査部（土層観察用のためのセクションベルト）の調査を目的とした。このため、平面図等の記録は国土座標軸を基準とした。

当調査地は、既に60cm程度の盛土が施された地点で、この盛土下に近代以降の水田耕作とみられ

調査位置図

る旧耕作土（第１層）が20cmの厚みで堆積し、その下層に厚さ20cmを測る江戸時代の遺物を含む第２層が堆積する。しかし、セクションベルト上での断面観察であるため、明確ではないが、部分的に第２層が弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式の新段階～第Ⅳ様式の古段階）の堆積であるものとみられた。さらに下層の第３層は、にぶい黄色系のシルト混粘土であり、弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式の古段階）までの遺物包含層である。また第３層以下の状況は、無遺物層とみられる。

次に、遺構は第２層の上面及び第３層の上面において検出した。遺構の覆土内の遺物は土坑１・２を除く全てに弥生土器が含まれており、他の遺物が混入していないことから、弥生時代の遺構と考えられる。また土坑１・２はともに第２層上面からの検出であるが、土坑１には肥前系陶磁器が含まれており江戸時代の遺構とみられるが、土坑２はその周辺の第２層に弥生時代の遺物が含まれていないことと、奈良時代の完形の杯などが含まれていることから、奈良時代の遺構と考えるのが妥当とおもわれる。

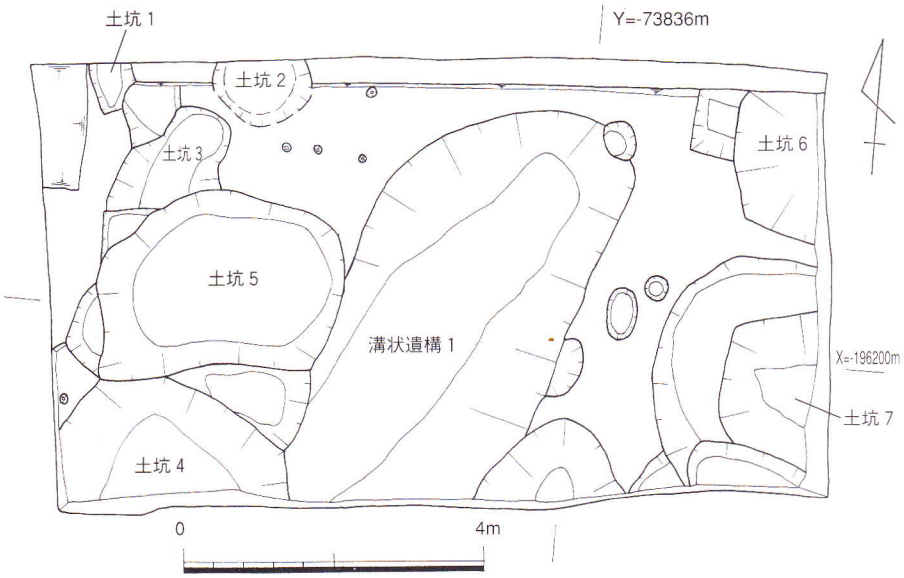
また遺物は弥生時代から江戸時代にかけてのものが多数出土した。土器では、壺、甕、鉢など多量の弥生土器のほか、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器、土師器、製塩土器や黒色土器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器である中国製青磁碗、備前焼の壺・すり鉢、瀬戸・美濃系陶器や肥前系陶磁器などが出土した。また弥生時代の石器である石庖丁が２点（内１点は大型石庖丁）、室町時代から江戸時代にかけての瓦が一定量と、銭貨である寛永通寶が１点出土している。

まとめ

今回の調査は、過去の調査範囲と重複する調査であった。この調査において遺構等の位置関係を現在の調査範囲と正確に結びつける記録保存が行えたことが最大の成果であったものといえる。しかし、ほとんどが既に調査された地点であったことなどから遺構等の正確な時期決定が困難であり、平成８年度『和歌山市内遺跡発掘調査概報』に示した遺構等の時期に誤認があったことを本書において訂正する。

（井馬好英）

【参考文献】
『太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年
『和歌山市内遺跡発掘調査概報』平成８年度　和歌山市教育委員会　1997年



遺構全体平面図

19. 平ノ下遺跡発掘調査

調 査 地　和歌山市西庄494番地

調査面積　トレンチ設定面積142m²（主たる調査面積44m²）

位置と環境

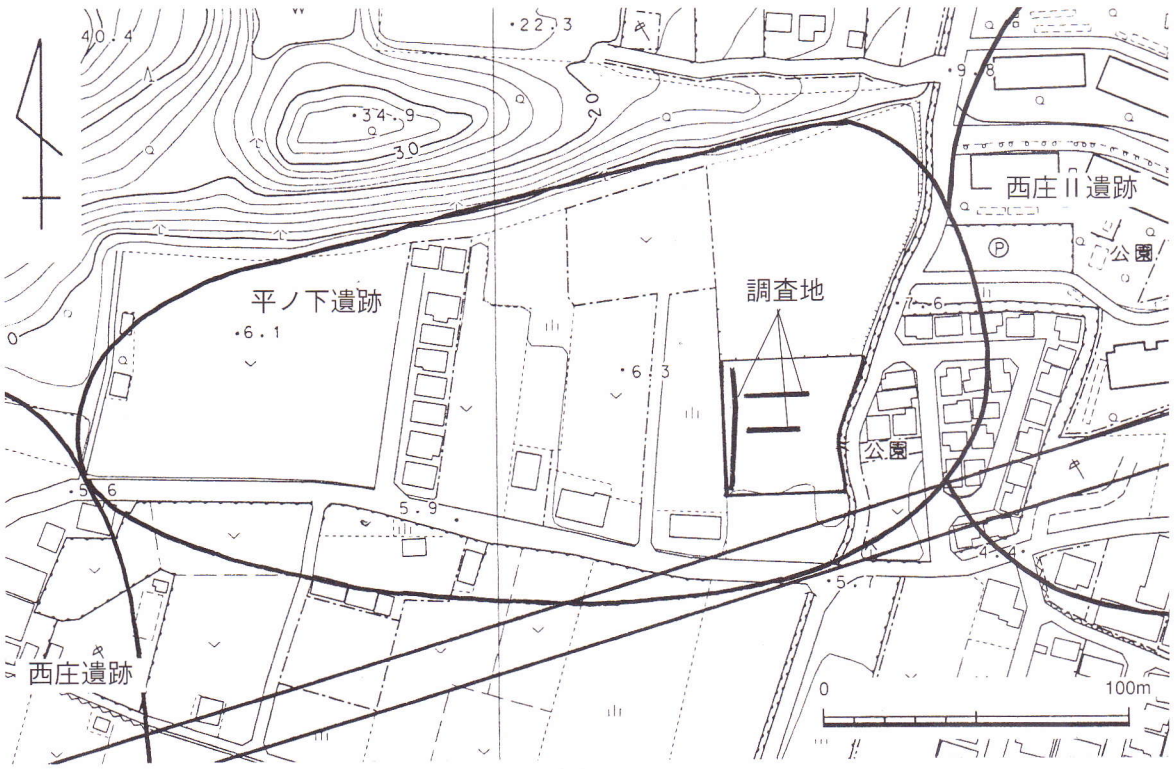
平ノ下遺跡は、和歌山市の北西部、和泉丘陵裾部の平地に立地する遺跡である。西側には大規模製塩遺跡である西庄遺跡が所在し、東側には区画溝を伴う掘立柱建物や柵・井戸・土橋が検出され中世集落の実態が明らかとなった西庄Ⅱ遺跡が近接して位置している。

調査内容

宅地造成工事により深掘される敷地西端部分及び敷地内の確認調査として計３ケ所のトレンチを設定し、機械掘削を行った。機械掘削時の所見と時間的制約により主たる調査地は、２トレンチの東半と３トレンチの南北両端部とした。

２トレンチ東半（幅約２ｍ、長さ９ｍ）　基本土層は、地表より１層（厚さ20～30cm、耕作土）、２層（厚さ約３cm、床土）、３ａ層（厚さ６～16cm、灰黄色砂層）、３ｂ層（厚さ４～10cm、灰茶色砂質土）、４層（厚さ２～３cm、灰茶褐色ブロック混土層）、５層（黄茶色やや粘質土）であり、４層下面に淡灰褐色砂質土を埋土とする浅い落ち込み遺構とその底面に南北方向の小溝が４条検出された。瓦器片等を包含しており鎌倉時代の遺構とみられる。

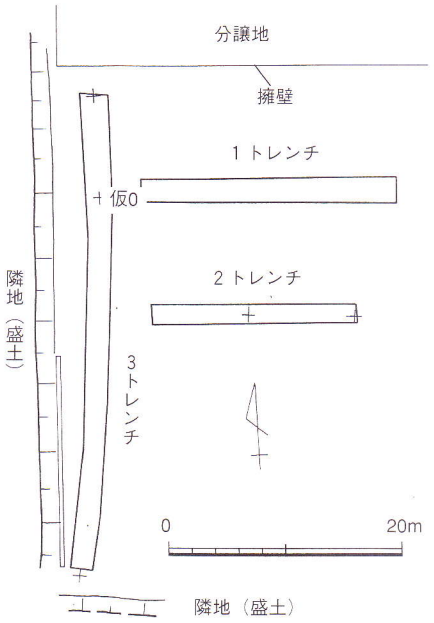
３トレンチ北端（幅約２ｍ、長さ９ｍ）　地表より１～６層の堆積が確認され、３ｂ層もしくは４層下面・５層下面が遺構面となる。５層下面に形成される土坑２・４・５が古く、続いて土坑３、溝１が形成される。土坑３からは完形に近い平安時代末期の杯（遺物実測図２）が出土したが、土



調査位置図

坑４・５から３層下面の溝１にいたるまで瓦器・土師器が出土することより、全体的に鎌倉時代を中心とする遺構群であることが判明した。その他、東播系こね鉢（遺物実測図４）、緑釉陶器椀（遺物実測図５）、土錘が出土している。

３トレンチ南端（幅約２ｍ、長さ４ｍ）　地表より１層（耕作土、厚さ30～40cm）、２層（床土、厚さ２～５cm）、３層（灰褐色砂質土、厚さ20ｃｍ前後）、４層（砂礫混じり灰褐色砂質土、厚さ６～10cm）、５層（淡灰茶色砂層）の堆積が確認され、３層は上層（３ａ層。灰茶色砂質土、厚さ10～13cm）と下層（３ｂ層。灰褐色シルト層、厚さ５cm前後）に分層される。遺構は確認されなかった。遺物は、３ｂ層より瓦器が出土し、４層からも瓦器が微量出土した。なお、３トレンチ中央部付近の中世包含層より弥生前期の甕片（遺物実測図１）が出土した。

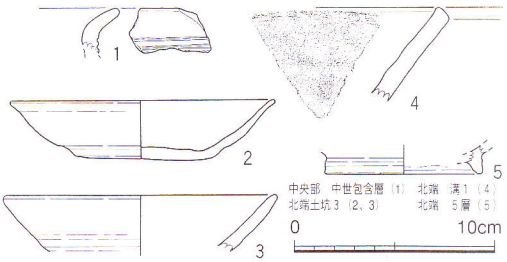


調査区配置図（網掛け部分は主たる調査地）

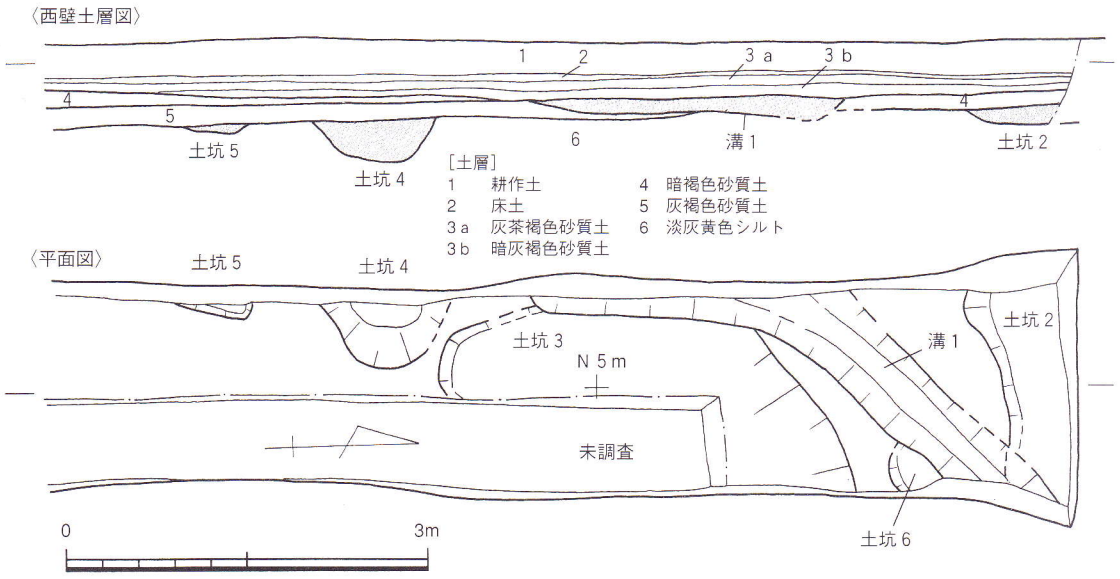
まとめ

実態の不明確であった平ノ下遺跡の一画で鎌倉時代を中心とする遺構群が検出された。３トレンチ北端付近では溝・土坑が密に形成されており、居住域に近接することが推測された。また、２トレンチ東半の浅い落ち込みや小溝群は中世の耕作に関係する遺構であろう。全体としては、近接する西庄Ⅱ遺跡との関係が想定される内容であった。また、遺跡としての初現時期も弥生前期に遡ることが明らかになった。

（前田敬彦）



遺物実測図（３トレンチ）



３トレンチ北端遺構実測図

［平成９（1997）年度］

20. 太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第40次発掘調査

調 査 地　和歌山市太田442番地

調査面積　約160m²

位置と環境

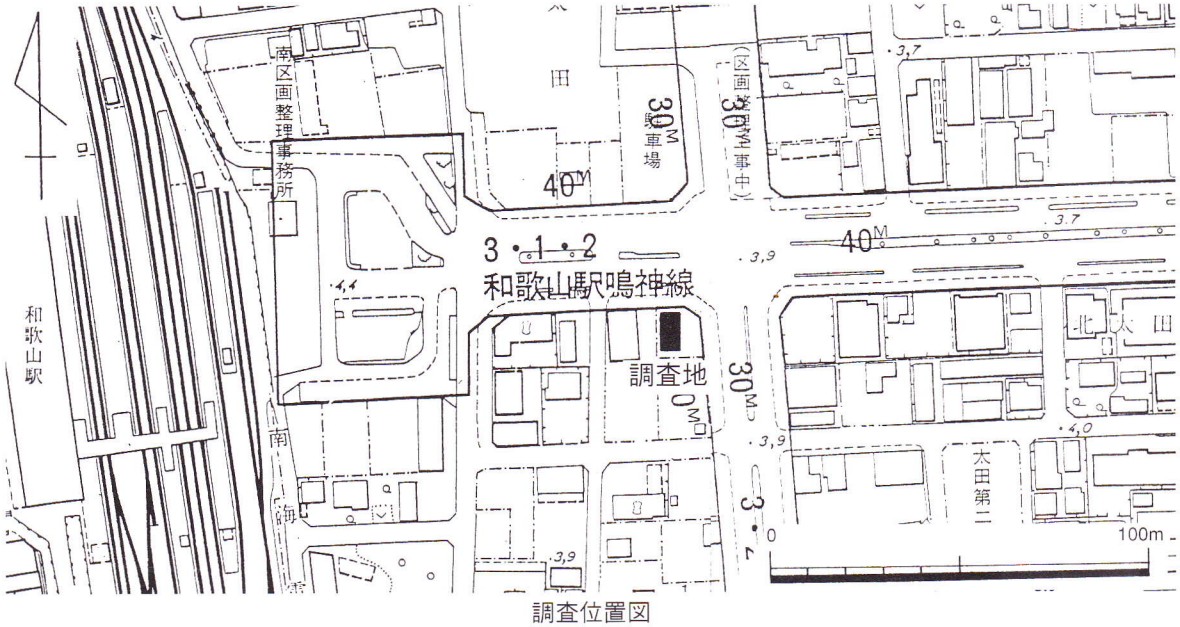
太田・黒田遺跡は紀ノ川下流域南岸の平野部のほぼ中央に立地する。遺跡は弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として知られているが、特に弥生時代では県内最大規模の集落遺跡として周知されている。今回の調査は事務所建設工事に伴って行われたもので、調査地は遺跡範囲の西側中央部に位置する。

調査内容

調査対象地において東西10m、南北16mの約160m²の調査区を設定した。基本的な土層堆積状況は、現地表であるアスファルト以下、現代の整地土が合わせて約70～80cmの厚みを持ち、その下に水田耕土（第１層）、床土（第２層）が堆積する。第３層は古代～中世の水田耕土であると思われ、第４層はその床土と考えられる。なお深堀調査の際、調査区北壁面の第６層から完形の弥生土器甕が出土しており、その出土状況から第６層は短期間の内に堆積したものと考えられる。

遺構は第５層上面（第１遺構面）において弥生時代の土坑、柱穴、古墳時代後期の溝、土坑、第６層上面（第２遺構面）において植物痕跡を検出した。第１遺構面の標高は2.6m～2.7mを測るが、遺構の削平度合いから本来の地表面は数十cm高かったと思われる。柱穴群は調査区南東部において検出したもので、柱穴の直径は約20cmでほぼ均一である。規模が小さいことから簡易的な掘立柱建物もしくは柵列の可能性が考えられる。また溝１は調査区南端中央から北東隅にかけて検出したもので、最上層には古墳時代後期の遺物を含む。幅約1.0～1.8m、深さ約40cm、検出長16.5mを測る。底面の標高差から南西から北東への流路方向を持つと考えられる。土層は４層に分層することができた。

遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器などが遺物収納箱に約６箱出土した。



調査位置図

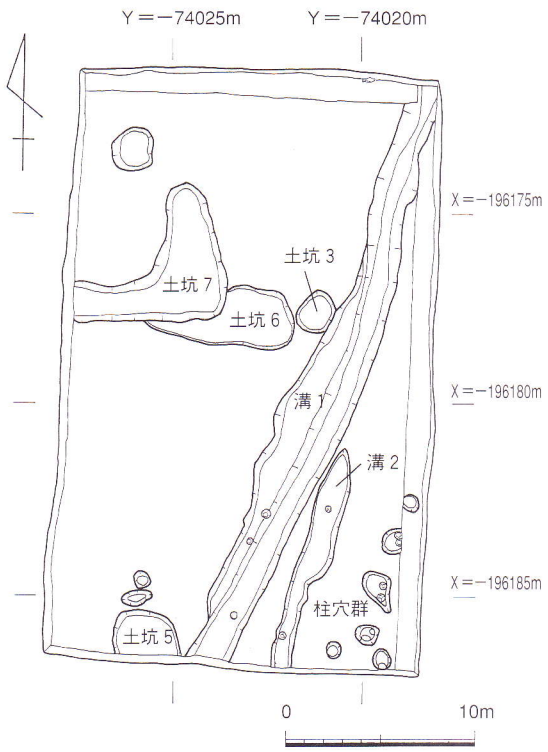
特に弥生土器は、第６層から完形の甕（１）や壺の頸部（２）が出土している。また石器は合計19点出土しており、その内訳は石鏃（４～６）４点、石庖丁（７）１点、石庖丁未製品（８）３点、扁平片刃石斧（９）１点、砥石４点、叩石・磨石類６点である。

まとめ

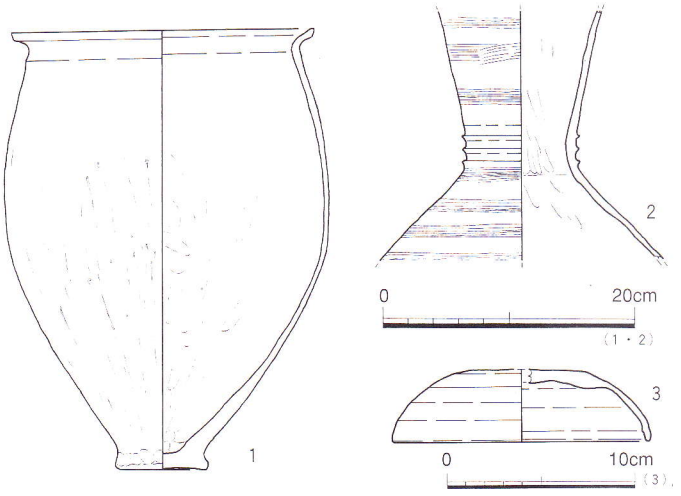
発掘調査の結果、調査区において溝、土坑、柱穴などの遺構を検出した。中でも溝１は南西から北東への直線的な流路方向を持っており、潅漑用水路の機能を持っていたことが考えられる。埋土から陶邑編年TK209型式の須恵器（３）が出土しており、土層の堆積状況を合わせて考えると、溝１は７世紀前半には埋没したものといえる。

第５層上面での旧地形を復原すると微高地が東側に広がっていく様相を呈しており、溝１は微高地縁辺部の等高線に添って開削されたものとみられる。またこの溝の西側は東側と比べて遺構が希薄であることから、集落を区画する溝の可能性が考えられる。集落はこの溝から東側の微高地上に展開していたものと考えられ、当調査地はその縁辺部に相当するものと推定できる。

なお調査地から50m南の第26次調査では弥生時代中期の水田が確認されているが、今回、第６層上面において植物痕跡を検出することができた。このことから調査地周辺は一時期水田であったとみられ、第５層は水田耕土に相当するものと考えられる。（高橋方紀）

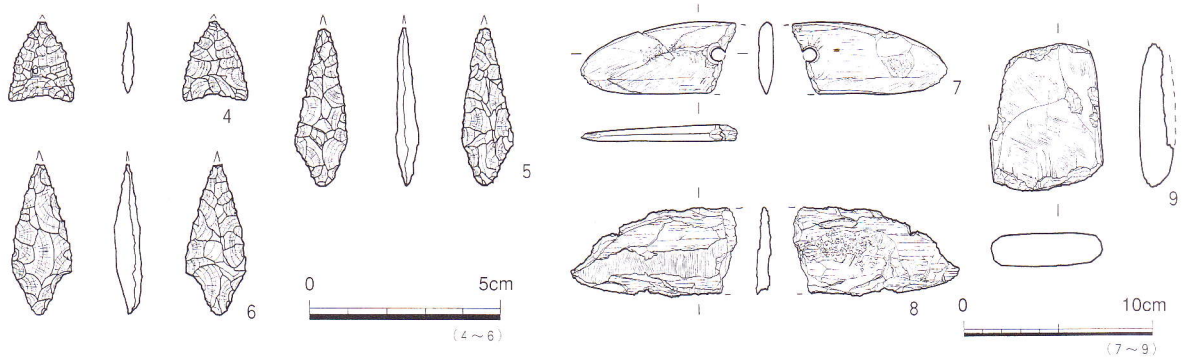


遺構全体平面図



遺物実測図１

【参考文献】『太田・黒田遺跡　第33・34次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年



遺物実測図２

21. 友田町遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市友田町四丁目40番地

調査面積　200m²

位置と環境

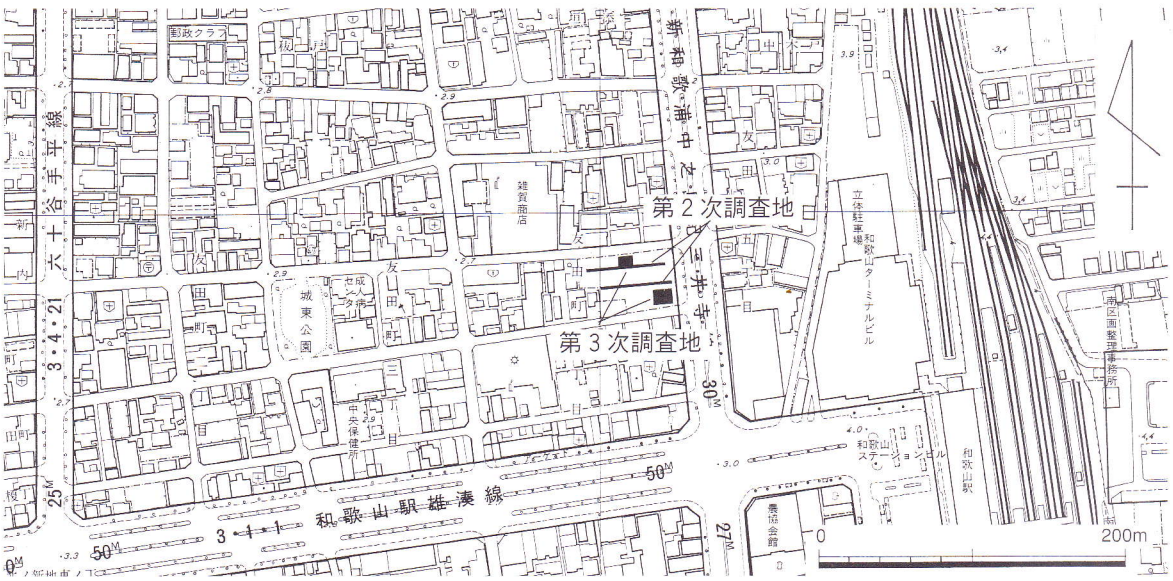
友田町遺跡は和歌山市のほぼ中央、JR和歌山駅の北西側近辺に位置する。遺跡は、紀ノ川南岸の和歌山平野上に立地する。本遺跡は従来吉田窯跡とされていた遺跡が、当調査地の約100m西側に位置する第１次調査時（平成６年度）において窯跡とは別の古墳時代後期の溝などの遺構を検出したことから、新発見の遺跡、友田町遺跡として周知されたものである。この遺跡の東側500mの地点には県内最大級の規模をもつ弥生時代の集落、太田・黒田遺跡がある。

調査内容

第２次調査は、遺構等の有無を確認するためのトレンチ調査である。調査区は幅約２mのトレンチであり、北側をA区（延長55m）、南側をB区（延長45m）とした。

調査地は既に造成が行われており、上部の大半が盛土層で覆われている。盛土層下は、旧耕作土（第１層）、床土（第２層）が堆積し、床土の下面は灰黄褐色系の土色を呈する土層（第３層）である。この調査ではこの第３層までを重機によって掘削し、以下の古墳時代の遺物包含層（第４層）から人力掘削を行った。第４層の上面では第３層と酷似する覆土をもった溝状遺構などを検出している。さらに、第４層の下面は、ほとんどの遺構を検出したベース面であり、標高2.0m前後を測る。第４層以下の状況は、厚さ30cm程度を測る黄褐色系のシルト層で希薄な弥生時代中期頃の遺物包含層（第５層）が堆積し、その下層は無遺物層（標高1.5m前後）とみられる。

遺構は、古墳時代前期の溝２・８・20、古墳時代中期の土坑２、古墳時代後期の柵列１、溝１・６・７・18、溝状遺構14、土坑３・５・６などである。なかでも、土坑２はB区で検出した不定形の土坑であり、東西4.0m以上、南北2.0m以上、深さ10cmのものでこの土坑には多量の土器が含まれていたことから、土器廃棄土坑と考えられる。また溝１はA区からB区にかけて検出した幅1.3～1.5m、深さ30～40cm前後を測り、北西から南東へ傾斜をもつ溝である。このほか、B区西端に設定



調査位置図

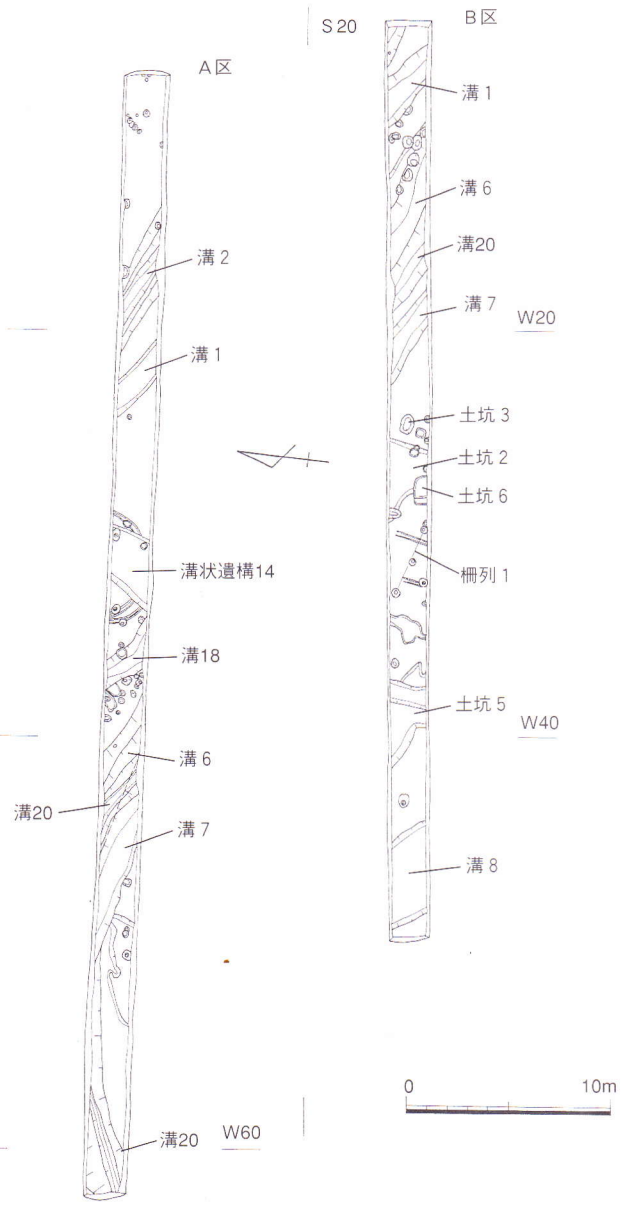
した下層調査のためのサブトレンチ内において噴砂を検出した。この噴砂は平面的にはN-14°-Wの方向性をもつ。砂脈は第6層を貫き、第5層でとまることから、少なくとも弥生時代中期以前に発生した地震によって起こった現象であることが推察できる。

遺物では、弥生時代中期から江戸時代にかけてのものがある。弥生時代の土器では、中期に比定できる壺の破片がある。古墳時代の土器は前期の布留式併行期の壺や甕、鉢などが溝2から出土した。中期から後期のものでは溝6や土坑2などから多くの須恵器、土師器が出土した。これらの器種構成は、須恵器の蓋杯・高杯・壺・甕・甑や土師器の杯・高杯・壺・甕・堝・ 甑・製塩土器・手づくね土器などである。またカマドや土錘、フイゴが出土している。また石器では、弥生時代から古墳時代にかけてのものとみられる叩石や古墳時代のものとみられる砥石が出土した。また石製品では滑石製模造品などが出土している。この滑石製のものは、長さ2.2～2.4cmの勾玉2点、丁寧に研磨を施した剣形模造品1点、緑色片岩製の有孔円板1点である。これらは溝6第4層の一括出土資料である。このほか、A区西端の谷状の落ち込みから滑石製紡錘車が1点出土した。

まとめ

当遺跡における全体的な集落については、27.友田町遺跡第3次調査において述べることとし、本調査では一括出土した石製品についてふれておく。

溝6第4層から一括出土した祭祀関係遺物とみられるものに先にふれた滑石製勾玉2点他がある。これらは共伴遺物から6世紀の前半頃のものとみられる。このなかで、滑石製剣形模造品は今回出土したものが和歌山市内では初例のもので、県内をみると御坊市の富安I遺跡に1点、西牟婁郡白浜町の坂田山遺跡に3点、同郡串本町の向屋敷遺跡に2点の出土例がある。今回出土した剣形模造品は、他のものに比べ最も整った形であり、良好な資料といえる。この剣形模造品は御坊市以南の紀南地域に分布し、紡錘車は紀ノ川河口平野周辺の紀北地域の遺跡に分布すると考えられていた。しかし、今回の友田町遺跡の調査から剣形模造品が出土したことは紀北地域においてもその分布が広がる様相を考える一つの貴重な資料といえる。　　（井馬好英）



遺構全体平面図

【参考文献】

「8.友田町遺跡発掘調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報4』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1997年

『友田町遺跡第2・3次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998年

22. 太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第41次調査

調 査 地　和歌山市太田423-4番地

調査面積　140m²

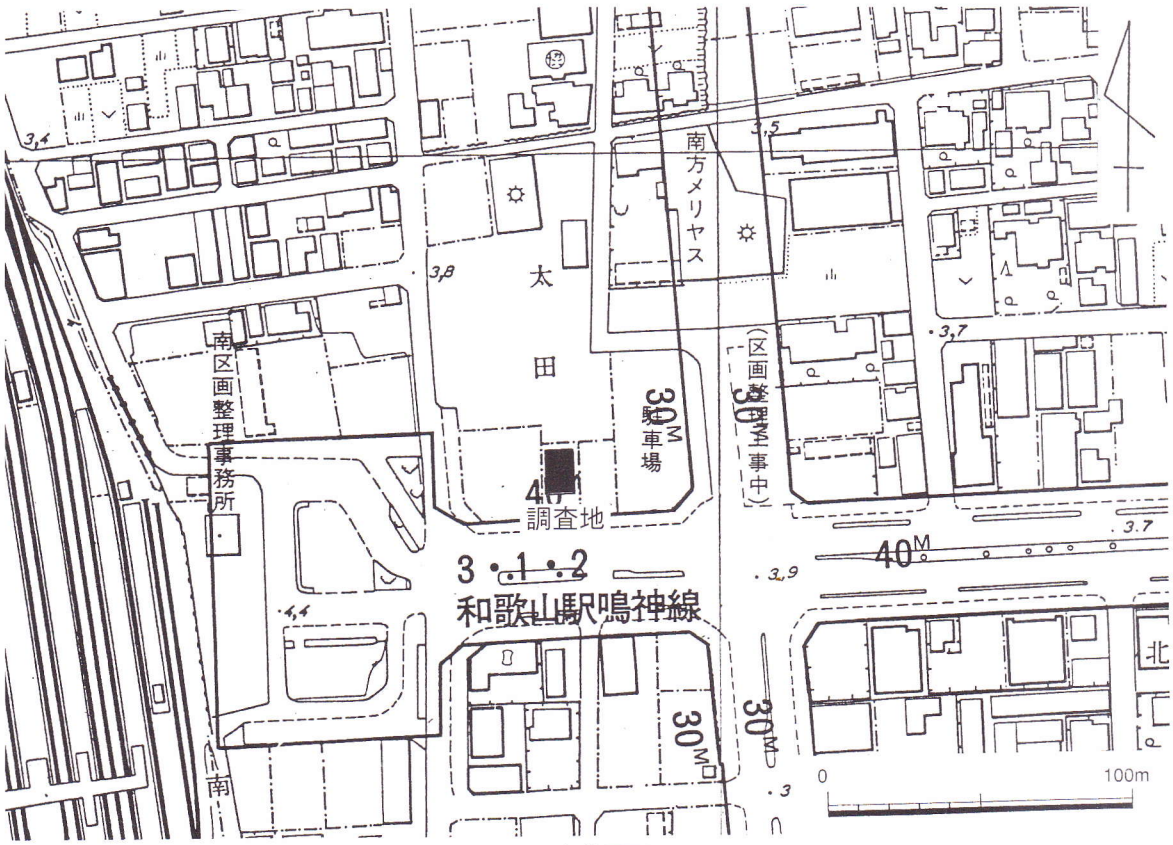
位置と環境

太田・黒田遺跡は紀ノ川下流域南岸に位置する弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模の集落遺跡として知られいる。これまでの調査では、竪穴住居、水田、土坑墓などの遺構や、大量の弥生土器とともに銅鐸（外縁紐四区袈裟襷文鐸）、内行花文鏡片（懸垂鏡）などの遺物が出土している。

この第41次調査地点は、遺跡のやや西部に位置し、第33・34次調査地点の西隣接地にあたり、第26・37次調査地点から北約100mに位置する。第33・34次調査では、弥生時代中期の大溝、奈良時代の大溝、平安時代の溝などを検出し、特に第33次調査の調査区南半部で検出した平安時代及び江戸時代の溝は条里制に関する遺構とされていることから直線的に当調査区まで及んでいるものと推定された。

調査内容

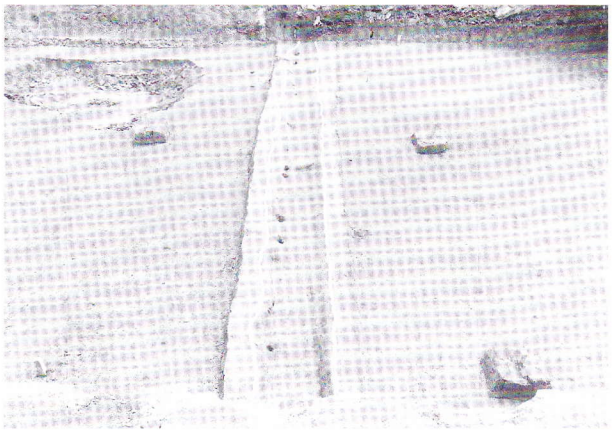
当地は既に造成が行われている地点であり、この整地土が80cmの厚さを測る。整地土以下の状況は、旧耕作土（第１層）が５～15cm、床土（第２層）が６cm、にぶい黄褐色系の細砂混シルト（第３層）が15cm、江戸時代の遺物包含層である灰色系のシルト（第４層）が20cm程度堆積している。また第４層下には厚さ６cmの床土状の堆積（第５層）がみられた。この第５層以下の状況は数単位



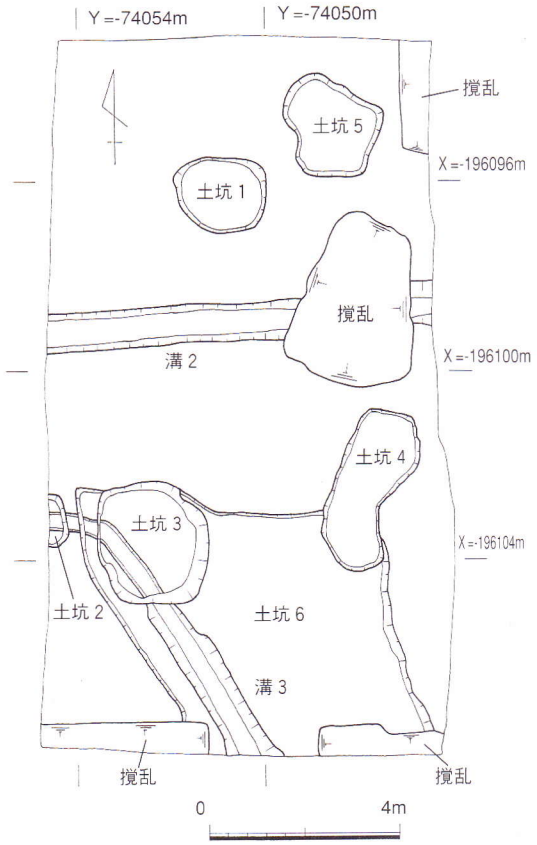
調査位置図

に分層できたが、全く遺物が含まない無遺物層であった。

次に、遺構は第４層上面及び第６層上面において検出した。第４層上面（標高2.75m）では、調査区を東西にのびる幅70cm、深さ10cm程度を測る江戸時代の溝（溝１）を１条検出した。この溝の方向性は座標北からほぼ90°振っている。また第６層上面（標高2.55m）では、大きく屈曲する弥生時代中期の溝（溝３）、土坑２基（土坑１・５）、平安時代の溝１条（溝２）、江戸時代初頭頃の土坑２基（土坑２・３）、時期不明の土坑２基（土坑４・６）などを検出した。このなかで、平安時代の溝２は第４層上面において検出した溝１と同様に調査区を東西に横切る。この溝は幅80cm、深さ15cmを測るもので、その方向性は、座標北から東へ86°振っている。



溝１検出状況（西から）



第２遺構面遺構全体平面図

まとめ

第33次調査では弥生時代中期の遺物包含層（第５・６層）上面（標高2.6～2.7m）において弥生時代から江戸時代にかけての遺構を同一面上で検出している。この調査で検出された平安時代の溝と江戸時代の溝は「名草郡４図８里１坪」と「名草郡４図８里12坪」の坪境溝に相当するものと推定されている。今回の調査範囲は第33次調査と同じく「名草郡４図８里１坪」と「名草郡４図８里12坪」の一部にあたり、検出した平安時代の溝２及び江戸時代の溝１は第33次調査検出の溝に直線的につながるものとみられることから、さらに坪境溝の可能性が一層高まったものと考えられる。また検出面の違いは、当地における江戸時代の水田再開発による第４・５層の堆積が考えられる。

（井馬好英）

【参考文献】
中野栄治「条里制」『和歌山市史』第１巻　和歌山市史編纂委員会　1991年
『太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年
『太田・黒田遺跡　第33・34次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年

23. 鳴神（なるかみ）Ⅳ遺跡 第９次発掘調査

調 査 地　和歌山市鳴神646-1番地他

調査面積　110m²

位置と環境

鳴神Ⅳ遺跡は、花山古墳群の西麓に広がる沖積平野に位置する。遺跡の範囲は、東西約500m、南北約380mに広がり、古墳時代を中心とする弥生時代から江戸時代までの複合遺跡として知られている。

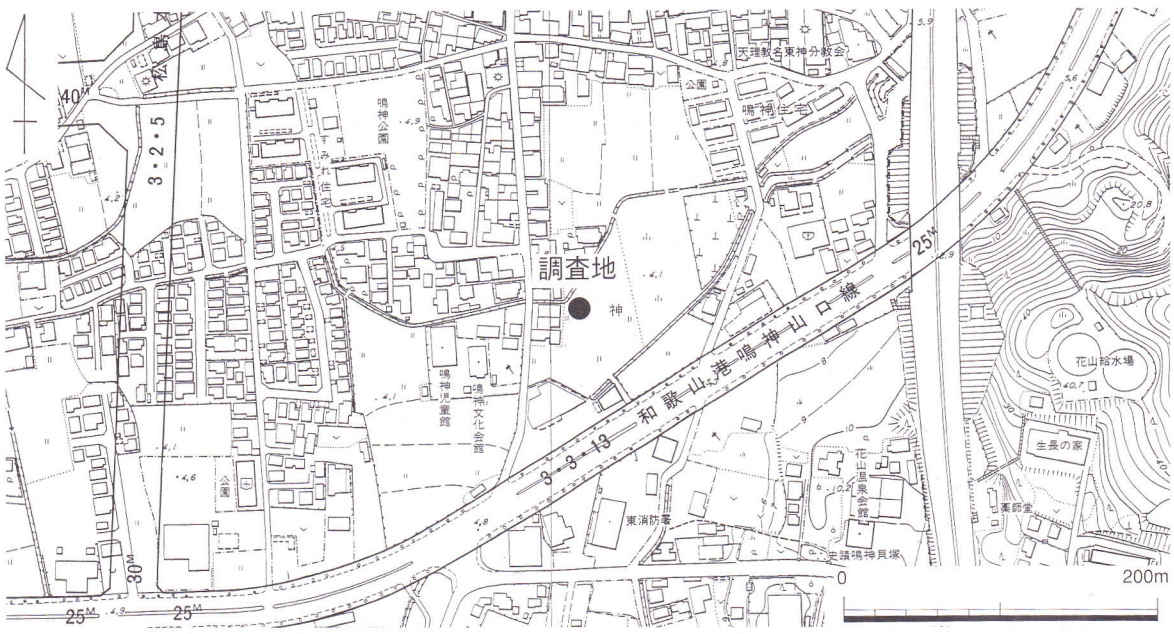
昭和52～54年に行われた和歌山県教育委員会による調査において、古墳時代では、竪穴住居、掘立柱建物、円墳、方墳、井戸などの遺構が確認され、須恵器、製塩土器、土錘、滑石製模造品などの遺物が出土している。また、奈良時代と考えられる柵列、北宋銭（淳化元寶）が出土した平安時代から鎌倉時代と考えられる土坑、中世の土坑墓などの遺構、遺物も報告されている。この内、J地区は、本調査地から約50m南側と最も近接しており、主な遺構は、古墳時代前期の溝、円墳や古墳時代の竪穴住居跡、土坑、井戸などが検出されている。

当財団の調査においては、第１次調査で古墳時代後期の溝と土坑、第４次調査で古墳時代と江戸時代後期の溝などが確認されている。本調査地から約10m北側にて行った第６次調査は、古墳時代中期から後期の溝、土坑、同時代中期後半から後期前半の竪穴住居跡・掘立柱建物、同後期後半の方墳、古墳時代の掘立柱建物群・柵列、土坑、鎌倉・室町時代の土坑などが検出された。この他、和歌山市教育委員会によって行われた第５次調査では、奈良時代の土坑などを確認している。

今回、鳴神Ⅳ遺跡内において宅地造成に伴う工事が行われるに伴い発掘調査に至ったものである。本調査地は標高約3.8mを測る沖積平野上に位置し、遺跡の東部に当たる。

調査内容

調査は、北西から南東方向に幅約２m、長さ約20m、西南から東北方向に幅約1.5m、長さ約48m



調査位置図

の調査区を設け、長い方を第１トレンチ、短い方を第２トレンチと呼称した。

基本層序は、現代の盛土が約50cm、旧耕作土（第１層）が約10cm、旧床土（第２層）が約８cmの厚さで堆積している。第３層は10～30cmの堆積で古墳時代後期から鎌倉時代までの遺物を出土する遺物包含層である。この層からは製塩土器が出土している。第３層下面で鎌倉時代の遺構を検出した。第４層は第２トレンチ北西端から約４mの地点から南東全域にみられる古墳時代後期から奈良時代初頭までの遺物を出土する遺物包含層である。第４層下面で古墳時代末期の遺構を検出した。第５層は20cm以上堆積し、遺物を出土しないことから自然堆積層と考えられる。この層は南西方向に向かって緩やかに傾斜して堆積する状況を観察した。

遺構は第３・４層下面を検出面とし、遺構面の標高はそれぞれ約3.7と約3.8mを測る。第３層下面を上面遺構、第4層下面を下面遺構と呼称し、以下主要な遺構を説明する。

上面遺構

溝１　第１トレンチの西側で検出し、幅約1.6m、深さ約20cm、検出長約４mの規模を測る。底面の標高差から流路方向は東から西と考えられる。土層の堆積状況は２層に分層することができた。溝からの出土遺物をみると鎌倉時代の遺物を含むことから最終埋没の時期は鎌倉時代であるといえる。

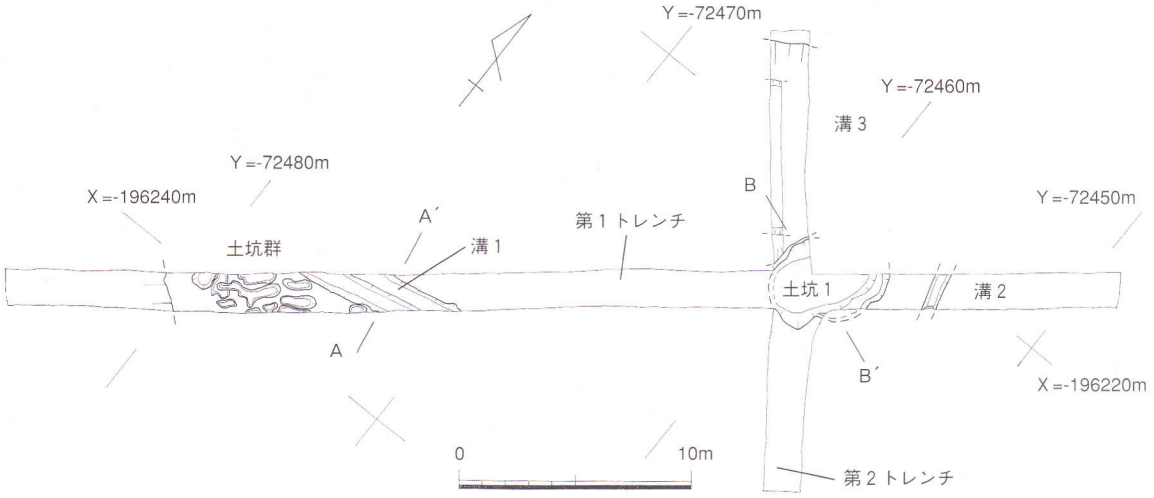
溝２　第１トレンチの東側で検出し、幅約60cm、深さ約10cm、検出長約1.6mの規模を測る。底面の標高差から流路方向は北から南と推測する。鎌倉時代の遺物を含むことから最終埋没の時期は、溝１と同様に鎌倉時代であるといえる。

土坑１　第１トレンチの東側で検出し、不整円形を呈する。短径推定幅４m、長径推定幅５m、最深部は約60cmの規模を測る。土層の堆積状況は４層に分層することができ、出土遺物をみると古墳時代後期から奈良時代前期にかけて徐々に埋没し始め、上層に鎌倉時代の遺物を含むことから鎌倉時代に最終埋没したとみられる。

土坑群　溝１の南側で検出した11基の土坑は不定形を成し、幅40～60cm、長さ0.3～2.6m、最深部は約20cmの規模を測る。これらの土坑は、溝１の南側に近接して約50cmの範囲にみられる。

下面遺構

溝３　第２トレンチの北側で検出し、幅約９m、最深部は約50cm、検出長約1.5mの規模を測る。土層の堆積状況は３層に分層することができ、出土遺物から最終埋没の時期は古墳時代末期であると



遺構全体平面図

いえる。

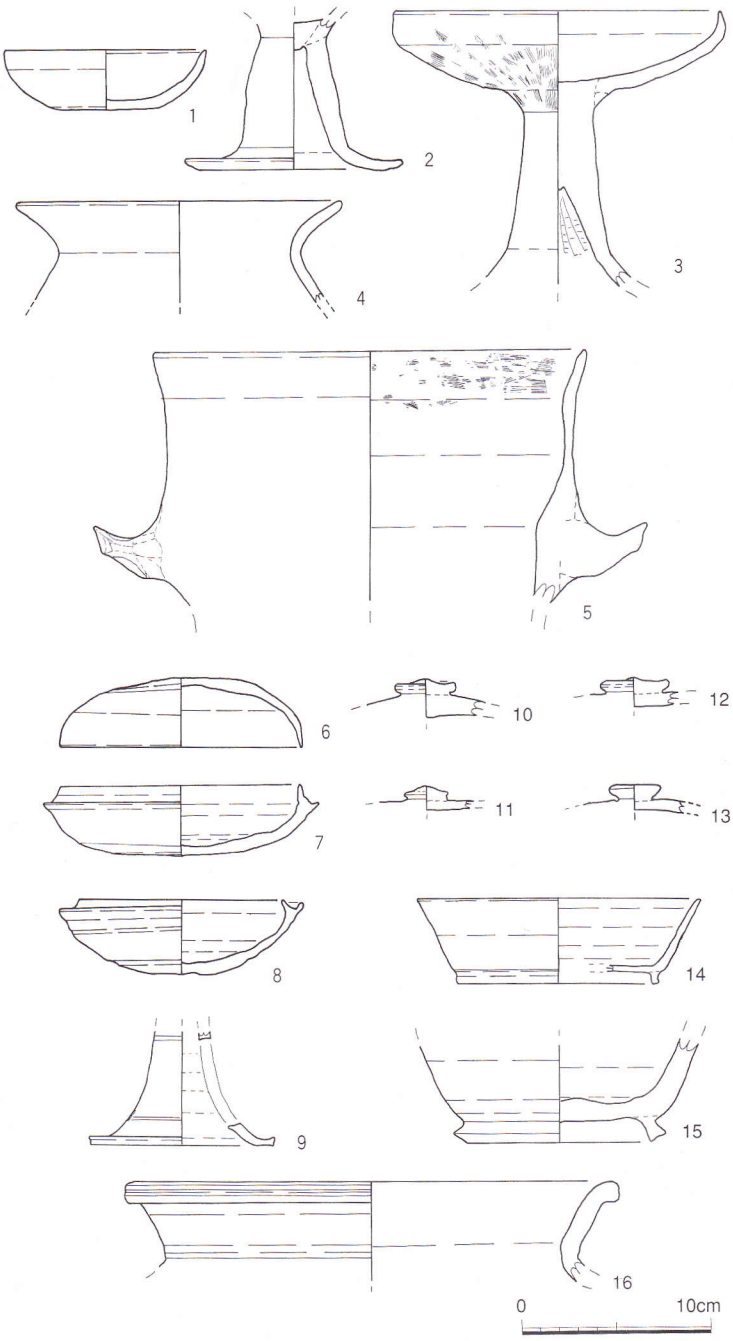
出土遺物は、須恵器、土師器、黒色土器、竈、土錘、フイゴ、ミニチュア土製品、石錘などがある。以下、主要な遺物を説明する。

1～5は土師器である。1の杯は、底部外面に黒斑がみられる。2・3は高杯である。2の脚部は、杯部との接合部から開き気味に下降し、裾部で外方へ大きく開くものである。3の杯部は、内彎して立ち上がる口縁をもち、深さ3.8cmと浅いタイプのものである。外面は接合部まで細かなハケ調整を施している。脚部は、内面にはクモの巣状ハケ目がみられる。4の甕は復元口径17cmを測り、口縁が外方に開くものである。5の甑は、復元口径22.7cmを測り、ヘラケズリされた把手は外側から差し込みされている。口縁部内面は、細かなハケ調整が施されている。

6～9は古墳時代後期の須恵器である。6は杯蓋、7・8は杯身である。6・8の外面は、1/2回転ヘラケズリを行っている。6～8のロクロ回転方向は右である。9の高杯脚部は、長方形の透かしを2方向に配する。透かしの上下には沈線がめぐらされている。

10～16は奈良時代前期の須恵器である。10～13は杯蓋のつまみの部分である。10～12は、天井部に膨らみがみられるが、13は天井部の中央がややへこみ、扁平なものである。10・11のつまみの側面には、回転調整時についたとみられるヘラ状工具による溝状の凹線がある。14の杯と15の壺は、貼り付け高台をもつものである。16の甕は、口径25.2cmを測り、口縁端部には1条の沈線が施されている。

土坑1の上層からは、9、13、16、下層から、1・3～6・8が出土している。2は溝3の第3層からの出土である。

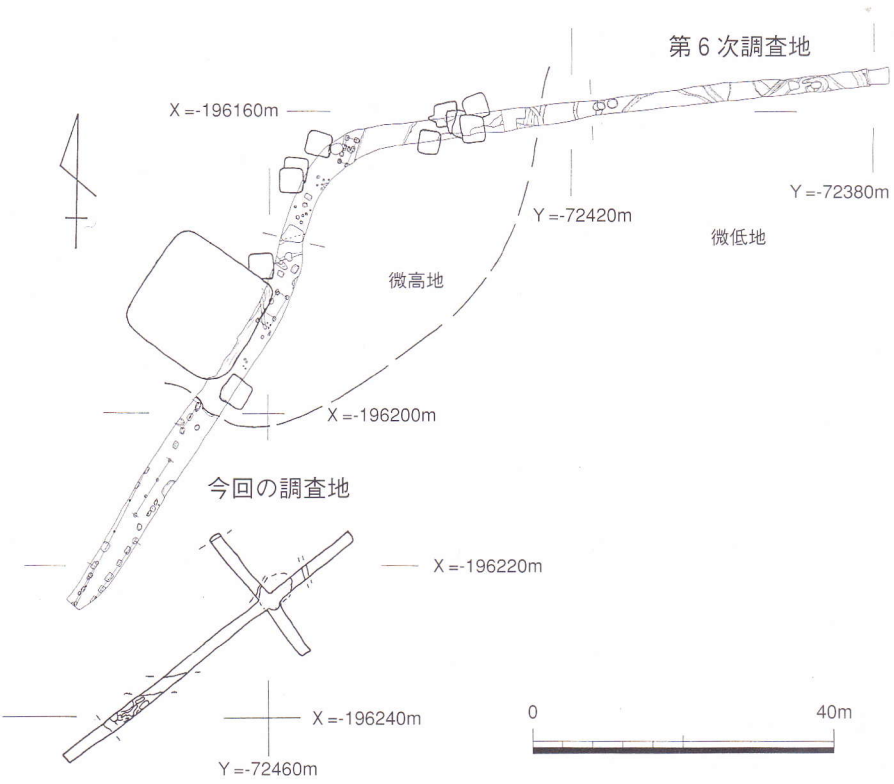


遺物実測図

まとめ

発掘調査の結果、調査区内において溝・土坑・柱穴などの遺構を

検出した。今回の調査に当たり第６次調査の成果からみて、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構の延長が展開するものと推察された。しかし調査の結果、第６次調査では観察されなかった包含層の堆積（第４層）が認められ、検出遺構面の様相も異なっていた。出土遺物から、第６次調査の第３層上面と第９次調査の第３層下面の遺構面、第６次調査の第３層下面と第９次調査の第４層上面の遺構面が対応していることが明らかとなった。遺構面の標高は第６次調査では約3.8m、本調査では3.7～3.8mを測りほぼ同じである。このことから、第６次調査の調査成果においても明らかとなっていたが同調査地に集落が展開していた南側2/3の微高地が後世の開墾に伴って削平され、微低地である本調査地が埋め立てられた状況を推察することができる。加えて第３層からは各調査区において製塩土器が出土している。



第６・９次調査の遺構全体平面図

古墳時代後期の溝３は、低湿地であった南側を流れていた。県の調査のJ地区西側の古墳時代後期の流路とつながるものと考えられる。

鎌倉時代の溝１、溝２は直交して掘削されており、その方向性はN-10°-Wを測り、和歌山平野における条里制土地区画の復原案（中野栄治案）の方向性と一致し、「名草郡１図７里20坪」の内部に相当するものと考えられる。また溝2は北へ延長した部分が第6次調査において検出されており、直線的に掘削された溝であるといえる。

また、溝１を条里に伴う潅漑用水路とするならば、遺構の埋土や土層堆積、遺物からみて溝１の南側に平行して幅約50cmの範囲に広がっている土坑群は畑の可能性がある。このことは、その西の空閑地は畦畔、さらにその西側微低地は水田の可能性を推察することができ、微高地に集落を設け、周囲の微低地において農業が営まれていた環境が復原できるものと考えられる。　（奥村　薫）

24. 神前（こうざき）遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市神前378－1番地

調査面積　14m²

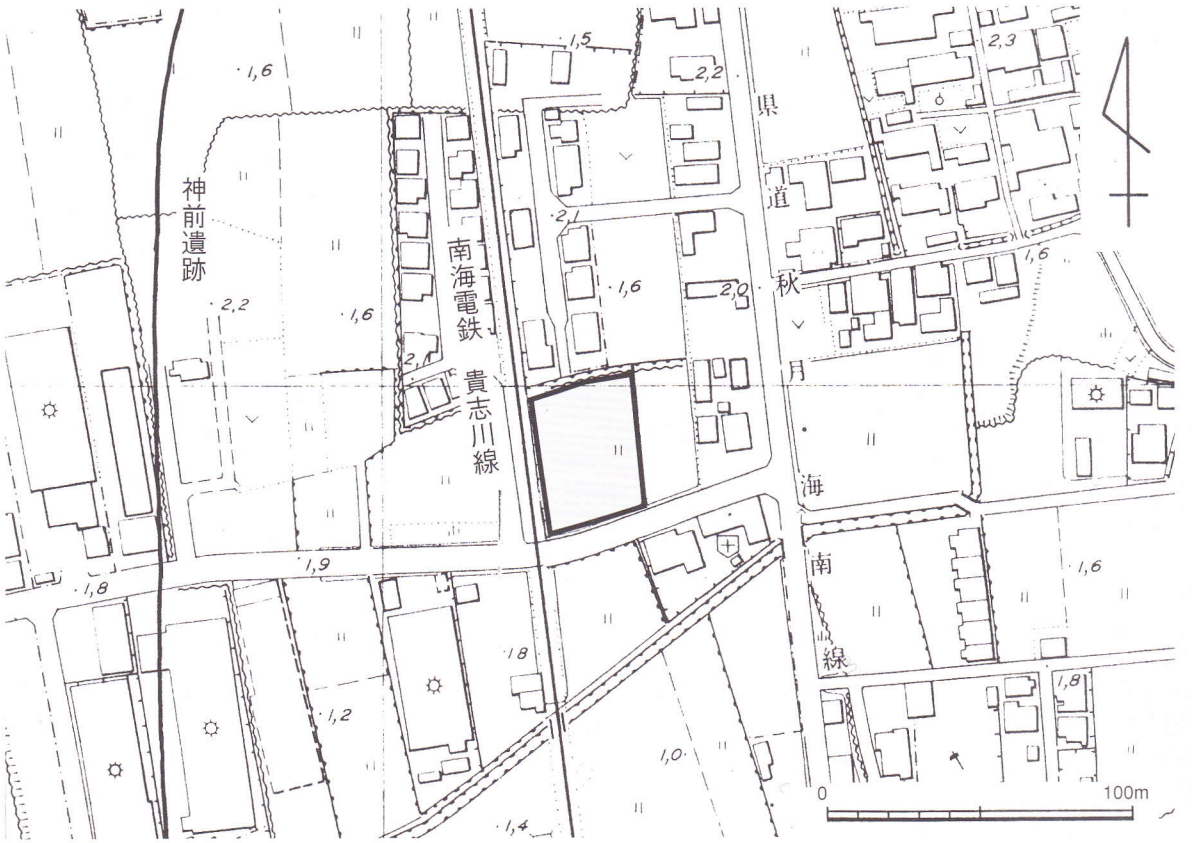
位置と環境

神前遺跡は、岩橋千塚古墳群の一画を占める井辺前山古墳群が所在する福飯ケ峰丘陵の西麓、標高２～３ｍの低地に位置する遺跡である。遺跡の推定規模は、東西約400ｍ、南北約600ｍで、北側は井辺遺跡に接している。遺跡中央東端部における第１次調査地点では、弥生時代前期の土坑、弥生時代後期の溝、鎌倉時代後期の片岩積みの井戸、江戸時代初期に埋没した溝等が検出された。また、採集遺物等から、古墳時代初頭の時期にも遺跡の存続時期があることが推定されている。(註１)

調査内容

調査地は、南海電鉄貴志川線沿いの水田であり、遺跡推定範囲からみると、中央からやや北西に位置する。宅地造成計画に対処するため、マンホール設置予定地等の確認調査を実施した。

北側の１トレンチ（東西1.6ｍ、南北1.9ｍ）の基本土層は、１層（厚さ約20cm、耕作土）、２層（厚さ２～３cm、床土）、３層（厚さ約15cm、淡黄灰色砂層）、４層（厚さ不明、灰色砂層）であり、２層下面に溝１が形成される。溝１は、西側肩部（長さ1.7ｍ分）のみの検出であったが、深さ45cmで、埋土の上層は厚さ約35cmの淡灰茶色やや砂質土層、下層は厚さ約６cmの暗灰色粘土層であった。溝埋土より磨滅した土師質土器と須恵器の細片が出土した。この溝は、砂層である３層・４層をベースとしており、肩部が不安定であるとともに湧水がみられた。

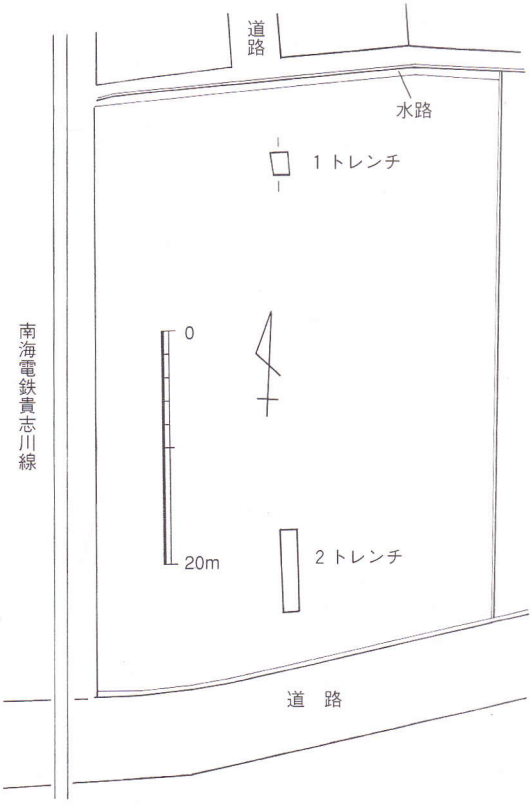


調査位置図（網掛け部分が対象地）

南側の２トレンチ（東西1.5m、南北７m）では、３層の堆積が確認された。１層は厚さ約20cmの耕作土、２層は厚さ約３～５cmの床土、３層は灰褐色砂層（１トレンチの３層に相当）で厚さ20cm以上に及ぶことが確認された。また、３層調査中の湧水も著しかった。遺物としては１・２層より近世陶磁器の細片が出土しており、水田化された時期がその時期であったのかもしれない。

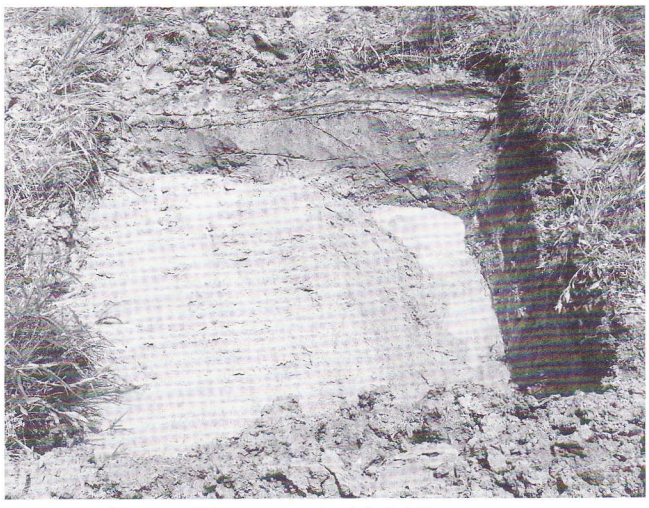
まとめ

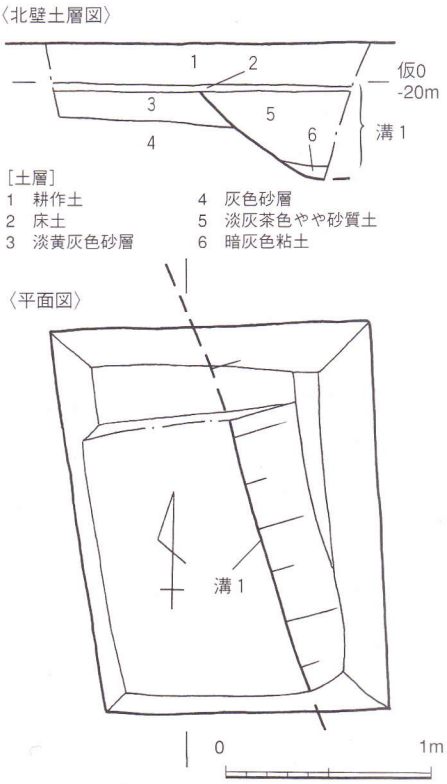
１トレンチで検出された溝状遺構は形成時期の判定が困難であった。出土土器と検出面より、古墳時代以降で江戸時代以前と推測されるのみである。調査対象地は、遺構形成のベース層が不安定な砂質土であり、本来的に遺構密度の低い地域と判断された。それは、周辺の水田面の標高が1.6mであり、調査中も湧水が著しかったことからも肯定される。周辺地域での調査歴を重ねる必要があるが、今回の調査成果からすると、本遺跡の西側、特に南海貴志川線以西の遺構分布は希薄である可能性が高い。（前田敬彦）



調査区配置図

（註１）
『和歌山県史』考古資料　和歌山県　1983年


１トレンチ（南より）



１トレンチ遺構実測図

25. 太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第42次調査

調 査 地　和歌山市黒田136番地先

調査面積　約50m²

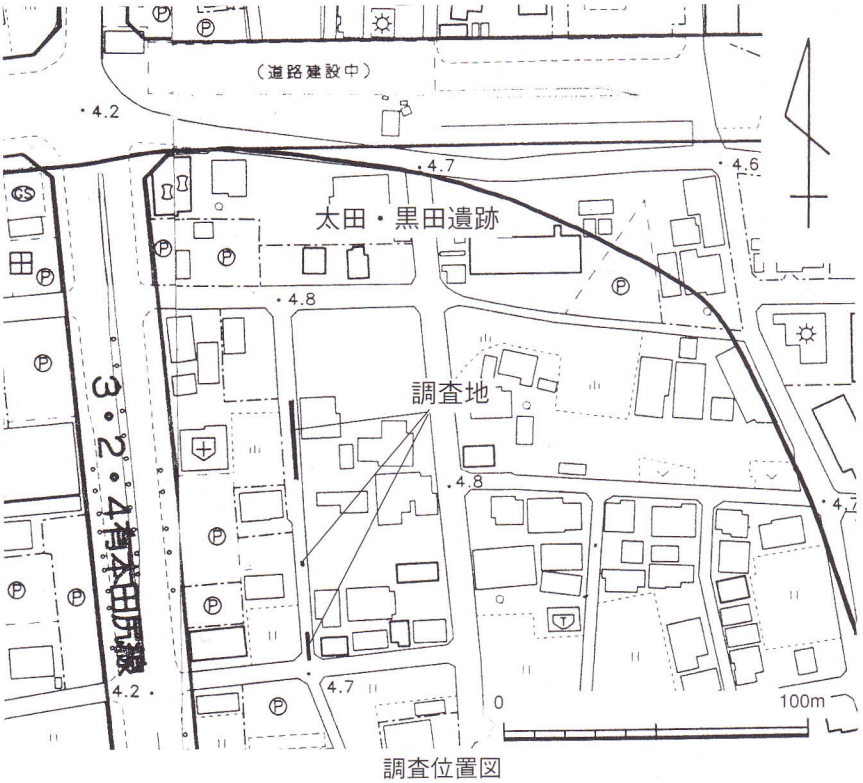
位置と環境

大規模な本遺跡のうち調査対象地は遺跡の北端に相当し、道路拡幅工事に伴う確認調査を実施した。配管により深く掘削される北端部についてはトレンチ調査を実施し（Ａ１～Ａ３地点）、幅の狭い管の埋設される南側については随時立ち会い調査とし、必要に応じて土層等の記録を作成した。

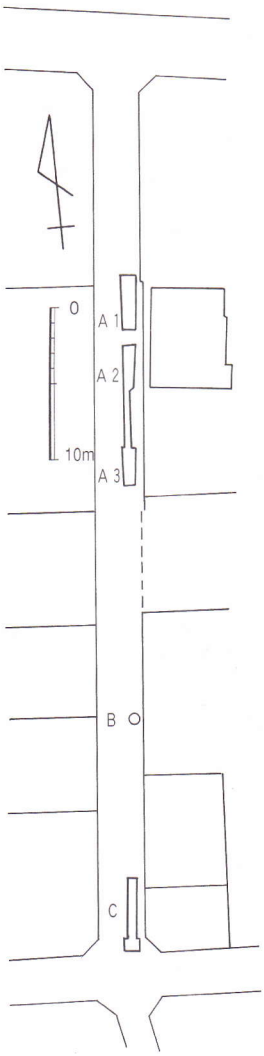
調査内容

Ａ１地点　地表面の標高は約４ｍであり、１層下面の標高3.7m前後より長さ1.2～３ｍ以上の大型土坑２～５が切り合いをもちながら形成される。深さは60～90cmで、炭・焼土を包含する堆積土をもち、瓦細片、近世陶磁器片を微量包含する。調査区北西隅で検出された土坑１からは肥前磁器、ほうらく、堺焼すり鉢のほかチャート製火打石２点等が出土した。江戸時代中期の遺構である。３層以下はほぼ水平堆積しており、５層には須恵器・土師器が包含され、５層下面には鉄分の沈着土層が確認された。また、この５層下面（標高2.7ｍ前後）に直径30～40cmの柱穴５・６が検出された。柱穴５からは須恵器が出土しており、これらは古墳時代の遺構とみられる。

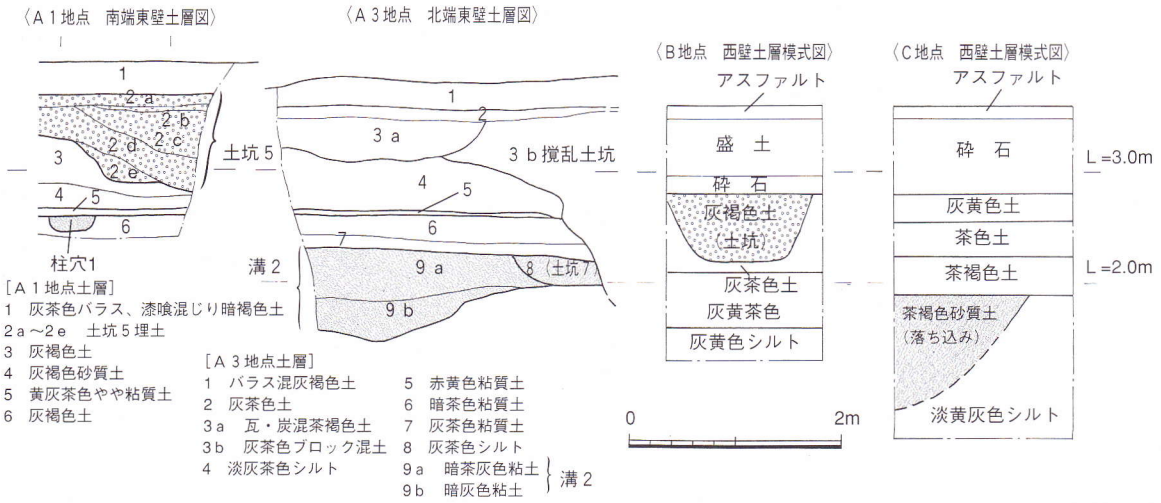
Ａ２地点　近代以降とみられる掘削が地表下1.3mにも及んでおり、上層の近世土坑の大半が削平されている。Ａ１地点と同様に５層下面（標高2.6m前後）で古墳時代とみられる柱穴１基、さらに６層（厚さ15cmの落ち込み地形内の堆積土）下面で直径15cm程の柱穴３基が検出された。



調査位置図



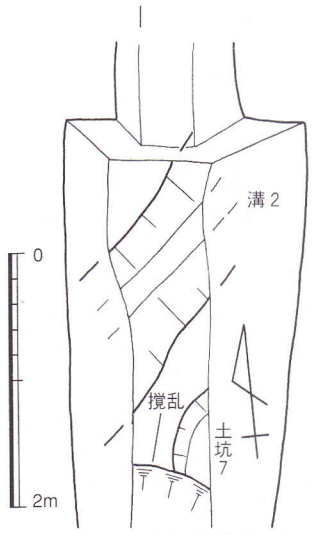
調査地点位置図



土層図（Ｂ地点、Ｃ地点のレベルについては道路面を基準にした推定復元。網掛け部分は遺構を示す）

うち１基からは弥生土器が出土した。

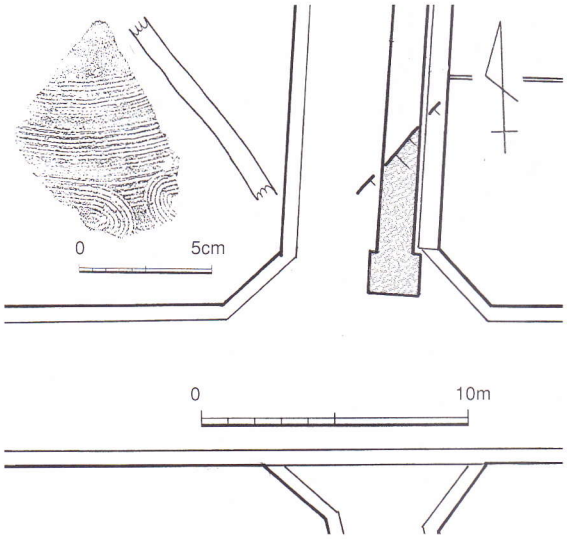
Ａ３地点　標高2.5m前後の６層下面で須恵器・弥生土器を包含する溝１が検出された。幅80cm以上、深さ35cm以上で、南北方向に延びており、その東肩のみが検出された。７層下面には弥生時代の土坑７と溝２が形成される。溝２からは畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土した。この溝は検出面（９ｂ層上面）では幅約80cm、深さ約30cmであるが、土層を再検討した結果、９ａ層もまた溝の埋土と判断され、本来は幅３m以上、深さ約80cmの大規模な溝であるとみられた。



Ａ３地点下層遺構図

Ｂ地点　道路工事に伴い標高2.8mまで近代の掘削が及んでいた。時期不明の土坑が壁面で確認された。

Ｃ地点　標高2.9m前後から落ち込む遺構が確認された。この落ち込みは北東から南西の方向性をもち、深さは70cm以上に及んでいる。調査地点南端部では壁面観察はできなかったが、最下層より泥炭質土層とともに弥生中期初頭の土器が出土しており、大規模な落ち込み遺構と判断された。



Ｃ地点落ち込み地形（網掛け部分）と出土土器

まとめ

遺跡推定範囲の北端部の調査であったが、弥生・古墳・近世の遺構が複数確認された。特に、Ａ３地点とＣ地点で確認された大規模な溝・落ち込み遺構はともに弥生中期の明確な遺構として注目された。　（前田敬彦）

26. 木ノ本Ⅲ遺跡 第９次調査

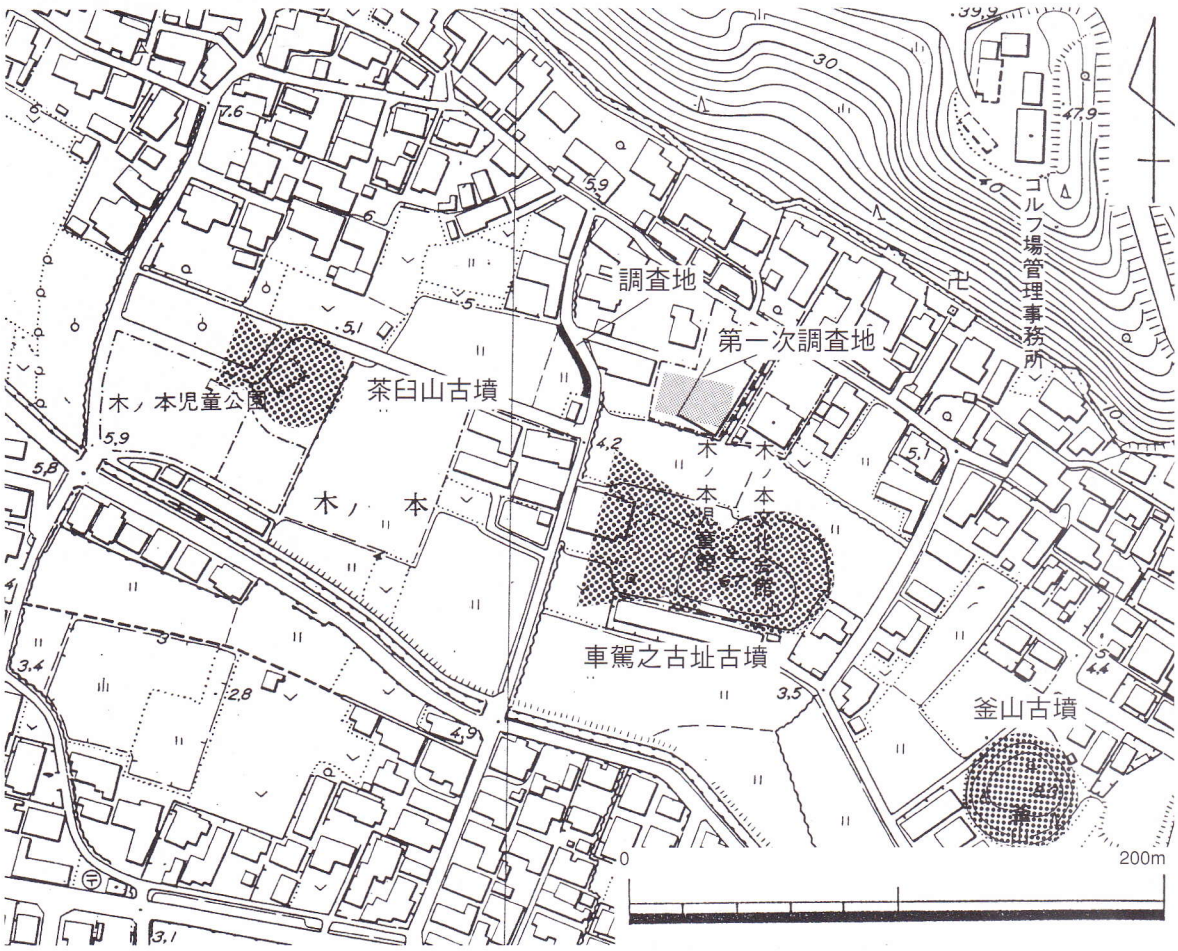
調 査 地　和歌山市 木ノ本750番地

調査面積　60m²

位置と環境

調査区遠景（南から）

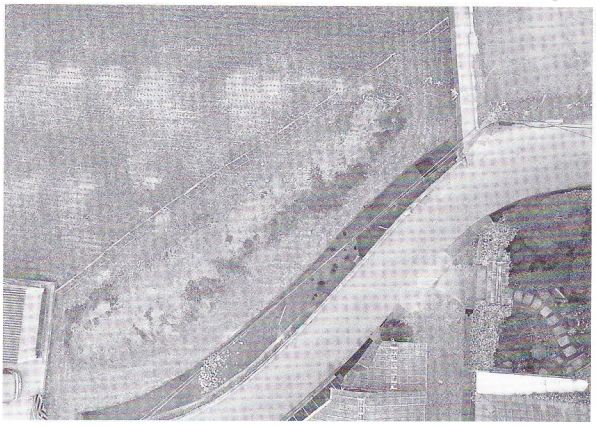
木ノ本Ⅲ遺跡は、和歌山平野の西端部、紀ノ川の北岸地域で和泉山脈の山麓部に展開する平地部に存在し、古墳時代および中世を主な時代とするものである。遺跡はこれまでの８次にわたる発掘調査によって、中世の井戸、近世の土坑等が確認されているほか、第７次調査で石垣とそれに伴う炭・焼土や梵字文軒丸瓦等が出土した。また、この遺跡の範囲内には茶臼山、車駕之古址および釜山の３古墳が存在し、木ノ本古墳群を形成している。今回の第９次発掘調査は市道拡幅工事の事前調査として実施したものである。また、調査対象地は、標高約５ｍを測り、木ノ本Ⅲ遺跡範囲内の西側部分に相当する。



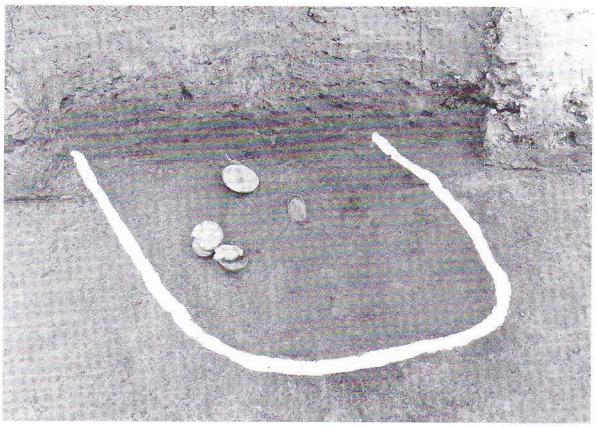
調査位置図

調査内容

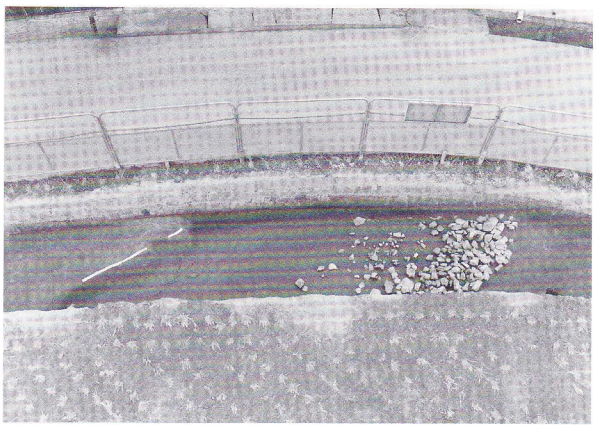
今回の調査では土坑及びピット群、溝を検出した。土坑は２基検出した。土坑１は調査区北側で検出したもので、土師器皿、瓦器椀のほかに埴輪片を出土している。また土坑２は、調査区の中央部で検出した。規模は、東西80cm以上、南北約90cmの方形を呈し、深さは約15cmを測る。この土坑は、土師器皿６点と銅製の和鏡（洲浜花枝双鳥文）１点が出土したことから土葬墓と考えられる。その他、調査区中央部に集中する形でピット群を検出した。ピットの規模は直径10～40cmで、深さは５～35cmを測る。これらピットの覆土はほぼ共通しており、灰色を呈する細砂（５Ｙ５/１（灰）細砂）である。ピットのうちピット31・34からはそれぞれ完形の瓦器皿および瓦器椀が出土した。溝は２条検出した。溝１は幅1.5ｍを測る東西方向の溝である。溝２は幅4.1ｍを測る東西方向の溝で、南側肩部を砂岩の礫で護岸したものである。溝１・２からは土師器皿、瓦器椀、埴輪が出土した。



調査区全景（右が北）



土坑２遺物出土状況（西から）



溝２（西から）

まとめ

今回の調査で、特筆できる遺構として、鎌倉時代の土坑２と溝２をあげることができる。土坑２は、土師器皿６枚と和鏡が出土していることなどから土葬墓と考えられ、和鏡の年代から鎌倉時代後期の時期のものであるとみられる。溝２について、この遺構の西側約30ｍでは、同志社大学によって行なわれた第１次発掘調査でも「大溝」として同様の遺構が検出されている。さらに西側約50ｍでは、1992年度に行なわれた車駕之古址古墳第４次調査における４トレンチでも、同様の遺構が検出されている。以上、この溝は延長100m以上は続くものと考えられ、埴輪が大量に出土したことなどから、溝２は車駕之古址古墳の外堤外側に巡らされた外周溝を鎌倉時代に再利用したものであると考えられる。

（北野隆亮）

【参考文献】
『木ノ本Ⅲ遺跡 第９次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998年

27. 友田町遺跡 第３次調査

調 査 地　和歌山市友田町四丁目40番地

調査面積　212m²

位置と環境

友田町遺跡第２次調査の項を参照。

調査内容

第３次調査は、第２次調査の結果、古墳時代を中心とする良好な遺構や多量の遺物群を検出したことから、特に重要と考えられる地点について実施したものである。この調査は、第２次調査との関連からA区の北側の調査区をC区、B区の南側の調査区をD区と定めて調査を行った。

この調査では、第３層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。この結果、第３層は調査区の南西端などの比較的低地部に厚く堆積している土層であり、遺物は比較的希薄であるが、瓦器片を含むことから少なくとも鎌倉時代以降の堆積層であると考えられる。また第５層の上面のベース面は、D区において標高2.0m、C区では標高1.9mを測ることから、南東から北西にかけて緩やかに傾斜し、またA区西端で谷状の落ち込みとなる。

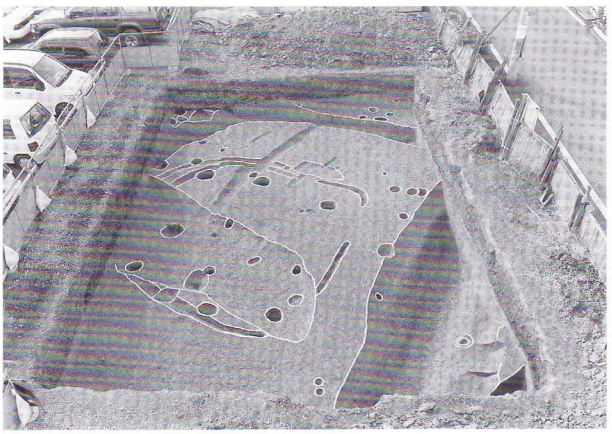
遺構は、古墳時代前期の竪穴住居１や溝２・20、古墳時代中期の溝６や井戸１、古墳時代後期の掘立柱建物や溝１・７・18、溝状遺構14、土坑13などである。

竪穴住居１は、C区のほぼ中央部で検出した隅円方形プランの４本柱のもので、検出した２条の壁溝から古段階では一辺5.0m、新段階では南側と西側に拡張したものとみられ一辺5.3m程度の規模であったものと考えられる。

溝２はA～C区にかけて検出した幅2.0m、深さ70cm前後を測るもので、N-49°-Wの方向性がみられるが、A区からC区にかけてやや南側に屈曲するものである。また溝20はA～D区にかけて検出したもので、幅1.2m以上、深さ1.1m前後を測り、N-49°-Wの方向性をもつが、A区においてほぼ90°に屈曲し、大きく弧を描くものである。

井戸１はD区で検出した素掘りのもので、長径1.1m、短径0.9mを測る楕円形を呈し、深さ1.2mを測る。

溝６・７は、関連性をもつものである。溝６はA～D区を通してほぼ直線的にのびるものであり、その方向性はN-64°-Wである。この溝は、幅約８mを測り、深さ65cmを測る。こ



C区全景（東から）

D区掘立柱建物5（北東から）

の溝を再掘削したものが溝７であり、幅1.3m、深さ70cm前後を測る。

掘立柱建物はD区において明確なものを４棟検出した。なかでも掘立柱建物５は総柱の建物であり、梁行２間（3.5m）、桁行３間（3.7m）以上のもので、主軸はN-29°-Eである。この建物はいわゆる布掘のホリカタを掘削した後、丁寧に埋め戻しを行い、さらに60～100cmを測る隅円方形のホリカタを掘削し、直径25～30cmの柱を据えている。

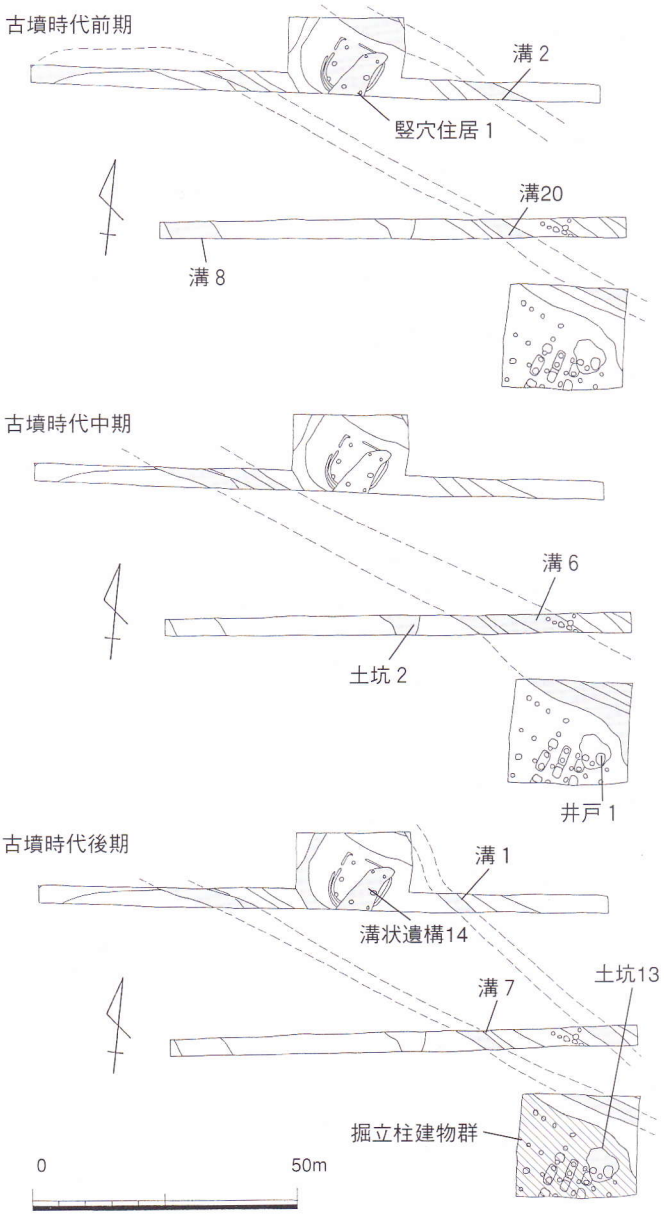
まとめ

古墳時代の遺構の変遷をみると、古墳時代前期では竪穴住居１がある。この竪穴住居１の両側には溝２と溝20があり、これらは幅約20mの間隔をもって平行にのびる。また調査区北端において大きく弧をえがくことから集落等を区画する溝の可能性が考えられる。これらは布留式併行期の新段階に位置づけられ、遺物は全体的に希薄であり、集落の形成期もしくは縁辺部に相当するものと考えられる。

古墳時代中期では土器を廃棄したとみられる土坑２や井戸１などがある。また溝６はこの時期に掘削された可能性が高いとみられる。これらは５世紀末から６世紀初頭頃とみられ、出土した遺物量などから前期以上に集落が拡大しているものとみられる。

古墳時代後期では、掘立柱建物群や溝７などの遺構を検出した。溝１や溝６は、前期の溝の方向性を踏襲しているものとみられる。また掘立柱建物群は溝の主軸とほぼ平行関係にあることから溝を基準として建物が構成されていたものとみられる。これらは須恵器からTK43型式からTK217型式にかけてのものが多いが、MT15型式から増加傾向にあるものといえる。このことから、６世紀に入りさらに集落が拡大し、６世紀後半に盛期をむかえる状況がうかがえる。

この後、７世紀中葉には既に溝６が埋没し、奈良時代の遺物を含む第４層が堆積することから、この集落は終焉をむかえるものとみられる。　　（井馬好英）



古墳時代の遺構変遷図

【参考文献】

『友田町遺跡 第２・３次発掘調査概報』
（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998年

28. 西吉礼（にしきれ）遺跡 発掘調査

調 査 地　和歌山市吉礼917番地

調査面積　25m²

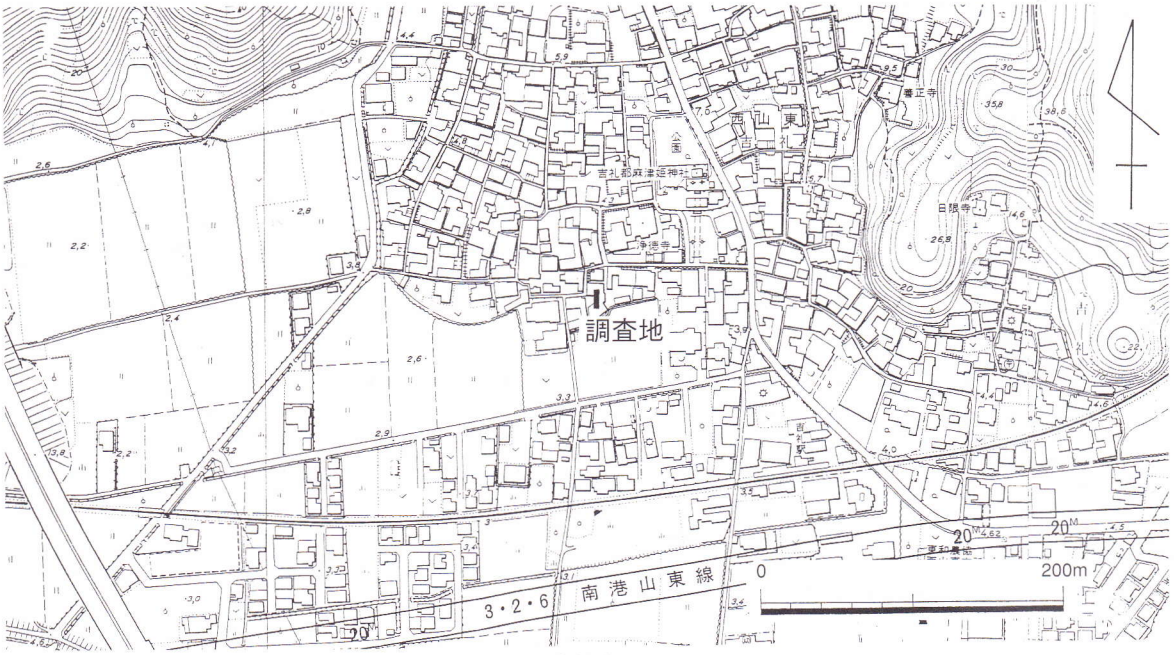
位置と環境

西吉礼遺跡は、紀ノ川南岸平野部の南東にそびえる岩橋山塊、その南側に長くのびた丘陵の先端にあたる緩やかな斜面の上に位置する遺跡である。これまでに弥生土器の壺、甕、高杯などが採集されており弥生時代の遺物散布地として知られているが、調査歴はなく遺跡の内容は明らかにされていない。今回の調査は当遺跡の実態解明及びその範囲確認を目的としたものである。

調査内容

調査は個人住宅建築工事予定範囲内において、東西2.5m、南北10mの約25m²の調査区を設定して実施した。基本的な土層堆積状況は、現地表である現代の整地土が約70～80cmの厚みを持ち、第1層が約5cm、第2層が約20cmの厚さで堆積する。耕作土である第3層（約20cm）は奈良・平安時代の遺物を包含しており、この第3層掘削後の第4・5層上面において古墳時代後期から奈良時代までの遺構を検出した。第5層は約20cm、第6層は約30cmの厚みをもつ弥生時代の遺物包含層であり、特に第5層において大量の弥生土器が出土している。また、第7層は無遺物層であるとみられる。

検出遺構は古墳時代と奈良時代の溝3条で、遺構面の標高は2.2～2.3mを測る。溝1は調査区南半分において遺構の北側肩部を検出したもので、検出幅約7m、検出長2.5mを測る大溝である。遺構の東半分を約50cmほど掘り下げたが、完掘には至らなかった。土層堆積状況について現状で14層に分層することができた。上層からの出土遺物には陶邑編年TK209～217型式の須恵器がみられることから、溝1は7世紀前半までには埋没したものと考えられる。溝3は溝1の第1層上面から切り込む小溝で、幅60cm、深さ20cm、検出長約2.5mを測る。単層の堆積であり、流路方向は底面の標高



調査位置図

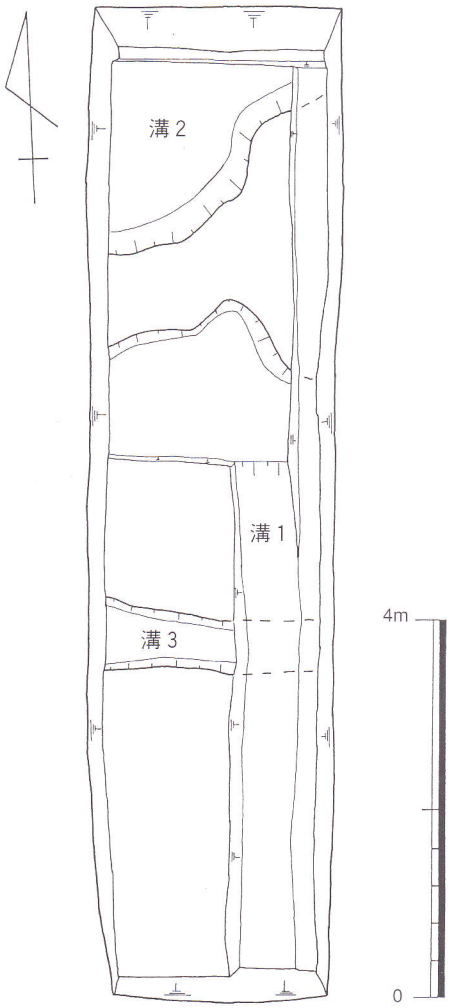
から西から東である。出土遺物から、溝1埋没直後のものとみられる。溝２は調査区北端で検出したもので、検出幅約1.8m、深さ約30cm、検出長約2.4mの規模を測る溝である。土層堆積状況について２層に分層することができた。上層からは８世紀前半の所産とみられる須恵器の破片が出土している。

遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器や中世土師器、備前焼が出土しており、その他自然遺物として獣骨、馬の歯、炭、流木、桃の種子などがある。特に溝１からの出土が顕著で、中には車輪文の当て具痕を持つ須恵器甕や台付鉢など特殊な遺物もみられた。

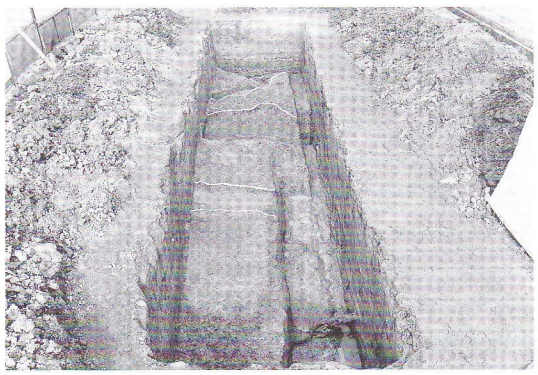
まとめ

今回の発掘調査の結果、古墳・奈良時代の遺構やそれに伴う多くの遺物が出土し、下層の包含層からも多量の弥生土器が確認できた。中でも溝１は幅７m以上を測り、東西の方向性を持つ大規模な溝であり、埋土からは土器類の他に石器・馬の歯・流木などが出土している。特に流木は下層の粘土層から大量に出土しており、遺構の規模や堆積状況も含めて考えると旧河道の可能性が高い。また第６・７層は共に軟質の粘土層であり、調査区周辺は溝１以前にも河川の氾濫原であったと思われる。

次に出土した遺物を観察すると、第５層に包含されている弥生土器は紀伊第Ⅲ～Ⅴ様式併行期のものであり、これらの土器を使用した集落が周辺に展開していたと思われる。これに引き続く時期の遺物は今回の調査では確認されていないが、古墳時代後期には溝１から７世紀初頭～前半を中心とする遺物が多く出土している。また周囲の地形から、溝１の流路方向は東から西であったと想定できることから、この時期の集落の中心はその上流、つまり東側であった可能性が高いといえよう。　　（髙橋方紀）



遺構全体平面図


調査地全景（南から）

【参考文献】
「西吉礼遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成９年度－』和歌山市教育委員会　1999年

29. 中野（なかの）遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市中野11－1番地

調査面積　150m²

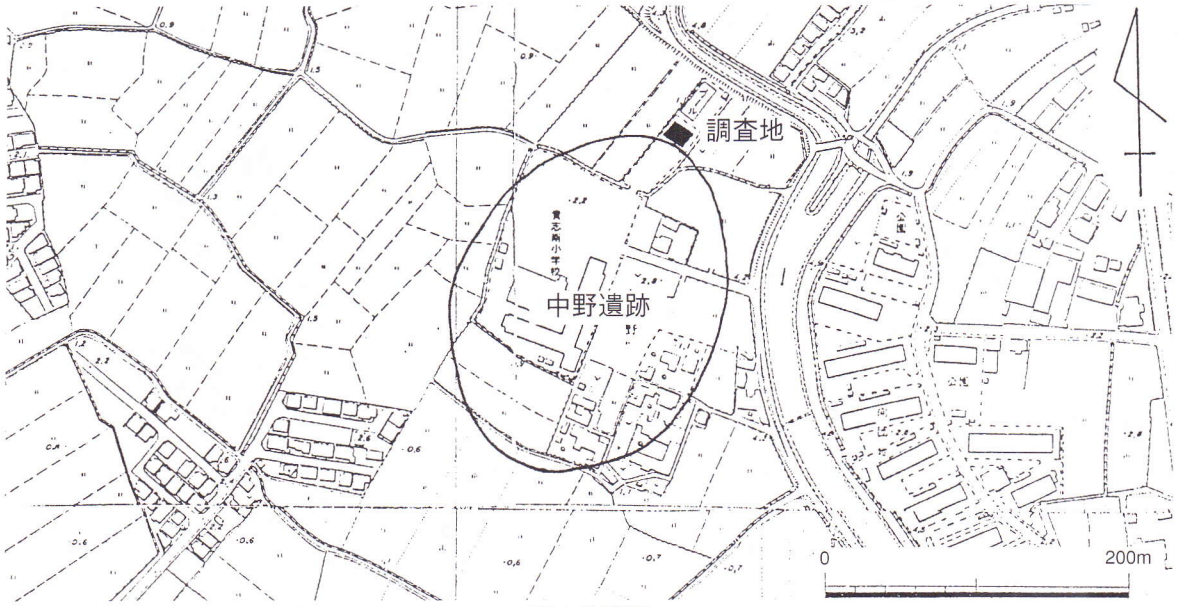
位置と環境

中野遺跡は紀ノ川北岸、和泉山脈から派生する土入川により形成された扇状地末端、標高1m前後の平野域に位置する。本遺跡は、室町時代に勢力を振るった在地の土豪雑賀衆の拠点となる中野城跡と推定されており、文献によると織田信長の攻撃を受け、天正５（1577）年に落城したものとされる。

中野遺跡周辺の中世遺跡について、遺跡西側に位置する西庄Ⅱ遺跡では、鎌倉時代から室町時代にかけての溝や塀で区画された屋敷跡、木之本Ⅲ遺跡では、室町時代の集石遺構群と井戸などが検出されている。また紀淡海峡に位置する友が島北方遺跡からは、多くの中国陶磁器などが引き揚げられており、これらの陶磁器は沈没船の積み荷と考えられ、室町時代に大陸から輸入された陶磁器を積んだ船がこの付近を通過していたことを示す資料である。そうした中で、紀ノ川下流域で勢力を広げていったのが石山本願寺の門徒衆である雑賀衆である。城を築き、鉄砲衆を結成するなど強力な武力をもつ雑賀衆は、織田信長や豊臣秀吉と敵対し攻撃を受けた。紀ノ川北岸の城山遺跡からは、方形に巡らした土塁や門柱の礎石が検出されており、天正５（1577）年の信長紀州攻めの際、織田軍が築城した陣城ではないかと推定されている。このように、当遺跡の周辺は和歌山の中世史を考える上で重要な地域といえる。

調査内容

調査地の基本的な土層堆積状況は現地表である整地土以下、現代の盛土などが合わせて75～110cmの厚みを持ち、本来的な地表面であったとみられる水田耕土（第１層）約15cm、床土（第２層）が約５cmの厚さで堆積する。その下の堆積は上から第３層（2.5Y５/３（黄褐）シルト）が約10cm、第４層（2.5Y５/２（暗灰黄）シルト）が約10cm、第５層（2.5Y４/２（暗灰黄）シルト）が



調査位置図

約20cm、第６層（2.5Y３/２（黒褐）粗砂混シルト）が約15cm、第７層（５Y３/２（オリーブ黒）シルト混細砂）が約15cm、第８層（7.5Y４/１（灰）粗砂）が約10cm以上の厚さで堆積している状況を観察した。

第３・４層は室町時代以前、第５層は鎌倉時代以前の遺物を含み、第６～８層については遺物の出土がみられなかったことから、無遺物の自然堆積層とみられる。出土した遺物であるが、弥生時代のものは弥生土器、叩石、磨石、サヌカイト剥片、古墳時代のものは須恵器壺・甕、土師器、埴輪、平安時代では黒色土器椀、鎌倉時代では瓦器椀、土師器皿・釜、東播系須恵器こね鉢、室町時代では土師器皿・堝、瓦質土器羽釜、中国製青磁碗、備前大甕などがある。

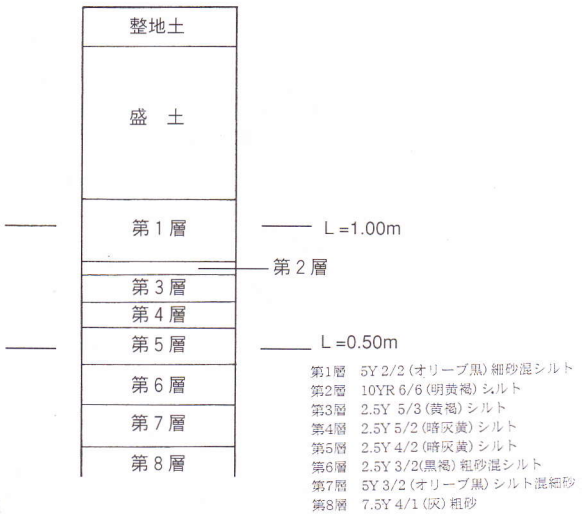
まとめ

今回の調査において、出土遺物の分布状況から中野遺跡の歴史的景観の復原を試みた。方法としては、各層位別に出土した遺物の破片数を４ｍ×４ｍメッシュ毎に集計した。調査区内には様々な撹乱が及んでいたため、第4・５層の堆積を確認することのできた限られた範囲で集計を行った。遺物は第４層から96点、第５層から56点、合計152点が出土した。

遺物の分布範囲及び遺物量からみて、鎌倉時代から室町時代にかけて本調査地の北東方向から東側方向にかけては集落等が展開していたものと推察される。また、当調査地は第４・５層の土層堆積状況及び出土遺物から考えて、水田などの農耕地として利用されていたものとみられる。

隣接する第１次調査では、検出された大溝１（幅７ｍ、深さ90cm、延長65ｍ）を中心として室町時代後期の遺物群が大量に出土した。第２次調査との層位的な対応関係をみた場合、この大溝１の遺構検出面は第２次調査での第４層上面に対応する。第２次調査での第４層は室町時代の遺物包含層であり、大溝１は、その所属時期は室町時代のなかでも後半に掘削された可能性が高い。

以上、大溝１を中心として出土した陶磁器・土器の組成を分析した結果、供膳具は中国製品が卓越し、貯蔵具は備前焼が主体を成し、土師質・瓦質土器がそれを補完する。また、調理具は100％が備前焼で占められる状況を示し、煮炊具は土師器が独占する状況を明らかにすることができた。これらの状況は室町時代の寺院遺跡である根来寺坊院跡の遺物組成と類似するものである。また、中国製染付皿について、天正13（1585）年の根来寺焼亡直前時期のものがみられないことが明らかとなったことなど、中野遺跡は、その立地とあわせ「畠山記」に記載のある天正５（1577）年に織田信長によって攻略された雑賀衆の中野城跡である可能性が高いといえよう。　（奥村　薫）



土層柱状模式図

東壁面土層堆積状況（西から）

30. 秋月（あきづき）遺跡 第７次調査

調 査 地　和歌山市有家86－4番地 他

調査面積　2㎡

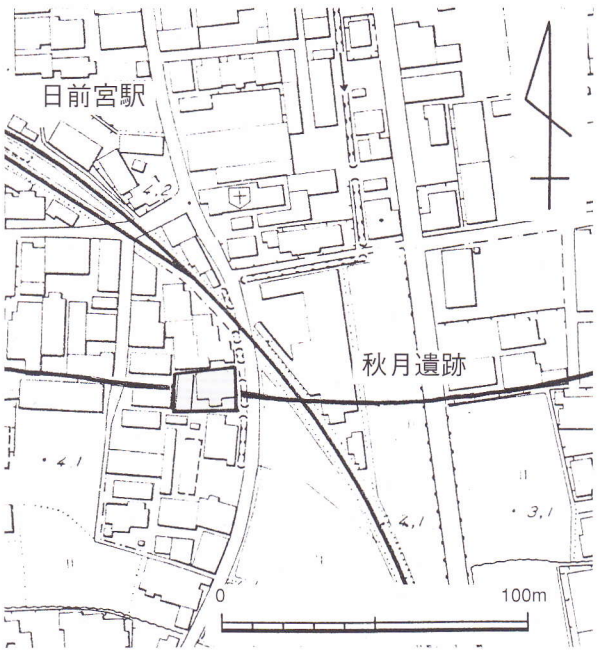
位置と環境

秋月遺跡は、日前・国懸神宮を中心とする東西、南北とも約500m規模の平地の遺跡である。東側には鳴神Ｖ遺跡、南側には津秦遺跡が近接して所在する。遺跡範囲の西端に位置する県立向陽高校内の数次にわたる調査により、古墳時代前期の前方後円形の周溝を伴う墳墓や平安～室町時代の掘立柱建物や井戸が検出され、遺跡東端の市立日進中学校内の調査により古墳時代初頭の方形竪穴住居が検出されたりし、遺跡の実態が徐々に判明しつつある。

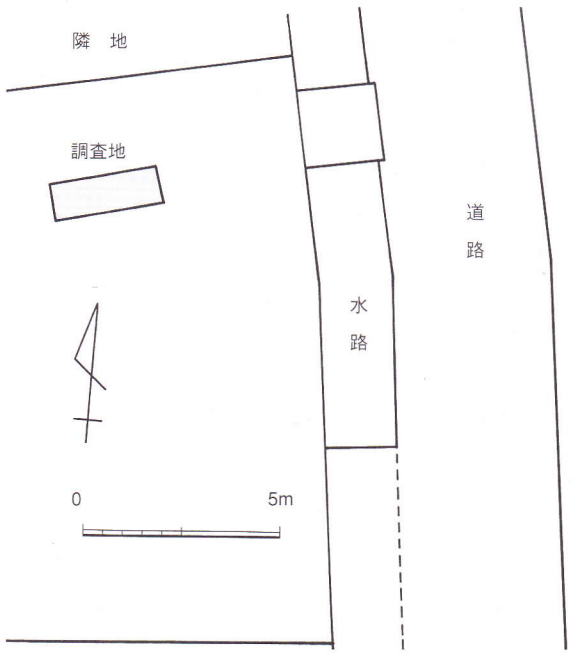
調査概要

調査対象地は、遺跡推定範囲の南端に該当し、個人住宅建築に伴い深く掘削される浄化槽部分について確認調査を実施した。調査区は、東西長2.7m、南北長0.9mである。

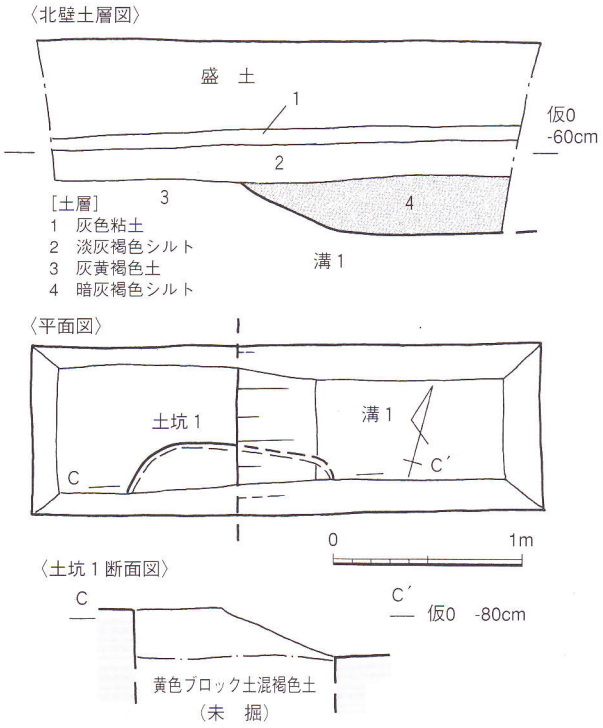
基本土層は、厚さ約50cmの盛土の下層に１層（灰色粘土、厚さ約８cm）、２層（淡灰褐色シルト層、厚さ16～20cm）、３層（灰黄褐色土）がみられ、２層下面に溝１と土坑１が形成される。切り合い関係より、土坑１より溝１の方が新しい。溝１は深さ30cm程度で暗灰褐色シルトを埋土とし、調査区内で底面の平坦部をもつ浅い溝状遺構であり、南北方向にのびている。出土遺物には、瓦器椀・土師器皿・土鍋等がみられ、皿には底面を回転糸切りしたものが多く認められる。土坑１は、直径1.1m以上の円形もしくは隅丸円形のプランをもち、埋土がブロック混じりの褐色土で一気に埋められていることや壁面が垂直に立ち上がる点に特長がある。あるいは、井戸の裏込め部分に相当するのかもしれない。出土土器には瓦器椀（１）・土師器皿（２）があり、溝１と同様に皿の底面には回転糸切り痕が観察される。これらの遺構が形成されたのはともに鎌倉時代であり、近接時期の所産と考えられる。



調査位置図（網掛け部分が対象地）



調査地位置図

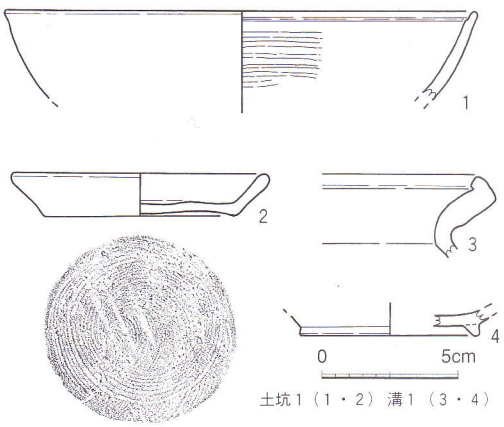


調査地遺構略測図

遺構検出状況（東より）

まとめ

遺跡推定範囲の南端部において、明確な鎌倉時代の遺構を複数検出することができたことにより、当該時期の遺跡範囲としては南方へ拡大して考える必要性が生じたこととなる。遺構の埋土より須恵器が混入品として数点確認されており、周辺における古墳～奈良時代の遺構・包含層についても今後留意する必要がある。　（前田敬彦）



遺物実測図

31. 鳴神（なるかみ）Ⅴ遺跡 第５次調査

調 査 地　和歌山市秋月201－4番地 他

調査面積　２m²

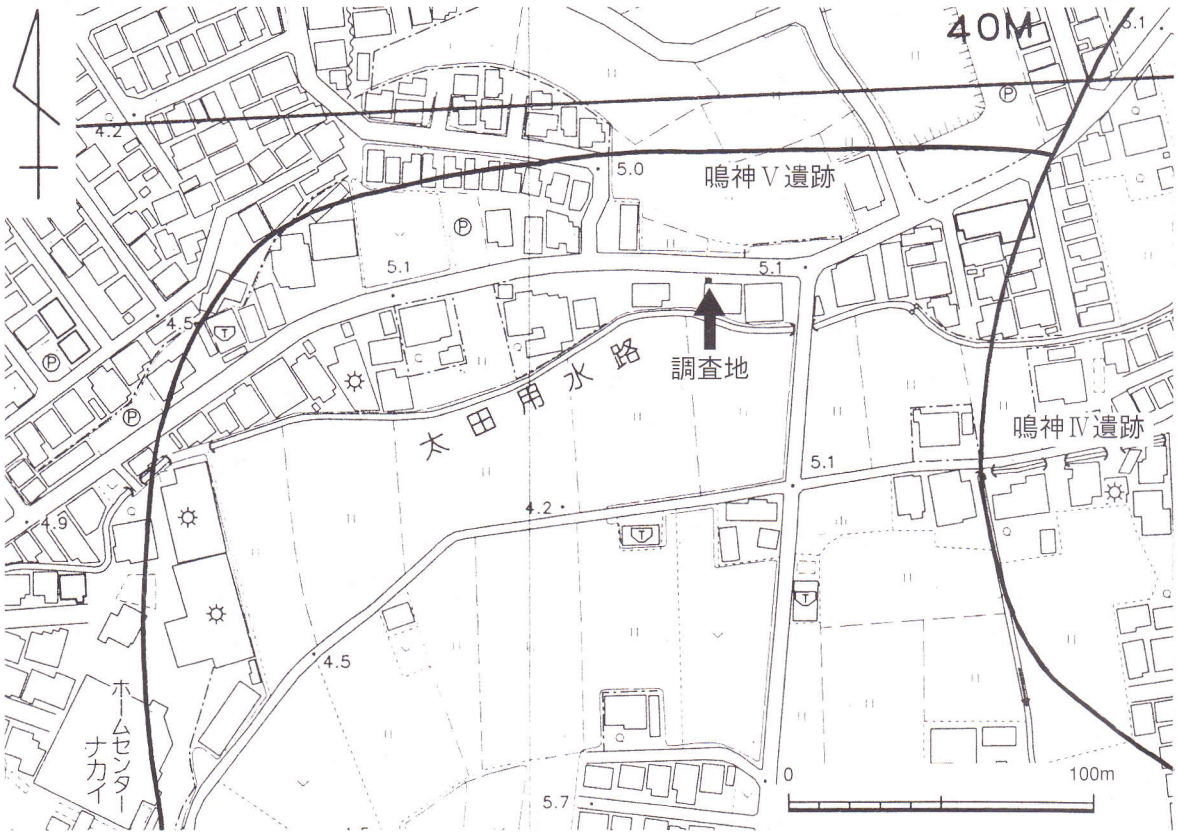
位置と環境

鳴神Ⅴ遺跡は、日前宮周辺の秋月遺跡と花山丘陵西部に位置する鳴神Ⅳ遺跡に挟まれた東西約500m、南北約400mの遺跡であり、既往の調査により、古墳時代の溝が検出されたり、平安時代の土器等が出土したりしている。今回、遺跡推定範囲の北端での個人住宅建設に伴い、深く掘削される浄化槽設置部分について確認調査を実施した。

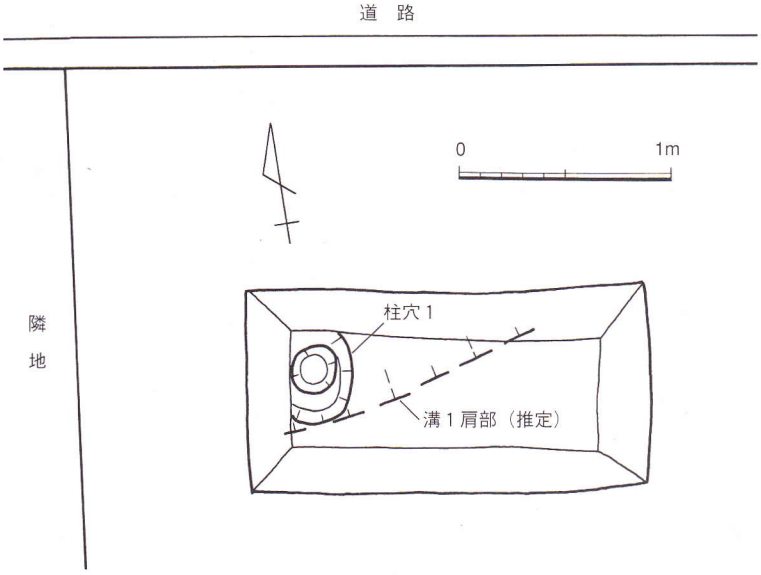
調査内容

住宅建設予定敷地の北西隅部に長さ約1.8m、幅約1.0mの調査区を設定した。地表より盛土、１層（旧耕作土）、２層（床土）、３層（暗灰褐色シルト）、４層（灰褐色シルト。a層・b層に分層可能で、b層の方が灰色強い）、５層（灰褐色粘質土）の堆積がみられ、４b層下面と５層下面が遺構面となる。４層からは、瓦器・土師器・須恵器片が出土しており、４層は鎌倉時代以降の堆積層とみられる。また、絶対高は求めていないが、すぐ北側の道路面の標高を参考にすれば、下層遺構面である５層下面が、標高３m前後になるものと推定される。

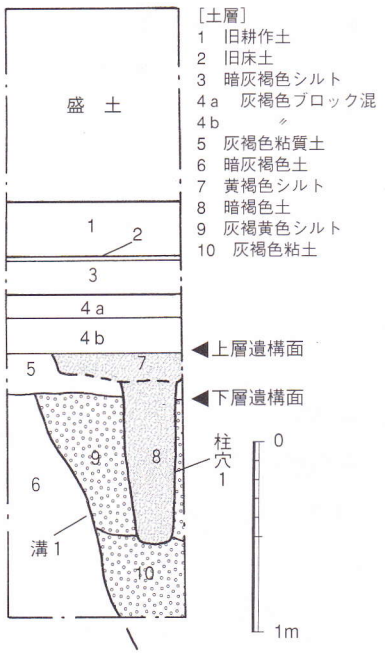
上面の遺構としては柱穴１がある。長径推定約50cm、深さ約10cmの窪み内に暗褐色土を埋土とする直径約28cm、深さ約85cmの柱穴１が形成される。柱穴埋土の８層より、８世紀中葉～後半頃とみられる[註1]須恵器杯が出土しており、奈良時代の遺構と判断される。



調査位置図



遺構実測図



西壁土層模式図

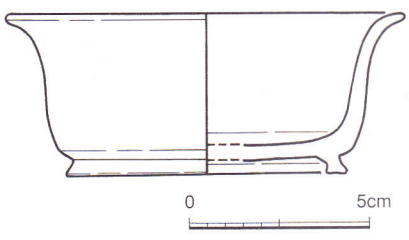
下面の遺構としては、南側肩部を検出したのみであるが、検出面からの深さが1.2m以上にも及ぶ大規模な溝状遺構１がある。肩部の様子から、東西方向に延びるものとみられ、埋土下層より須恵器片２点と土師器片５点が出土し、須恵器は細片ながら古墳時代の所産と思われた。

まとめ

検出された奈良時代の柱穴は、建物遺構の一部であるものと推定された。本遺跡北端部において当該期の遺構が展開していた可能性が指摘できる。ただし、北方約150mの鳴神Ⅵ遺跡の調査では、近世期を遡る明確な遺構面が確認されず、河川の氾濫源の様相を示していることと、本調査地北側で道路を挟んで北方へ地形が低く傾斜することから、本遺跡の北方への展開はさほど広がりをもつものとは考えられない。また、下層の溝状遺構については、古墳時代の大規模な溝 になる可能性があり注意される。さらに、包含層の遺物まで含めて考えるならば、周辺に鎌倉時代の遺構も存在しているものとみられた。

（前田敬彦）

遺構検出状況（東より）



遺構実測図（柱穴１出土）

（註１）
武内雅人氏（和歌山県教育委員会）の御教示による。

32. 史跡和歌山城（しせきわかやまじょう） 第18次発掘調査

調 査 地　和歌山市一番丁３番地

調査面積　約60m²

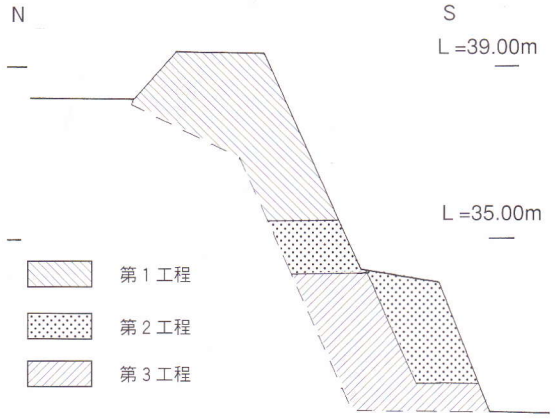
位置と環境

史跡和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。岡山は、東西２つの頂部を持つその景観から虎伏山とも称されており、中央の谷状地形を挟んだ西側には天守閣が、東側には本丸御殿跡が存在する。今回の調査は前年度に行った第17次調査に引き続くもので、石垣内部の構造解明を目的として行ったものである（第17次調査の項を参照）。

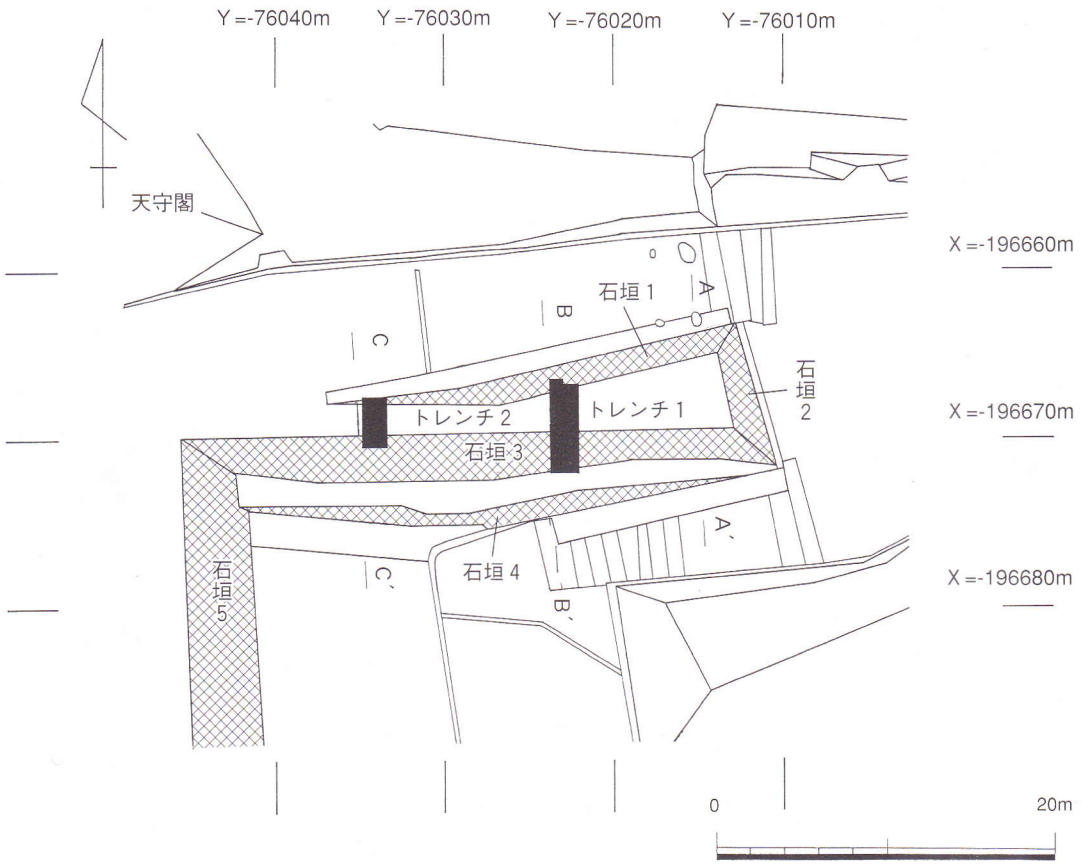
調査内容

石垣の解体作業は３回に分けて行われ、それぞれの解体作業の後に行った調査を第１～第３工程と呼称して実施した。第１工程では石垣に直交する幅約２ｍの調査区を２ヶ所設定した。第２・第３工程においては、調査区下部の状況について調査を行った。

第１工程の調査では、トレンチ１・２及び南側壁面の観察により、石垣１上部の裏込めの状



石垣調査工程模式図



調査地周辺図

況を知ることができた。第２工程の調査では、主に石垣３・４の基底部構築状況などを明らかにできた。石垣３基底部は、中央部では低く緩やかな弧を描いており、石垣４の天端から約１m下、標高32.50m付近から構築されている。また石垣４は岩盤を掘り込んだ上に直接据えてあり、裏込め石を詰めている。基底石の位置から考えて一連の作業によるとみられるが、石垣４は石垣３より先行して築かれたものと考えられる。また第３工程の調査では、石垣４の断面と石垣３下部の検討によって、石垣が谷状地形を整地して構築していることを確認することができた。

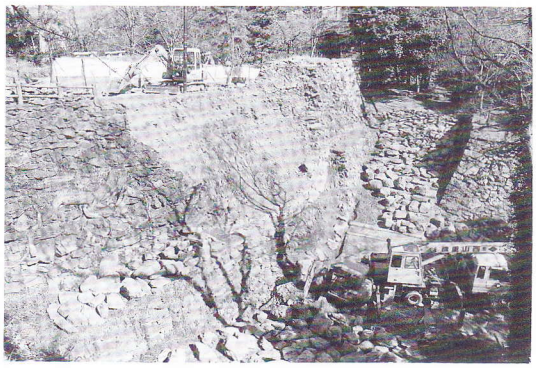
出土遺物には瓦器、土師器、焼締陶器、瓦、石製品、石造物がある。これらはすべて石垣の裏込めから出土したものであり、特に石製品と石造物は裏込め材として転用されたものと考えられる。

まとめ

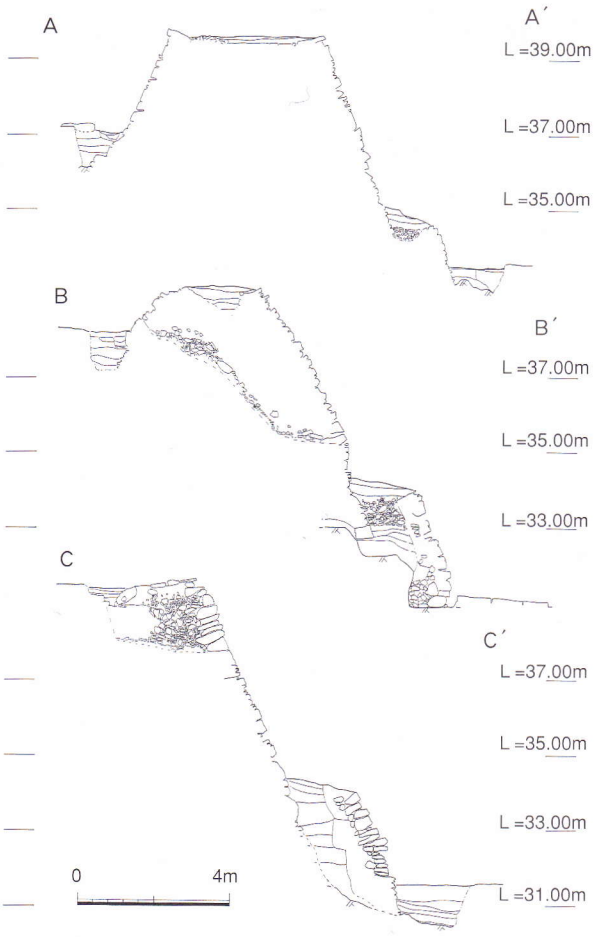
今回の調査では、第17次調査の成果に対して追加、再検討を行い、石垣の構築方法及びその順序を明らかにすることができた。

石垣の勾配は石垣１が65度、石垣２が69度、石垣３が65～70度、石垣４が68～73度であり、野面積みの石垣としてはかなり急な勾配をもつものであるといえる。石垣本体のほとんどが結晶片岩を使用しているのに対して、裏込め石は砂岩が非常に多い。石臼や石仏などの石造物も多く転用されてることが特徴的なことである。天守台石垣でも同様の石材の転用がみられることなどから御天守一ノ御門櫓台は天守台とほぼ同時期に構築されたものと考えられ、和歌山城の創建期に天守台とともに成立した可能性が高い。

石垣の構築方法であるが、整形した岩盤の上に基底石を据える形を基本としている。基底石は全体的に小振りなものが用いられている。またD区東側のように急な勾配の地形では、岩盤を横方向に階段状に掘り込むことによって勾配を8.5度に押さえ、石材の積み上げを容易にする工夫がみられる。調査の結果とあわせて石垣の構築順序をまとめると、石垣５をある程度の高さまで積んだ後、石垣４を構築する。石垣４の裏込め上から石垣３及び石垣１・２を積み上げていき、最終的に石垣５を石垣３に当てる形で積み上げるといった構築過程を推定することができる。（高橋方紀）



調査地全景（南西から）



石垣断面図

33. 太田（おおだ）・黒田（くろだ）遺跡 第43次調査

調 査 地　和歌山市黒田157－1番地

調査面積　250m²

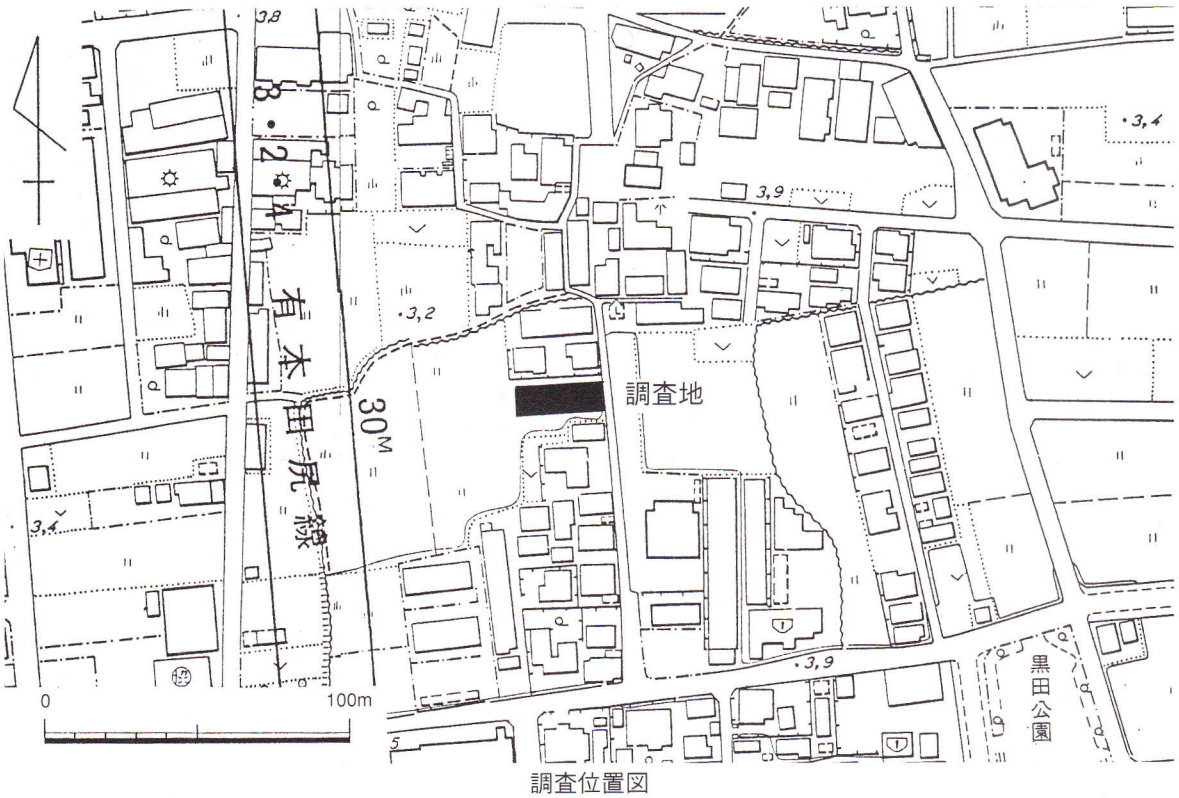
位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川南岸の沖積平野に立地する。遺跡は弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模の集落跡として知られ、竪穴住居や土坑墓、井戸などの遺構、銅鐸や多量の弥生土器などが検出されている。今回の調査地は、太田・黒田遺跡北縁部の標高約3.7mを測る地点に位置する。周辺の調査について、1994年に調査地南西側約50m地点で第23次調査が、また同年に調査地南東側約150m地点で第24次調査が本財団により行われている。第23次調査では古墳時代後期の溝、弥生時代中期の土坑などが、第24次調査では弥生時代中期の溝・土坑・壺棺などが検出された。また、第24次調査地の南約50m地点の黒田公園で1970年に銅鐸（外縁紐式）が出土している。以上のことから、調査地周辺部では弥生時代から古墳時代の遺構が展開していたことが明らかにされている。

調査区近景（東から）

調査内容

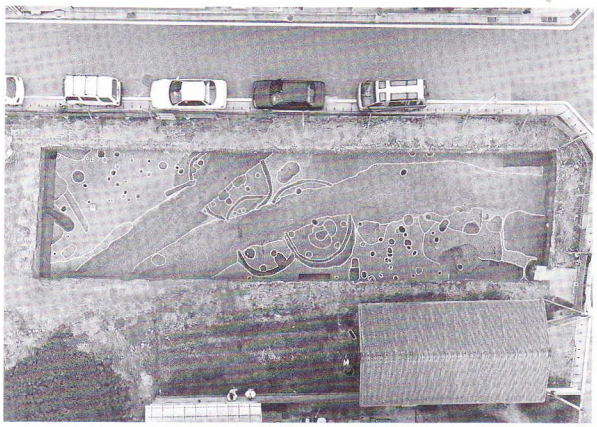
調査は、東西約31m、南北約８mの調査区を設定し、実施した。土層堆積状況の観察から調査地北

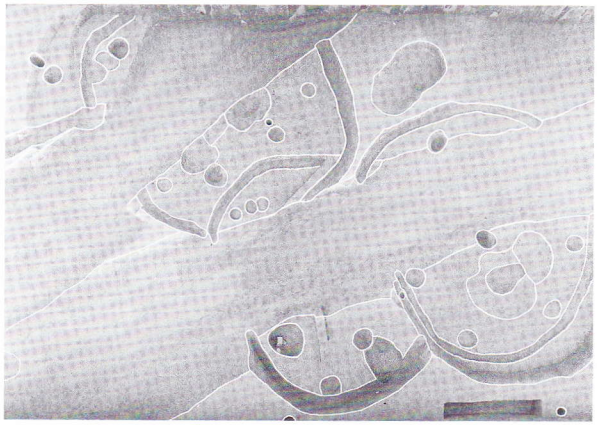


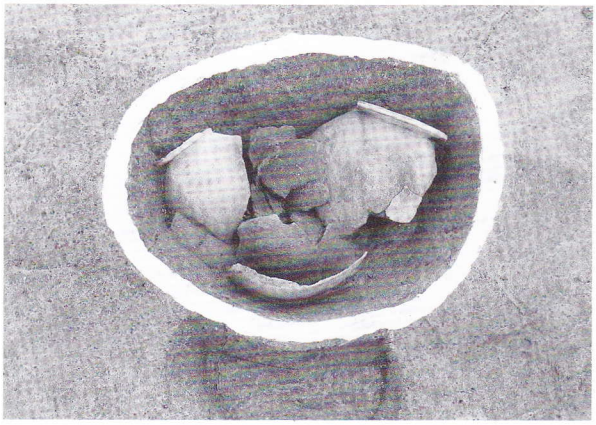
調査位置図

側では東西にほぼ水平堆積をとるが、南側においては各堆積層が北側に比べ10cm程度高く堆積することを明らかにした。

遺構面については２面検出した。第２遺構面では、弥生時代中期の竪穴住居４棟、大溝１条、土器棺１基、土坑・ピット、古墳時代前期の大溝１条などを、上面の第１遺構面では、鎌倉時代の溝を３条検出した。　遺物について、弥生時代では前期から中期後葉にかけての土器類があり、特に中期中葉から後葉にかけてのものが多量に出土した。石器はサヌカイト製石鏃・尖頭器・石錐・スクレイパー、石庖丁・太型蛤刃石斧・朱の付着した石杵・叩き石・凹石・砥石などがある。古墳時代の遺物は土師器壺・甕・高杯や須恵器蓋杯・有蓋高杯蓋などがある。また碧玉製管玉が２点出土した。


調査区全景（上が北）


竪穴住居群（上が北）


土坑１遺物出土状況（北から）

まとめ

今回の調査では弥生時代中期中葉から後葉にかけての竪穴住居４棟を検出したほか、調査区東端周辺において竪穴住居の可能性のある土坑を４基検出した。本遺跡において、現在までの調査で弥生時代前期末から中期後半の竪穴住居を約30棟検出しているが、これらは平面形が円形あるいは楕円形であり、床面のほぼ中央部に炉をもつものである。今回の調査で検出した竪穴住居は畿内第Ⅳ様式の前葉から中葉頃に併行する時期のものと考えられることから、過去の調査のなかでも最も新しい一群としてとらえることができる。これらの平面規模は、直径４～６mを測るものであり、平面形が楕円形のものや隅円方形と考えられるものである。今回検出したこれらの竪穴住居は平面形からみて、円形から隅円方形へ移行する時期の資料であるといえる。

（北野隆亮）

【参考文献】
『太田・黒田遺跡　第43次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998年

34. 秋月（あきづき）遺跡 第６次調査

調 査 地　和歌山市秋月365-3番地

調査面積　260m²

位置と環境

秋月遺跡は秋月の地に鎮座する日前・国懸神宮の周辺に広がる弥生時代から平安時代にかけての遺跡である。この神宮の西側に隣接する県立向陽高校の敷地内から県内では最古とされる古墳時代前期の前方後円墳が、また東側では竪穴住居が検出されており、古墳時代の遺跡としてもよく知られている。この周辺は、紀ノ川南岸の条里が良好に残る地域であり、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く出土することで注目される地域の一つとされる。

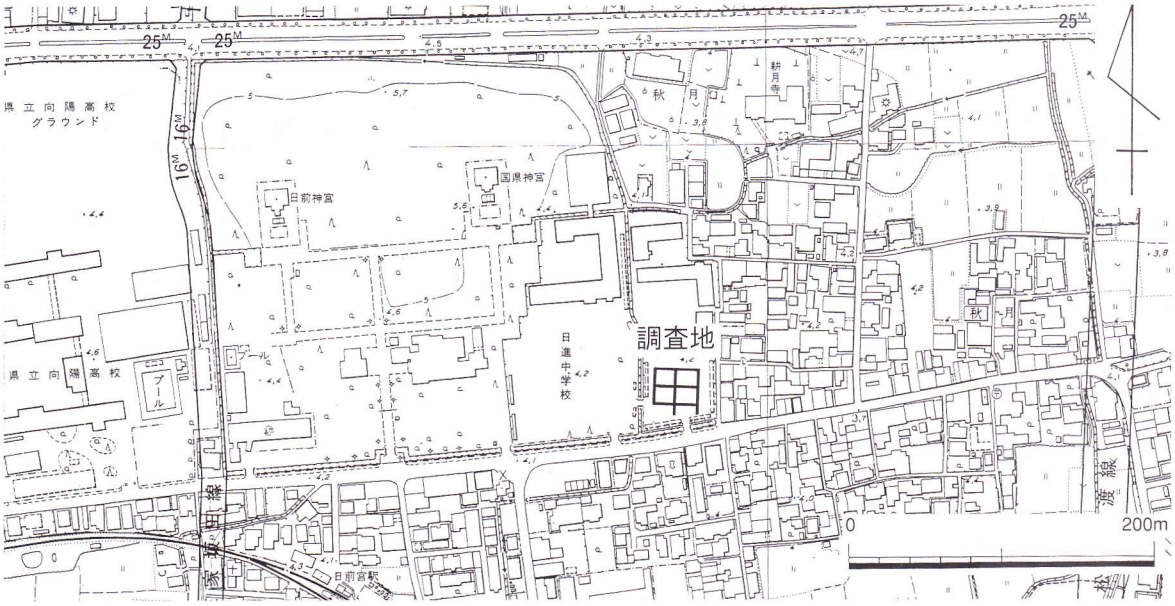
今回の調査対象地は、遺跡の東端にあたり、神宮の東側に隣接する市立日進中学校の東運動場に位置する。

調査内容

この調査は、工事計画範囲において遺跡確認を目的としたもので、「田」の字状に設定した幅1.5m、総延長170mのトレンチ調査である。当地は表土（グラウンドの整地土）下は、調査区全体に近代以降の整地層（第１～４層）が堆積し、江戸時代の溝３を境として北側はこの整地層下が古墳時代以降の遺構検出面となり、また南側は整地層下に江戸時代の遺物包含層が堆積している。このベース層は、厚さ20～40cmを測る黄褐色系のシルト層であり、わずかに弥生時代前期の遺物を含む。さらに下層の状況は、粗砂になる部分（第８層）と粗砂混ざりの径２cm大を測る河原石層に分かれ、この下層はオリーブ褐色系の粗砂が堆積している。

さらに、第４トレンチ南端において旧河道の肩部とみられる落ち込みを検出し、弥生時代前期の遺物が出土したことから、この旧河道は弥生時代前期に埋没したものと考えられた。

次に遺構では、古墳時代前期の土坑36・37があり、中期以降では土坑34や溝状遺構17がある。このなかで、前期後半の布留式併行期新段階の土坑37は、調査区西壁外にのびるため全体は明らかでないが、径約70cm程度の円形とみられ、遺構検出面からの深さ1.5m、残存する深さ0.8m、底面の



調査位置図

標高2.3mを測り、覆土には多量の土師器（壺・甕・高杯・鉢）が含まれていた。この状況から、この土坑は素掘りの井戸の可能性があり、廃棄時に土器による祭祀が行われたものと考えられる。

古墳時代以降では、奈良時代の溝状遺構４、鎌倉時代の溝状遺構９・10・14や土坑29があり、なかでも土坑29からは多くの瓦器椀が出土した。また江戸時代の遺構では第２トレンチとほぼ平行する溝３や溝状遺構１・２、いわゆる瓦溜り状の土坑５・９・20・21などがある。

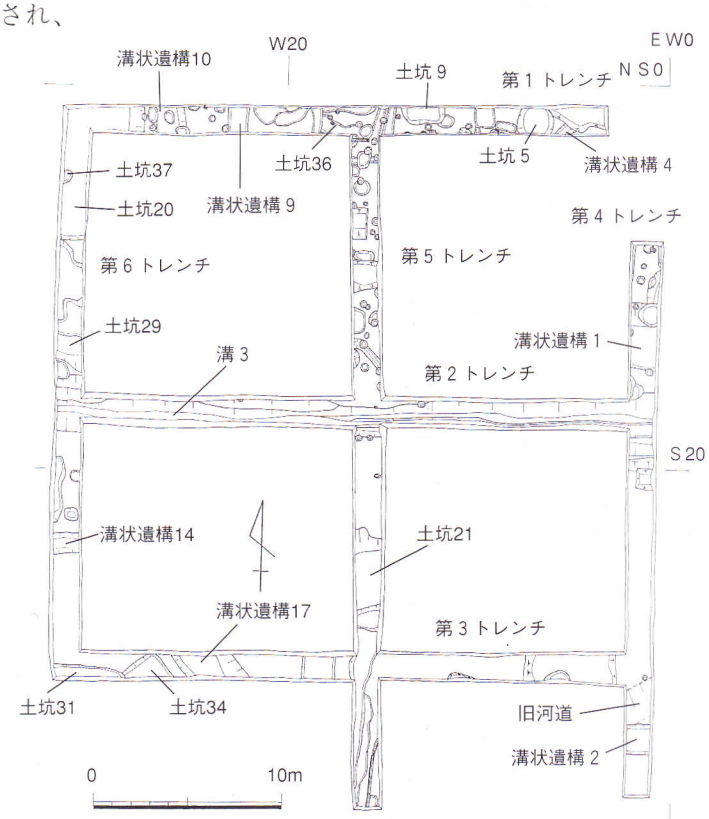
この調査では、弥生時代前期から江戸時代に至る時期の遺物が出土した。特に、古墳時代のものでは、土坑37から前期の布留式併行期の壺・甕・高杯などが一括出土し、平安時代とみられる瓦や鎌倉時代の瓦器椀が一定量出土した。江戸時代の遺物は最も多く、溝３や土坑20などから多量の陶磁器や瓦などが出土した。また特殊な遺物では、石製品である網の錘の鋳型や石筆、火打石や銭貨である景祐元寶・皇宋通寶（宋銭）などがある。

土坑37遺物出土状況（東から）

まとめ

今回の調査地周辺の変遷は、まず弥生時代では第４トレンチ南端で検出した大規模な旧河道（紀ノ川の一支流？）が弥生時代前期もしくはそれ以前に存在し、この旧河道の影響から当地は下層にすべて礫層が堆積し、氾濫源であったことが推察できる。弥生時代中期には先述の礫層の上層にシルト質の土層が堆積し、微高地化が進むとみられる。そして、古墳時代前期には安定した生活面が形成され、集落の一部としてその範囲に含まれたものといえる。古墳時代以降の状況は、奈良時代の遺構である溝状遺構４や鎌倉時代の土坑29などを検出し、集落の範囲内であると同時に平安時代の後期頃に建立されたとされる「神宮寺」との関係も問題視される地点である。この調査では、平安時代頃のものとみられる唐草文軒平瓦の中心飾りが四弁の花弁をもつものや平瓦に成形時の格子タタキが明瞭に残るものなど古い様相の瓦が出土したことなどから、近辺に存在したとされる「神宮寺」との関係が考えられるところである。

（井馬好英）



遺構全体平面図

【参考文献】
『秋月遺跡 第６次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 1998年

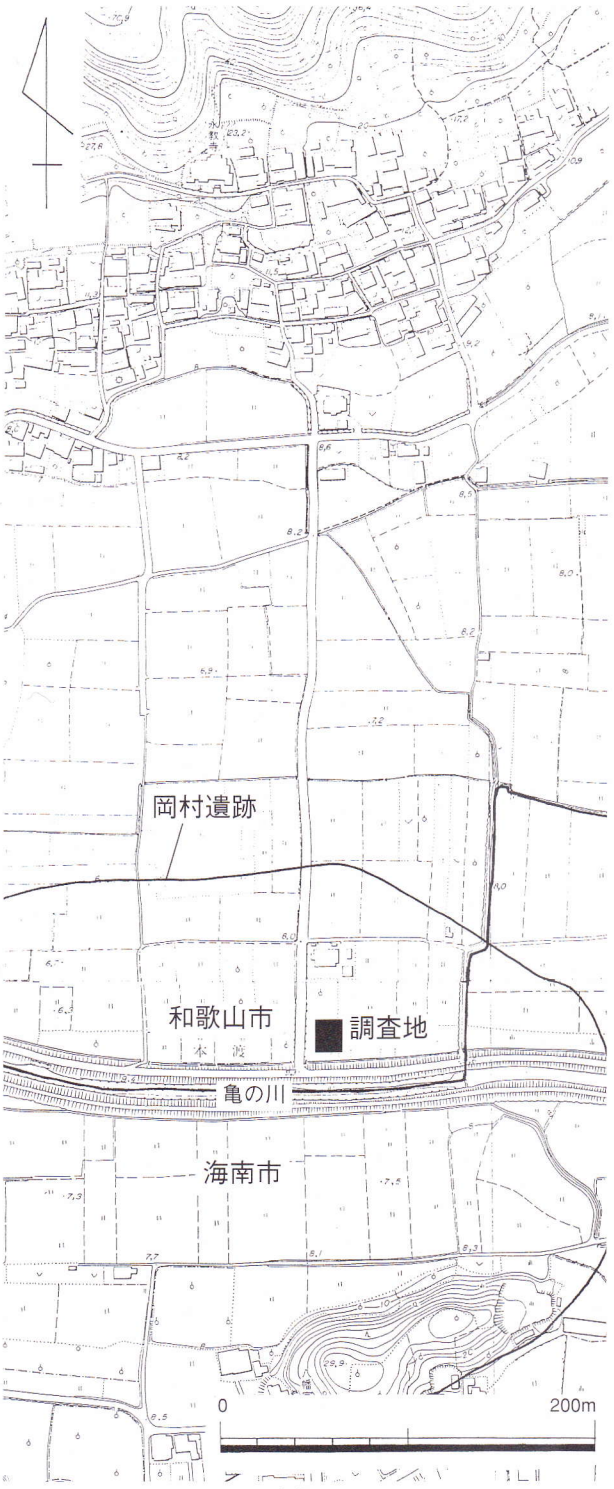
35. 岡村（おかむら）遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市本渡10-1番地

調査面積　約132m²

位置と環境

調査地は、海南市との境に当たる和歌山市南端の平野域のほぼ中央部に位置する。岡村遺跡は、遺跡内南側を流れる亀の川を挟んで和歌山市と海南市に広がり、縄文時代から江戸時代に至る複合遺跡として知られる。また調査地周辺は、現在においては亀川条里と呼ばれる条里制土地区画の景観を良好に残した農耕地として利用されている。



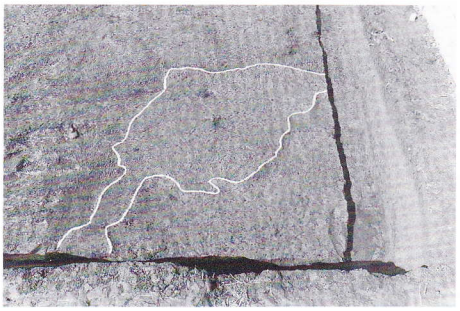
調査位置図

調査内容

調査地の土層堆積状況は、現地表面である耕作土（第１層）、床土（第２層）、旧耕土（第３層）、中世の遺物包含層（第４層）が堆積しており第４層下面において遺構を検出した。また調査区東側に広がる第5a・5b・5c層は観察の結果、河道の氾濫によるものであり、古墳時代後期の堆積と考えられる。第６層から第９層までは、東から西に向かって緩やかに傾斜して堆積しているほか、遺物を出土しないことから自然堆積層と考えられる。

遺構は、調査区の東側において大溝を検出した。この溝は弥生時代中期の河道とみられ、これより西側において同時期の遺構である溝１条、土坑を５基検出した。また大溝がほぼ埋没した上面において弥生時代後期の水田遺構を検出した。しかし、この水田遺構は古墳時代前期に河道の氾濫を受けて大部分を削平されている。遺構は第４層下面において、弥生時代中期から後期にかけてのものを検出することができた。調査区の東側で検出した大溝は、中期後葉の河道とみられるが、中期末から後期前葉にかけて河道がほぼ埋没した後に水田化されたものと考えられる。調査区西側では、弥生時代中期の溝１条、土坑５基を検出した。これらの他に、

西側において河川氾濫に伴い形成されたとみられる弥生時代中期の落ち込み状の堆積を確認することができた。調査区北東側において、古墳時代前期の河川氾濫に伴い形成されたとみられる落ち込み状の堆積を検出した。これは、河川氾濫に伴う一時期の流路であるとみられ、調査区内において水田遺構の大部分を削平するものである。検出規模は、幅約５m、長6.5m以上、最深部で約20cmを測る。埋土内から庄内式～布留式併行期とみられる遺物が出土した。遺構面の標高は約6.5mを測る。


水田検出状況（東から）

出土した遺物は、縄文時代では後期の浅鉢１点であり、上流部からの流入した遺物であるとみられる。弥生時代のものは土器、石器、木器、種子などで、前期から後期にかけての各時期のものがあるが、そのなかでも特に中期後葉の時期のものが主体である。中期では特に壺、甕、高杯、鉢などの他、赤色顔料を塗布した壺、多孔土器、ミニチュア土器、台形土器などがある。石器については、石鏃、スクレイパー、石庖丁、叩石、磨石、砥石、石庖丁未製品などがあり、木器では板、自然遺物では種子（桃核）などが出土している。古墳時代の遺物については前期の土師器が少量出土した。

まとめ

今回の調査について、遺構の変遷を弥生時代中期、後期、古墳時代前期の３時期に区分することができる。調査地は弥生時代を通じて西側部分は微高地、東側は微低地であったものと考えられる。以下、弥生時代中期、後期、古墳時代前期の時期別に遺構変遷を説明する。

先ず、弥生時代中期の遺構は西側微高地上に展開しており、東側については微高地縁辺部に掘削された河道内であった。微高地上遺構群の性格は不明であるが、土器を多く出土することなどから集落縁辺部に相当するものであると考えられる。

後期には東側の旧河道の埋没が進行して微低地となり、その微低地部分を水田として開発したものとみられる。西側微高地上については、この時期の遺構は認められない。水田遺構については古墳時代の河道氾濫による流路の貫入によって検出面の多くの部分を失っているが、調査区北東隅に検出した畦畔及び水田面を基に壁面土層の堆積状況の観察所見から小区画水田を推定復原することができた。水田区画の１単位は、太田・黒田遺跡第26次調査検出の弥生時代中期の小区画水田に類似するものである。畦畔の幅は、基底部では、東西1.0m～1.2m、南北方向約0.8mを測る。水田遺構は西側微高地縁辺部の地形方向に沿って作られており、これより東側一円に展開しているものと推定することができる。

古墳時代前期には、微低地部分に氾濫の際の流路がみられ、水田を営む事ができない一時期があったことを推定することができる。その後の変遷は明確ではないが、少なくとも鎌倉時代頃には土地は安定し、調査地を含む周辺地は水田地帯として機能していたものと考えられる。

今回の調査で岡村遺跡の弥生時代後期の水田を検出し初めて岡村遺跡の生産域についての資料を得たこと、赤色顔料を塗布した壺などの祭祀遺物の出土から本調査地が祭祀空間の一角であった可能性を指摘したことなど岡村遺跡の性格の一端を明らかにすることができた。　　（奥村　薫）

Ⅲ．普及啓発活動

1．書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第14集　『太田･黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報』　（平成８年11月）
第15集　『府中Ⅳ遺跡 第２次発掘調査概報』　（平成８年12月）
第16集　『中野遺跡 第２次発掘調査概報』　（平成10年３月）
第17集　『木ノ本Ⅲ遺跡 第９次発掘調査概報』　（　〃　）
第18集　『友田町遺跡 第２・３次発掘調査概報』　（　〃　）
第19集　『秋月遺跡 第６次発掘調査概報』　（　〃　）
第20集　『太田･黒田遺跡 第43次発掘調査概報』　（　〃　）
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報４』―平成６（1994）年度―　（平成９年３月）
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報５』―平成７（1995）年度―　（平成10年３月）

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』―平成８年度―（平成９年３月）和歌山市教育委員会発行

2．和歌山市文化財ニュース発行

文化財に対しての理解を深めてもらうために、市内の小、中学校と一般の方々を対象に『和歌山市文化財ニュース』を発行した。

No.20　「和歌山城の発掘　その３」　1996年６月（平成８年度）
No.21　「地震の跡を発掘する」　1996年11月（　〃　）

3．報告会等の開催

和歌山市教育委員会と共催で報告会等を実施した。

雄湊小学校児童対象の埋蔵文化財説明会
　平成８年５月20日　雄湊小学校体育館　参加者６年生児童約70名
木ノ本小学校児童対象の埋蔵文化財説明会
　平成８年５月31日　木ノ本小学校体育館　参加者６年生児童約170名
府中Ⅳ遺跡第２次調査現地説明会
　平成８年８月11日　参加者約150名

4．速報展等の開催

和歌山市立博物館と共催で速報展を実施した。

『第２回和歌山市埋蔵文化財速報展「発掘物語'97」』
　平成９年４月26日～６月８日

平成12年３月31日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報６
―平成８年（1996）・９年（1997）年度―

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29番地
印　　刷　西岡総合印刷株式会社

ⓒ(財)和歌山市文化体育振興事業団　2000

木ノ本III遺跡　第９次調査出土和鏡